
不幸喰い～僕を癒す者～

陽向暖

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

不幸喰い〜僕を癒す者〜

【Nコード】

N7770E

【作者名】

陽向暖

【あらすじ】

篠塚圭太は、亡き母の再婚相手である恭平と二人暮らしをしていた。そんな篠塚家に、精神科医である恭平の助手として、ひとりの男が住み込んでくる。柳沢龍という名のその男は、なぜか圭太に「楽しいことや、興味をもてることはあるか？」と献身的に話をしてきた。しかし、他人が苦手な圭太はそんな龍を邪険に扱う。その夜、さっさと眠りについた圭太の部屋に侵入してきた龍は、寝込みを襲うように圭太にキスをして……。コバルト2008年度ロマン大賞第一次予選通過作品。

プロローグ

「お前なんだろう！」

怒声は、扉を抜けて家中を響き渡った。時刻はもう夜中だから、外へまでも声は響いているかもしれない。

閑静な住宅街は、男の叫びに包まれた。

そんな声にも、女は顔色一つ変えなかった。

「お前と一緒になつてから、俺はずっとこうだ！ 毎日毎日仕事に明け暮れているのに、努力は一向に実らないつ。それどころか嫌なことばかりだ！ 全部お前のせいなんだろう！」

「言いがかりだわ。わたしが何をしたの言っの？」

「うるさいっ、うるさい！」

女性にしては低めの声が、淡々と言葉を紡いだ。そんな声を聞き取くなさそうに、男は耳をふさぐ。

「おかしな人。わたしと出会って幸せだと言ったのに」

「違うつ。あれは麻薬だ！ 俺の神経をおかしくさせていた……っ」

男は震えた。その感覚を思い出したのだ。それは確かに、——歓喜だった。

しかし、魔は確実に男の体を蝕む。

一度抑えた言葉を、男は耐え切れなくなったように吐き出した。

「この……、魔女め！」

スツと女が目細める。それは怒りではない気がした。だけど、もっと恐ろしい感情を抱いたのだ、この女は。男は恐怖に身震いした。

二人の距離が近くなる。飲み込まれる。肩で息をしようとしても、まるで男の体は呼吸の仕方を忘れたようだった。

「魔女、ね。でももう、あなたは魔女の虜だわ」

目を細めて、口角を上げる。美しい笑みだった。妖かと思うほどに。

男は首を振った。この妖艶さに騙されたのだ。愛したのは女でなく、女の醸し出す妖気。

また一步、距離が縮まった。

「わたしがなくなっちゃ、あなたは一生不幸なまま」

足が固まったように動けない。無理に後ろに下がろうとして、男の体は地に倒れた。それでも必死に首を振って、懇願する。

「やめろ……っ」

「愛しているわ」

女は、男を跨ぐように四つん這いになった。逃げられない男を、さらに追い詰めるように顔を近づける。

唇が触れあった。

また、堕ちていく。

1 こころの守り方

——お母さんのこと、好きなんだな。

——ううん。

それはたぶん、俺がこの人生で紡いできたうちで一番、残酷な言葉。

——大嫌い。

アイロンで真新しく見える夏服のシャツに袖を通すと、篠塚圭太しのづかけいたは自室を出た。六月下旬のこの季節は、朝が一番過ごしやすい。階段を下りて、廊下を左折。突き当たりを右に曲がる前に、真白な扉が圭太の視線を奪った。

圭太の母は、ピアノリストだった。息子である圭太も当たり前のようにピアノを弾いた。だからこの部屋は、朝も昼も夜も、美しい音色を奏でていたのだ、四年前までは。

室内は扉と同じ白塗りで、真っ黒なグランドピアノが一台、部屋の釣り合いをとっている。けどその頃圭太はピアノをやめ、ピアノリストだった母は交通事故で死んだ。以来父が時々掃除に入る以外では、この部屋は開かずの間も同然だ。

歯を食いしばれば、振り切るように扉から目を逸らし、体を右に向けてリビングへと向かった。

圭太がリビングに入ると、そこは既に香ばしい朝食の匂いに包まれていた。ちょうどよく焦げ目のついた目玉焼きと、熱々に焼かれた魚にかけられた醤油の、甘いけどつんとした匂いが鼻を掠める。

朝食を一通り眺めてから、圭太は視線をキッチンの男性に移した。大きな背中がこちらを向いている。でも隣に並んだら、本当は圭太の方が身長は高いのだ。

「あ、圭ちゃん。おはよう」

ご飯を盛った茶碗を両手に、男性は振り返った。テーブルまで来ていた圭太に気付き、挨拶する。

「おはよう、父さん」

母が亡くなり、元は他人だった彼との父子生活にも、随分慣れたと思う。彼、篠塚恭平は母、律子の再婚相手。そんな彼を父さんと呼ぶのに違和感がなくなったのは、いつからだっただろう。

「今、味噌汁よそうから。箸だしてくれる？」

「うん」

言われるなり、圭太はテーブルの端にある箸立てから、二組のそれを手に取った。そこには一組、ピンクの箸が残る。律子のものだ。何も言わなくても、この家から母の私物は一つとして動かされてはいない。今も、四年前も、まるでここに母は存在するかのよう。

恭平の茶碗と自分の茶碗の前に、綺麗に箸を置いて圭太は席に着いた。遅れて、味噌汁を持った恭平が席に着く。

「いただきます」

二人一緒に手を合わせて食事を開始した。血縁のある親子ではないけれど、口数が少ないところは、二人はよく似ている。人一倍よく喋る人だった律子がいなくなっただけからは、食卓は静かな空間になった。

「ああ、そうだ。今日は早く帰ってきてね。助手の人が来るから」

「今日だっけ？」

おもむろに開かれた恭平の口から出た言葉に、圭太は魚をほぐしていた手を止めた。

数日前に、精神科医である恭平が助手を雇ったのは聞いていたが、事実来るのが今日だと言われると、この数日を一気にあつという間に感じた。

雇うだけなら圭太にはさして関係のないことだが、その助手とやらは住み込みらしいから、初対面の人が苦手な圭太には一大事だ。「うん。せっかくだから、早めに仲良くなりたيدろう？ 圭ちゃんとは七つしか違わないし、僕より君の方が、彼も親しみやすいと

思うから」

「……どうだろうね」

冷めた返事をするなり、圭太は再び魚をほぐすのに没頭した。

他人との交友関係を築くのに大切なのは、年の差よりも性格だと思ふ。

学校への坂道をひたすらに登りながら、圭太はそう思った。この理論が正しいなら、自分と交友を持ちたいと思う人間などいないだろう。

空はどんより灰色の綿を掛け、地面との距離はいつもより狭い。天と地を、そのまま一体にするために押しつぶそうとしているようだ。自分の性格は、この空に似ているかもしれない。

薄暗く、重く、どんよりと。嫌になる。

「けーいたっ！」

ぼうつと歩いていた背中を、後ろからどつかれた。相手が誰かは確認しなくても分かっている。だからこそ、圭太はうんざりと振り返った。

思ったとおり。そこには自分と同じ、ワイシャツに白のベストと、少しよれ始めたリボン、夏用に薄地に変えた、緑のチェックのスカートをはいた、長い髪の少女がいた。斜めに分けられた前髪と、潑刺とした顔つきはいつの間にか大人びたと思う。しかし笑った顔は、昔と変わらず幼いことも、もちろんちゃんと知っている。

圭太の幼なじみ、伎倉香苗だ。

「……おい。圭太？ 何ボーっとしてんのよ？ 圭ちゃん？」

「っ、その呼び方やめろよ」

「昔はそう呼んでたじゃない。おじさんは今も圭ちゃんって呼んでるんでしょ？ 何でおじさんはよくてあたしはダメなの？」

香苗がむうつと膨れてみせる。それは将来有望とされたバイオリニストの顔ではないと思った。

香苗は、圭太がまだピアノをしていたところに、律子が講師も務めていた音楽スクールで知り合った。以来バイオリンで成功した彼女は、音楽界ではそこそこの名の通る人間へと成長している。高校に入ってから再会するまで、そんなことはまるで知らなかったが。

「父さんは、今更変えにくいんだろ。きつと呼び捨てにもしにくいんだろうし」

「だったら圭太から言っておきなさいよ。呼び捨てでいいよって。まあ、おばさんの事も律子さんって呼んでたし、言ったところで変えそうにないけどね、おじさんは」

見え始めた白い校舎を目指して、香苗が歩き出した。道はずっと坂だから、あまり距離を取りすぎると、その短いスカートの中身まで見えてしまいそうで、圭太は一步後ろを着いていくように歩き出す。

ちらほらと、他の生徒の後ろ姿も目に入ってきた。

「でも、圭太がおじさんと上手くいつててよかった。最初全然おじさんに懐いてなかったからさ、おばさん心配してたよ？」

「大きなお世話だよ。つか、母さん、そんなことまで伎倉に言ってたの？」

「あー！ 今伎倉って言った！ 昔みたいに香苗って呼んでて言ってるじゃん」

「なんで」

圭太が怪訝そうにそう訊ねるから、香苗は一気に顔をしかめて、振り返っていた体ごと前に向き直った。そんな態度をとられても、思春期を過ぎた男と女なのだから、自然と呼び方や態度なんて変わっていくはずだ。圭太には、今の自分が自然だと思えた。

だけど女は、そうでないのだろうか。香苗は昔も今も、圭太に対する態度は変わっていない。しっかり者で、姉御肌で、内気な圭太をどこまでも引っ張っていこうとする。しかし、もう自分の力で何処へだって行ける圭太には、時々そんな香苗の態度がわずらわしかった。

圭太の通う高校は、普通科と音楽科に分かれている。無論、とうの昔にピアノをやめた圭太は普通科で、バイオリニストの香苗は音楽科だ。口の字型の校舎は、上の横棒と下の横棒で学科が分かれているのだが、今、なぜか香苗は圭太のクラスにいる。

「今度の土曜——明後日ね、知り合いのバイオリンのコンサートなんだけど、あたし、そこで友情出演することになったんだ。圭太、コンサートなんておばさんのしか行ったことないから、もう四年は行つてないでしょ？」

圭太が座る机の端に手をついて、香苗は一人陽気に話し続けた。世界的に有名でなくても、香苗は校内では十分な名人だ。そんな少女が、一般ピーポールの圭太と話しているのは、いやでも目立つ光景である。

「ねえ圭太、話聞いている？」

「……伎倉さ、もう教室帰れば？」

明らかに嫌そうに言ったのが伝わったのか、香苗はむうつと膨れた。……だからその顔やめろつて。

「圭太、ピアノやめたつて音楽は好きでしょ？ おばさんのピアノ、毎日聴いてたんだし」

「……」

嫌いだと、言つてやりたい。だけどその三文字は、何度心で繰り返しても、声となり、言葉となつて紡がれることはなかった。

それでも、もう音楽なんかに関わりたくはないのだ。ピアノをやめてから毎日聴いていた母の旋律は、圭太の心を蝕み、荒ませるだけだった。音楽は、音は、今の圭太に吐き気しか催さない。

「ねえ、じゃあ、チケットだけでも買つて？ おじさんのと、二枚ね？ 出演するんだからあたしも十枚売って来いって言われてんの！ お願い！ 昔のよしみなんだからさ」

につこりと、香苗が笑う。圭太は頼杖をついてそれを見上げた。

……本当だろうか？ 彼女はこっやって、人を手玉にとるのが上手い。

「ねっ、圭ちゃん」

「……分かったよ。いくら？」

パツと、香苗の表情が華やいだ。なにがそんなに嬉しいのか、不思議で圭太はつい彼女に見入ってしまう。笑みを浮かべたまま、香苗は鞆からチケットを取り出した。

「一枚八百円。だから二枚で千六百円ね」

「細かいのしないよ。……まあいいや。釣りからないから」

尻のポケットから財布を出して、香苗に二千元差し出した。見上げた彼女は、先ほどと打って変わって不機嫌そうだ。

「何」

「お釣りいらなんないなんて、そんな勿体無いこと言わないの！ これは圭太のお金じゃないのよ。おじさんが働いて稼いだお金！ あと、財布をそんなところにしまうのもやめなさい。盗られたらどうするの？」

また始まった。圭太はそう思った。おそらく彼女を中年女性の輪へ放つても、気後れすることなく馴染んでしまうだろう。

「聞ってるの？ 返事は？」

「……わかりました」

無駄に口答えすると、余計にぐちぐちと言い返されてしまう。口で女に勝てるはずもなく、圭太は大人しく頷いた。香苗は満足そうに笑みを浮かべている。

一通りの話は終わったのか、彼女は時計を見てから慌てたように鞆を持ち直した。

「いつけない！ もうすぐチャイム鳴るじゃない。教室帰らないと……やっとか。」

そう思ったことは口にはしない。いつからか、圭太は自分が一番無難に生きられる方法を覚えていた。

「あ、圭太！」

扉に向かおうとしていた体をわざわざ反転させて、香苗は圭太を呼んだ。

「コンサート、絶対来てね！」

念をおすための言葉だったのかもしれないが、その笑顔があまりにも屈託のないものだったから、圭太は返事を忘れてしまう。

と、つかみどころのない様子で瞬いていた圭太に、鈍感なクラスメイトが群がってくる。

「なあなあなあなああつ！ 篠塚って伎倉香苗と仲いいの？」

「は？」

「いいよなあ、伎倉さん。可愛いし、っーか美人だし。バイオリンストとかかつこいいし、あー、俺も音楽科に編入してっー！」

「バツカ、お前みたいなの、顔も成績もフツーの奴なんか無理だって大体お前、楽器できねーべ」

いつも騒いで授業をかき乱す二人組が、今圭太の机の前にいた。これだけ近いのに声がでかくて、すでになり始めているチャイムの音も聞こえない。

「で、篠塚はどういう関係なの？」

「……道聞かれただけ」

「みーちい！？ あのな、篠っちー、いくら俺らバカでも、学校で道聞く人間にないことくらい分かるって」

ひらひらと手を振りながら、音楽科に編入したいだのと言った、陽気な男がそう言う。確かに苦しい言い訳だ。

「……バイオリン同好会に、誘われた……？」

「おいおい篠塚、お前言い訳するのなら、もっとマシなの考えろよ」

「でも篠っちってなかなか面白いねえ。俺っちに突っ込ませるなんて大したもんよ？」

陽気な男の顔が、一層圭太に近づいた。やめろ、来るな。

「……篠塚に絡むな。席に着け」

天の助けだったのか、いつの間にか来ていた担任が、そう言って

二人の首根っこを掴んでいた。陽気な方が抵抗しているが、「お前らと関わったら篠塚が汚れる！」という、担任のよくわからない一言に一蹴されていた。

解放されて、圭太は一度溜息をつく。ふと、「絶対来てね」と言った香苗の笑顔が思い出された。

あんな風に嬉しそうにされたって、正直圭太に行く気はなかった。チケットを買ってあげたのは、あくまで彼女のノルマに荷担してやっただけだ。音楽も、旋律も、何も聴きたくない。もう何も、考えたくない。

授業が終われば、圭太はさっさと家路に着いた。部活には入っていないし、放課後遊ぶほど仲のいい友達もいない。自分が他人から見て陰気なことは自負しているが、だからといって明るく振舞おうとも思えない。日常生活に支障がないなら、クラスメイトとの付き合いは、つかず離れずがちょうどいいと思う。

帰りは坂道を延々と下る。この時だけは、自転車があればいいのに、と圭太は日常的に思っている。十度ほどの傾斜は、案外上りより下りが億劫だ。

それでも体を少し後ろにそらして、十五分ほどの道のりを歩ききった。「篠塚精神病院」と、青地に白で書かれた看板が目立つ。

看板の十歩手前を左に曲がろうとしたとき、バンツと、力強い音がした。ふと顔を上げると、シルバーの軽四カーから人が降りてくるところだった。もう一度音がして、もう一人降りてくる。

最初に降りたのは、長身の女性だった。長い髪を後ろで一つに纏めて、そこには一筋の乱れもない。綺麗な面立ちをしていたが、年齢は、母が時を止めたときに近そうだ。ぺこりと、圭太に向かって頭を下げてくる。だから反射的に、圭太も頭を下げた。

言葉を交わすこともなく、女性は後から降りた少女——娘だろう

——の手をとって、病院の自動ドアを越えていった。

——患者か……。

別に珍しい光景ではない。精神病院はそれほど数が多いわけではないし、この病院にも、月に二、三人の新患が来る上に、毎日一人以上は診察を受けに来る。さっきの親子は、おそらく新患だろう。

精神に病気があるのなら、おそらく娘を連れてきたりはしない。まだ生まれて間もなく、離れるわけにいかないのならともかく、あの少女はもう小学校高学年か、中学生ほどだった。つまり病気を抱えているのはあの少女だったのだろう。

ふと胸元に手をあてて、圭太は診療所の隣にある自宅に入っていた。

*

家と診療所は、一本の渡り廊下で繋がっている。その廊下はダイニングにあるのだが、圭太は渡ったことがない。精神病とは、コンプレックスも関わってくるのだろう。圭太がピアノを弾けないのはコンプレックスからくる心の病気だと、一度律子に言われた事がある。それを真つ向から否定した圭太は、以来何となく、精神と名の付くその建物へは足を踏み込めなくなった。

無意識に眺めていた廊下から視線を振り切れば、その足でキッチンへ向かった。すっかり日は傾いていたが、今の季節はじわじわと暑さが体を蝕む。喉の渴きを覚えて、冷蔵庫を開けた。湿気を冷やしたような匂いは嫌いだが、この際構ってはいられない。ペットボトルのお茶を取り出して、冷蔵庫はさっさと閉めた。

そのまま奥へ進んで、流し台の上に並べられたコップを手取る。黄金色の液体を勢いよく注いで、口元へと運んだ。

程よく冷やされたお茶が、食道を通って胃に染み渡るのが分かる。お腹の中心だけが、ひんやりと冷えた。

カッサカッサカッサ……

お茶を一気に体内に流し込み、ふうと贅沢に息をついたところで、背後に近づく足音に気がついた。それは唐突に止まり、次の瞬間、圭太は背中に視線が集中するのを感じた。

父ならば、黙って後ろから見つめるなんて、そんな不躰なことはしないし、看護婦ならば圭太が見えた時点で馴れ馴れしく声を掛けてくるだろう。一体誰だと、圭太は思い切り顔を不服色に染めて振り返った。

「……」

思わず圭太も、黙って相手を見つめてしまう。そこにいたのは、見た事もない一人の青年だった。

「……」

「……」

お互いの間に、一切の会話もないまま既に三分は経過しただろうか。圭太はただ冷静に、

相手が誰なのかを分析していた。

耳にかかる程度の短い髪は茶髪で、身長は圭太より五センチ以上は高そうだ。ややつり目だが、目は大きく、少し子供っぽくも見える。でも、自分よりは断然年相応の顔つきだろう。詰襟の真白な上衣とその対なのだと見て取れる白いズボンは、ドラマなどでよく見る、《研修医》と呼ばれる者が着ている服に似ている。だとしたらつまり、この人が今朝恭平の言っていた人物だろう。

「あんた……助手さん？」

そう圭太が訊ねると、男は一度瞬いた。先ほどの視線が観察するようであれば、今度の視線は言葉に詰まっているようだった。

「……」

質問に答えてもらうことができなければ、他にかけ言葉も見つからなくて、圭太も再び黙り込んでしまう。

いや、それにしても、先ほどからこの人の視線はなんだか不愉快だ。

一度も言葉を返さないまま、男はただ圭太に見入った。その視線は、圭太を見ているわけではなく、圭太の後ろに注がれている気がする。真後ろは流し台だし、何か珍しいものがあるわけではないだろう。訝しげに、圭太は一度振り返って自分の背後を確認した。もちろん、何も無い。

「何見てんの？」

再び男に向き直り、嫌悪露に訊いてやる。男はハツとしたように肩を震わせてから、あからさまに圭太から視線を逸らした。

「いや……、何でも。……でかくなつたな」

「は？」

でかくなつた。それはつまり、小さい頃の圭太を知っているという事か？　しかし圭太の記憶に彼のような男性は存在せず、恭平からもそんな話は聞いていない。

「俺の、知り合い？」

彼が自分より七つ上と言うことは恭平から聞いていたし、本当に圭太が覚えていないだけかもしれない。不思議そうに頭を掻いたり撫で付けたりしながら、まっすぐに視線を男に向けてみた。

しかしその問いに、彼はおもむろに「あ」と口走る。

「いや、覚えてないならいい」

その言葉に、圭太は眉間に皺を寄せて目を細めた。なにそれ。「あ」とか口走つといちゃつて、まるで俺に聞かす気はなかったみたいな態度取りやがつて。

腹が立つた。だつたらいい。圭太は体ごと男に背を向け、使ったコップを洗い始める。

「……診療所戻らなくていいの？　それとも仕事もう終わったんなら、さつさと着替えてくれば？」

時刻はもうすぐ五時。たしかに診療は終わる時間だ。しかし背後から、男が去つたけはいはない。それでもこれ以上自分から声をかける気にはなれなくて、早くいなくなってくれることを願いながらただ片付けを続けた。

洗ったコップの水を切つて、脇の台に逆さに置く。ペットボトルの蓋を閉めれば、それを冷蔵庫に戻した。例の湿気の冷えたような匂いが、より圭太の嫌悪感を煽る。部屋で着替えようと踵を返すと、一歩たりとも移動していない男が目付いた。

いい加減我慢も限界で、睨むように男を見上げる。さつさと隣を通り過ぎてやろうと歩を進めながら。しかし本当に男の隣に来たところで、その足は遮られた。しっかりと男に二の腕を掴まれる。

「何なの、ほんとに？」

横目に睨むと、男も困ったように目を細めてから圭太を見返した。

「……何か、楽しい事とか、興味のあることはあるか？」

「は？」

突拍子な質問に、圭太は怪訝な声を返した。何だというのだ。これが彼なりのコミュニケーションのとり方なのか？

「何でもいい。勉強とか、運動とか、漫画や芸能人でもいい。何か、見たり聞いたりして、楽しいものはないのか？」

「ねえそれって、俺の趣味が知りたいの？ だったらないよ。俺は今、何をしてても楽しくない。興味もない。だって楽しいのなんて一時だけじゃん。飽きたり、奪われたり、否定されたり。いつかどういう形でか失うんだから、最初から興味なんか持たない方がいい」

男は、表情も変えずに圭太をじっと見ていた。そういえば、この人もなりたてとはいえカウンセラーか。言われる前に、圭太は彼が紡ぐだらう言葉を言ってやった。

「……こんな俺は病気だと、あんたも言うんだろ」

否定的な考え方も、反抗的な姿勢も、無関心な態度も。全ては圭太が幼い頃から蓄積させたストレスのせいだと、それには心を癒す為の治療が必要だと。

律子が亡くなって、圭太が高校に入学する頃まで、恭平は何度かそんな言葉をかけてきた。病気だとはつきり言われた事はないが、つまり言いたかったのはその一言に尽きていたはずだ。

「あれ、二人ともどうかした？」

男の口から答えが紡がれる前に、渡り廊下の方から男性の声がした。今度はよく見知った人物のものだ。

「……診療終わったの？」

言葉でごまかしながら、圭太は男の手から自分の腕を引き戻した。恭平は白衣を脱ぎながらにつこりと笑う。

「うん。圭ちゃん（いづみ）は龍くんと話してたんだね。もう仲良くなれた？」

圭太は何も答えなかった。その様子に事情をのみこめば、恭平はすぐに人のいい笑みを浮かべて龍を掌で指す。

「圭ちゃん、彼は朝話した住み込みアシスタントの柳沢龍くんやなぎさ 龍くん。今年で二十四歳だから、圭ちゃんとは七つ差だよ」

瞬間、こちらを見た龍と視線がぶつかった。それが気まずくて、圭太はふいつと顔を逸らす。

「そして龍くん、この子が僕の息子の圭太。仲良くしてあげてね」
そんな言葉はいらないと、圭太は恭平と、それにうなずく龍をばれないように睨んだ。

恭平は、言葉を続ける。

「さて、じゃあ僕は夕飯の買物に行ってくるね。龍くんは何が好き？　せつかく新しい家族になるんだから、今日は歓迎パーティーだ。なんでも好きなもの作るよ」

「え？　ああ……じゃあ、カレーで」

「カレー？　分かった。じゃあ買物してくるから、二人で仲良くね」
龍の平凡な注文に、恭平は笑いながら財布と車の鍵を掴んでダイニングを出て行った。

数秒して、玄関が閉まる音がする。続いて車のエンジン音と発進音がした。

「圭太」

それを見計らったかのように、龍が声を掛けてきた。呼び捨てかよ。

母親すら、比較的圭太をちゃん付けにしていた中で、呼び捨てにしたのは香苗と二人目だ。

「何？」

「悪かったな、変なこと聞いて」

「……俺は謝って欲しいんじゃないよ」

そう言いながら、扉を開け放ってダイニングと続いているリビングに入る。クリーム色の上質なソファに腰かけて、テレビをつけた。まっすぐ部屋に戻らなかつたのは、龍がこの後どう行動してくるのか、気になっていたからかもしれない。

「……病気だと、言われた事があるのか？」

「ないよ、父さんにはね。でも治療を受けるとは何度も言われた。俺は人一倍ストレスをためやすいんだって。今は症状ないけど、自律神経失調症？　なんかそんなような病気になりやすいらしいから、せめて今あるストレスは解消して欲しいみたいだね」

「随分軽く言うんだな」

パチン、パチンと面白い番組がないかチャンネルを回す。数メートル離れた龍の声は、一向にその位置を変えなかった。まだ一步も場所を移動していないのだ。

「父さんも、母さんも……大袈裟だったんだ。俺は病気じゃないし、別に言うほどストレスだって溜まってない。みんなが気にしすぎなんだよ」

パチン、パチン、パチン。まるで気を紛らわせるように、圭太の指はリモコンのボタンを押し続けた。自分が何を見たいのか、どんな番組が《面白い》のか、圭太自身もう分らない。

「篠塚先生は立派な医師だ。お前が言うほど、彼の言葉に根拠がなくはないぞ」

「じゃあ柳沢くんは、俺のどこにストレスが溜まってると言うんだよ？」

そう訊ねる圭太の声は冷静だった。だけど視線はテレビから逸らされることなく、手は忙しくリモコンを弄っている。

「あんただって、立派じゃなくてもカウンセラーだろ？　だったら言えよ。俺のどこに、ストレスって言葉を見出すの？　なんで俺を、病気だなんて言えんの？」

パチン、パチ……

「もういいだろ」

龍の声が唐突に近くなったと思ったら、制止するように、彼の手はリモコンを持った圭太の右手の上にあった。自分が無意味にチャンネルを回し続けていた事に、圭太は愕然とする。全身の力がドツと抜けて、リモコンは手ごと、カチャンと机に落ちた。

「お前が病気だとは言わない。だけど圭太。お前は確かにどこか、

情緒不安定なところがある。病気じゃないと思うなら、その言葉にそんなに過敏にはならないんじゃないか？」

ソファに合わせて彩られた真白なカーペットの上で、龍は膝立ちして圭太を見上げた。視線が自分より下にあるのは、どこか素直な気持ちにさせてくれる。

龍の真つ黒な瞳は、吸い込まれそうなくらい綺麗で、圭太は何となく彼に心を許したくなかった。

「……一回、母さんに、俺は病気だと言われた。俺昔、ピアノやってたんだ。でもそれやめたら、母さんは——ピアニストだった母さんは——俺がピアノをやめたのはストレスのせいだって。父さんに治療してもらって、もう一回ピアノやろうって……」

「お母さんに言われたのが、シヨックだった？」

穏やかに、龍が訊ねてくる。圭太は小さく首を横に振った。

「シヨックだったんじゃない。むかついたんだ。俺がピアノをやめたのは、母さんが原因だった。その母さんに、ストレスだの治療だの、ましてまたピアノやろうだの、言われたくなかったんだ」

努力なんて、そんな言葉に何の意味があるのだろう。音楽や芸能や、作家なんてもの、所詮は一握りの人間しか上へは上れない。そしてそれは、努力よりも才能だ。

圭太には、才能がなかった。彼が持つ力は、何の役にも立たないものでしかなかった。

だから圭太はピアノをやめた。律子を妬んだ。自分がピアノの音に吐き気すら催すのを知っていて、毎朝美しい旋律を奏でる律子が、恨めしくて仕方なかった。

「母さんなんか……」

嫌いだ。一度、それを口に出して言ったことがある気がする。いっただったかは覚えていないが。

でも、今口にできなかったのは、律子がもうこの世にいないからかもしれない。嫌いだけど、圭太は律子を愛している。父親を早くに亡くした圭太にとって、律子はたった一人の肉親だった。そして

律子も、忙しい毎日を感じさせないくらい圭太を愛してくれた。あの腕に抱きしめられたことが、一体何回あるだろう。愛しくて、憎い。でもそれは、きつと一般的な親子の在り方だ。

「……うん、それだけ。口にしたら、ちよつとだけスッキリしたよ。柳沢くんもやっぱ、一応カウンセラーではあるね」

半分以上は厭味としてそう言いながら、圭太は微笑を浮かべた。龍は無表情のままだ。医者として圭太に接していたから、何を言われても動じないんだろう。そんな龍の表情が一回の瞬きを境に、少し穏やかなものに変わった。

「龍でいい。長いだろ、柳沢って」

圭太はきょとんとした。その言葉が、自分の龍に対する呼び方のことだと理解するのに、数秒掛かった。小学生の頃は、友達なんて自然にできていたし、中学高校は呼び方をどうこうなんて話すほどの友達は作らなかつた。だからこんな掛け合いは、おそらく生まれて初めてだ。

「龍……くん？」

気恥ずかしいような、くすぐったいような感情を隠しきれずに、圭太は小さく龍の名を呼んだ。しかし、龍は不満げに眉を寄せる。

その龍を思案するより先に、初めて表情を変えた龍が、圭太には新鮮だった。

「《くん》とかいらねえよ。呼び捨てでいい」

「えっ？ でも……」

反射的に、圭太は反論の声を上げる。自分より身長も高く面持ちも大人な相手を、そう簡単に呼び捨てにはできないだろう。

「呼んでみる、ほら」

そう言つて、龍は立ち上がった。先ほどまで自分を見上げていた視線に、今度は見下ろされていると思っただけで、どこことなく不快で、嫌な気持ちになった。

「龍、くん」

「……」

「龍くん」

一度目は、まだどこか遠慮していたが、二度目に龍を呼ぶときははつきりとくん付けにしてやる。これはささやかな反抗と、意思の主張だ。

「……頑固だな、お前も」

はああ、と盛大に溜息をついてくれる。ムツと、圭太は顔をしかめた。

「俺、間違ってないだろ？ 年上呼び捨てになんかできないし、きつとそうしたら、父さんにも直せって言われるよ」

「そういうところは、《父さん》の言う事を聞くのか？」

間髪入れない龍の指摘に、圭太は息をのんだ。自分は、父を言い訳に使った。なんと子供じみた行動だろう。恥ずかしさから、頬がカツと熱くなった。

「あつ、揚げ足取るなんて、最低だ。あんたそれでもカウンセラーかよ」

「勤務時間はもう終わってる」

「仕事中心かカウンセラーとしてはいないって？ バカじゃねえの。そんなの言い訳だろ。あんたは朝も昼も夜もただのカウンセラーだよ！」

龍の言い分が気に入らなければ、圭太は一気にそう捲くし立てて息をついた。なんで俺、赤の他人で今日まで存在も知らなかったこの人に、こんなに腹を立てているんだろう。

ソファのカバーをぎゅっと掴む。薄手のそれは、掌に爪が食い込むのを遮ってはくれなかった。

「圭太」

「……何？」

「お前は俺にカウンセリングして欲しいわけじゃないんだろ」

逸らしていた視線を、ゆっくり龍へと上げた。この人は、いままで俺が出会ってきた人たちと、何かが違う。俺の欲しい言葉をくれるわけでは決していないけれど、気持ちだけは、他の人間より察して

くれているところがある気がする。

だから圭太は、龍の言葉にゆっくり頷いた。

「だったら俺は、お前に対してカウンセラーとして接する気はねえよ。だから、もしお前を癒したいと思っても、それはカウンセラーとしてじゃない。柳沢龍として、お前の話を聞かし、アドバイスもする。そこまで嫌とはいわねえだろ？」

「……じゃあやっぱり、龍くんも俺を、病気だと思うの？」

「お前は別に病気じゃねえよ。でも、これからどうなるか分からないし、ストレスを溜め込んでるのは確かみたいだから、それは気になるかな」

恭平も、龍も、どうして大した話をしたわけでないのに、圭太がストレスを溜め込んでいると分かるのだろう。カウンセラー学校では、そんな人間の見分け方まで習うのだろうか。

圭太はまっすぐに龍を見上げた。最初に感じた嫌悪感は、今はそれほどにはない。

きっと、圭太が龍に言えなかったことを話したのは、彼が他人であることと同時に、それが龍の才能だからだ。龍は、圭太の、人の傷に敏感なのだと思うた。

不意に、車のエンジン音が聞こえた。聞き慣れたこの音は、恭平の車だ。

「父さん、帰ってきた」

視線を玄関の方へと向ける。晩御飯はもうすぐか、と思ったところで、自分がまだ制服である事を思い出した。

「龍くんもまだ着替えてないじゃん。行こう。父さんすぐご飯作り出すから、一時間くらいで晩飯だよ」

早口にそう声を掛けて、圭太は龍の隣を通り過ぎた。リビングから廊下へは出られないため、一度ダイニングに出てから、廊下へと抜ける。そこを左、右、右、と曲がれば、右手に階段が見えた。

折り返しの階段を半分ほど上ったところで、圭太はハツとする。いつもは嫌というほど気になるあのピアノの部屋を、今はすっかり

素通りしていた。龍に話したから？ いや、しかし、あんな事は圭太の傷のほんの一部ではない。それでも確かに、龍の存在は圭太に影響しているということなのだろうか。

「……何ほだされてんだか、俺」

こそばゆさを隠すようにそう言っ、圭太は残りの階段を駆け上がった。

父さんのカレーは、いつも通りおいしかった。大人二人はビールまで出してすっかり盛り上がってしまったため、圭太は早々に退場したが、二人が二階に上がってきたのは九時を過ぎた頃だった。

何をそんなに話すことがあるのかは知れないが、同じ職業を選択するものとしては、それなりに共有できる悩みや話題があるのだろう。

テレビを見るのが嫌いな圭太は、予習復習を適当に済ませて、十時前には床に着いた。

*

律子と恭平が結婚したばかりの頃、圭太は早く恭平と仲良くなつて欲しいという律子の厚意から、風呂は一緒に入っていた。まだ思春期には差し掛かっていなかったし、この人が父親だということに些細な嫌悪感は抱いていても、恭平自身は嫌いではなかったため、特に抵抗もなく一緒に入浴した。

湯船は二人が入れる広さではないため、恭平が体を洗っている間、圭太が浴槽に浸かる。

あの頃、恭平とどんな話をしていたかなんてもう覚えてはいないけれど、一つだけ、今でも鮮明に覚えているものがある。父の背中には、花火のような、いや、大きさに言えば、シロツメクサのよ

うな痣があつた。

ギシ……。

それは、圭太が寝入ってからちょうど二時間ほど経つた時だった。心身ともに漸く深い眠りへと沈んでいた圭太の体、脳は、人のけはいを敏感に察知する。

もともと、熟睡はできない体質だった。夢は頻繁に見るし、夜中と朝方に、必ず一度は目がさめる。そんな睡眠時で、今が一番の安眠時間だったが、それでもやはり人のけはいに反応して目がさめた。初夏の夜は、クーラーまではいらないものの、締め切つて眠るには息がつまる。だから圭太は、この時期は扉を猫が一匹通れる位の分開けて眠っていた。それでももう夜中だから、カーテンを締め切つた部屋に明かりはほとんどない。

「誰……？」

暗闇に慣れない目を凝らして、圭太はゆっくり起き上がりながら、近距離にいるであろう相手を探ろうとした。

こんな時間に、人の部屋に入ってきて自分を起こす素振りも見せないとは、どういうことだろう。一刻も早く、目に慣れて欲しい。

と、圭太自身の脳もはつきりしてくれば、使う事は皆無だったものの、ベッドにスタンドライトがついていたことを思い出す。軽く身を後ろに反らせて、タッチ式のライトをつけた。

パツと明かりが灯れば、その眩しさにまた目を細める。だけどぼやけたシルエツトから、相手を推定する事はできた。

「龍……くん？」

茶色い短髪は、肩より少し長い黒髪の父とは反している。少しずつ目がなれてくれば、顔まではつきり確認できた。

それは間違いなく龍で、しかし重く細められた彼の眼は、寝ぼけているようでも、はたまた酔っているようでもあった。

「ど……、したの？ 龍くん」

今日初めて会ったばかりの彼に、こんな事を思っるのはおかしいだろう。それでも、圭太は彼を、《龍じゃない》と思った。変だ。方言言葉を交わした龍とは、明らかに何かが違う。

「辛いのか？」

「へ……」

タンクトップから伸びる手を、圭太を挟むように両脇に置いて、ずいっと龍の顔が近付いた。近付いた分だけ、圭太の体はのけぞる。研修医服では分からなかったが、圭太より色黒の龍の腕は、引き締まってガツチリとしている。多分喧嘩なんてしようものなら、圭太はあっさり捻り潰されてしまうだろう。

悠長にそんなことを考えていたら、また龍の顔が近くなった。

「りゅ、龍くん、寝ぼけてんの？ それとも酔ってんの？ あの、彼女かなんかと間違えてんじゃ……」

「怖がらなくていいから。ひどいことはしない」

圭太の言葉は届いていないのか、いつの間にかしつかりと腕を拘束されて、それ以上逃げられなくなっていた。

龍の声は優しい。恐らく嘘は言っていないのだろうと、思うことは出来ても、何か本能的に、圭太の体は龍に対して警戒信号を発している。

ダメだ。今の龍くんは龍くんじゃない。正気じゃない。でも、何で？

どうして突然、龍が自分に迫ってくるのか。いくら寝ぼけていても酔っていても、男を襲うほど節操がなくなったりはしないだろう。「待ってっ、俺、圭太だよ？ 落着いて。龍くんてば」

「知ってる、分かってるよ。いいから黙れ。ひどいことはしないって言っただろ。ただ——」

ふと、龍の顔に焦点が合わなくなる。それは一瞬で、圭太は抵抗する隙も見つけられなかった。

「お前の不幸を、“喰ってやる”だけだ」

龍の息を感じたら、それは口腔に飲み込まれる。圭太の息も、声

も、龍の唇に阻まれた。

どうしていいか分からなくて、圭太は目を閉じればグツと事が済むのを待った。それ以上先を侵されることはなかったが、長い間ただ龍の熱を感じているだけで、いつしか圭太の体はのぼせたようにくらくらとしてきた。

だけどそれは不快ではなく、眠りに誘われる一歩手前のような心地よいまどろみ。この熱に浮かされたまま眠れたら、なにより幸せだろう。

腹の奥底にある、蓄積された靄が晴れていく。今はただ、産声を上げたばかりの赤ん坊のように、無防備に眠りたいと思った。

意識が薄れていく。龍の熱がいつしか唇から離れれば、圭太は彼の肩に頭を預けて瞼を閉じた。その一瞬、龍の二の腕に、いつかどこかで目にした、あのシロツメクサの形に似た痣を見た気がした。

——圭ちゃん、もうその曲覚えたの？

律子の声がした。ふとそちらに目を向ければ、母親の感嘆じみた瞳が見える。

だから圭太も、得意げに笑った。

曲を覚えるのが好きだった。自分の指がリズムを奏でることが、なんだかひどく誇らしいことのように思えた。

毎日当たり前のようにピアノが弾けるのが、圭太の至福だった。

小鳥がさえずっている。空と同じ色をしたカーテンから光が溢れ、部屋一面が水色に照らされているのを受けて、圭太は目を醒ました。

「……」

何だろう。何となく、体が軽い。目覚めがよく、いつもの億劫さが微塵も感じられない。

体を起こして時計を見たら、普段圭太が起床する時刻より一時間も前だった。だけど、決して眠りが浅いわけではなかったし、幸せな夢すら見た気がする。こんな朝は何年ぶりだろう。

ふと、龍のことを思い出した。

圭太は部屋を見回して、それから自分のいるベッドを見た。

そこに自分以外の人がいた面影はなく、扉も、眠る前同様に猫が一匹通れる分だけ開いている。

あれも、夢だったのだろうか。

「……どんな夢見てんだか」

前髪をかきあげるように額に手をやって、圭太は小さく溜息をついた。朝の風に、外の木々がさわさわと揺れている音がする。

「ピアノ……」

弾きたい、と突然に思った。いや、落ち着け、弾けるわけがないだろう。

感情がこもっていない。母親には負ける。大した才能はない。ただ見本どおりに弾いているだけだ。情けない。あれでピアニストの息子か。

——それが、何だ。

唐突にそう思えば、圭太はベッドから出た。かつて様々な人間からかけられた非難の言葉。けど今、それは雀の雛が鳴いているのと同様に思える。どうして自分は、あんな大人たちの言葉に傷付いていたのだろう。

階段を駆け下りた。頬に当たる風が気持ちいい。長い間ノブに手を掛けることすらしなかった、真白な扉を開け放って、数年ぶりにあの黒い輝きを見た。

弾きたい、弾きたい、弾きたい。

最後にこのピアノと向き合ったのは、確か十一歳の時だ。あの頃、ピアノは圭太の知る何より大きくて、偉大だった。今は体も大きくなって、ピアノより大きなものがこの世に存在する事を知っている。それでも改めて近くへ寄って見てみれば、やっぱりこのグランドピアノが一番偉大だ。

ゆっくりとピアノに近付き、鍵盤の蓋を開いた。白黒白、黒白黒、黒。懐かしい羅列が視界に飛び込んでくれば、圭太は泣きたいような衝動に駆られた。

ポーン。

一つ鍵盤を押して音を聴けば、もう何も迷いはなかった。椅子に腰を降ろし、思いつくままに旋律を奏でる。初めてピアノ教室で習った曲。毎朝母がここで奏でていた曲。発表会で弾いた曲。コンサートで聴いた曲。思いつく曲がなくなれば、町を歩いている時に耳にした話題の歌手の曲まで奏でて見せた。

この世界は、音で溢れている。昨日まではそれが嫌でたまらなかったが、今日はそれが嬉しくてたまらなかった。圭太は音楽が大好きだ。それをいつでも奏でる事が許される、この世界は楽園だ。

「圭ちゃん!」

ビクツ、と圭太は身震いした。夢から醒めたように鍵盤から手を離し、扉へと目をやる。

「あ……、父さん。おはよう」

扉で佇む恭平は、切羽詰ったようにこちらを睨んでいた。まるでそうしなければ立っていられないかのように仁王立ちをして。

「おはようじゃないよ。……こっちへおいで」

「待って。俺ね、ピアノが弾けるんだ。父さんにだって聴こえたでしょ？　なんでか分かんないけど、起きたらピアノが弾きたくて。ねえ俺、もう大丈夫なんだよ。誰に何言われても、きっともう何とも思わない。俺、またピアノ弾けるよね？」

嬉しかった。ピアノをやめたのは、決して嫌いになったわけではなく、弾く事ができなくなったのは、圭太の意思ではなかった。

こんな風にピアノを再び奏でられる日を、ずっと待っていたのだ。恭平なら、それを手放しに喜んでくれると思った。恭平はそういう人だった。しかし、

「いいから、おいで。話はそこです。これ以上ピアノは弾かない方がいい」

「何で？　父さんだって、俺がもう一度ピアノ弾けばいいって、思ってたでしょ？」

「君がもう一度ピアノ弾く事は、今はできない。早くおいで。龍くんも待ってる」

そう言うなり、恭平は踵を返してリビングへと向かったようだった。恭平が圭太にカウンセリングを勧めていたのは、もう一度ピアノを弾いて欲しいからだと思っていた。しかし、そうではなかったのだろうか。

このまま反抗的にピアノを引き続けるのは、なんだかいけないことのような気がした。鍵盤の蓋を閉めてから廊下に出て、扉をきっちりと閉める。どのみちこれから学校だ。帰ってきてから続きを弾けばいい、と頷いてから、圭太はリビングへ向かった。

リビングには大きな窓がある。そこに朝日が差し込み、春色のリビングは眩しさを感じるほどに照らされていた。

しかしその雰囲気とは裏腹に、恭平は龍の向かいの一人掛けソファに座り、まっすぐ彼を睨んでいる。龍は弧を描くソファの端——位置で言う恭平の正面——に座っていたので、圭太は丁度二人の間だろう、龍から人一人分ほどの距離を空けて隣に座る。

横目でちらりと、龍を盗み見た。恭平は何故、こんなにも怒っているのだろうか。正直彼の怒ったところなど見たことはなかったし、昨日はあんなに仲のよかった二人が、こんな状況になっている理由も分からなかった。

唐突に、龍が恭平に向かって頭を下げる。

「すみませんでした！」

圭太はビククリして龍に顔を向けた。一体、二人の間に何があったというのだ。

「謝るのは僕じゃないだろ」

と、恭平が冷たい声で言うと、龍は視線を圭太に向けなおした。

二人の視線が、かつちりと合う。

「ごめん」

「ちょ、待つて。何で俺に謝るの？ 龍くん別に、俺になにもしないじゃん。昨日俺の話聞いてくれたのは感謝してるし……そうだよ、多分龍くんのおかげなんだ。俺ね、どんなに頑張っても弾けなかったピアノ、弾けるようになったんだよ」

まるで言い訳のように、圭太は当て推量じみた台詞を吐いていた。言葉は声にすることで、それが事実かのように神秘的に響く。

実際、圭太はピアノを弾けた理由と龍を繋げて考えた事は、今の瞬間までなかった。だけど、今の状況がなんだか嫌で、嫌な予感ばかりを運んできて、圭太は反射的にそう口走っていた。それでも言ってしまう、それが一番あり得る理由だと思える。

「たしかに、龍くんのおかげだよ」

ぼつりと、恭平が口を開いた。圭太の視線がそちらに向いた事を

確認して、言葉を続ける。

「そして、龍くんのせい（・・・）だ」

「何が……？」

「圭ちゃんの不幸が、綺麗さっぱりなくなっている。あんなに重そうなくらい抱えていた不幸が、今は微塵も見当たらない」

頭の中が「？」で埋め尽くされる。俺の不幸？俺はそんなに見て取れるくらい、不幸を公にしていたのか？

そんなに自分は被害妄想が強かったとは、全く思わなかった。

「あの、よく分かんないんだけどさ。俺が不幸じゃなくなっているのなら、それでいいんじゃないの？」

「そうだね。でも圭ちゃんは、自分でその不幸を乗り越えたわけじゃない。不幸は喰われればその人の心からは消えるが、決してその人自身が強くなるわけじゃない」

眉間に皺が寄る。ちらりと見た龍は、申し訳なさそうに俯いていた。しかし圭太には、二人の言葉と態度の意味が、まだ全く理解出来ない。

「父さん、喰われるって、何？」

思い切って、一番気になったことを訊ねると、恭平はふと目を逸らした。しばらく考えるように黙り込んでいたが、やがて思い切ったように恭平はまっすぐ圭太を見つめる。

「吸血鬼って、わかるよね」

「人の血を吸う魔物でしょ？ ニンニクと十字架に弱い」

「そう。吸血鬼の存在は、今は世界中に知れ渡っている。そして、これはそんなに知れ渡ってはいないんだけど……それに似たもので、世界には人の不幸を喰う、不幸喰いが存在するんだ」

「不幸……喰い？」

初めて聞く言葉に、圭太はただただ顔をしかめた。不幸喰い。不幸を喰うもの。不幸を喰われたのは……俺？

ふと、昨夜のことを思い出す。あの時、圭太は確かに龍にキスされた。夢だと思ったあれが、もし現実だったなら……。

ぱつと、視線が顔ごと龍に向く。瞼に力が入るのが分かった。何
度も瞬きを繰り返す。

「龍くんが……、不幸喰い？」

「……ああ」

苦しげに、龍が相槌を打つ。

「龍くんは、人間じゃないの？」

「龍くんは人間だよ。吸血鬼を例に出したのは、その方が分かりやすいと思ったからだ。この力はね、言わば靈感なんかと同じなんだよ。霊能者が除霊なんかをできるように、不幸喰いは人の不幸が見えて、それを喰うことができる。喰った不幸は体に蓄積されて、一週間程かけて消化されるから、それまでの間になら人に不幸を与え
る事もできる。——つまり、今ならまだ、圭ちゃんに不幸を返す
とができるんだ」

龍に問い掛けた疑問だったが、そう答えてくれたのは恭平だった。
つまり、これは一種の特殊能力というやつか。

「父さんは、どうして不幸喰いについてそんなに詳しいの？」

別に大した答えは期待していなかった。カウンセラー学校で聞いたことがあるとか、参考文献にそんな逸話が載っていたとか、せい
ぜいそんな程度だと思っていた。しかし、恭平は再び俯いてしまう。
「……不幸喰いには、一つだけ共通点がある。それは、彼らには皆、
同じ形の痣があるんだ」

「痣？」

と問うと、龍がおもむろに、羽織っていた半袖のパーカを脱いだ。
圭太に見せるように、右肩にある痣を寄せる。

小さな角がいくつも見受けられる、花火のような、シロツメクサ
のような痣。その形に、圭太は見覚えがあった。

昨晚、意識を飛ばす直前に見た、なんてものじゃない。もっと昔
から、圭太はその形を知っていた。

恭平の——背中に。

「父さんも、不幸喰いなの？」

小さく、恭平は頷いた。眩暈がした。

不幸を喰う者。特殊能力者。……違う。そんな綺麗な言葉で片付けられるものか。

偏見するつもりはない。それでも、人の不幸を喰うなんて——
異端だ。

「そういうことだから。……とにかく、龍くんは圭ちゃんに、不幸を返してやってくれ」

「……はい」

恭平と龍の会話が、まるで一枚のフィルターを隔てたように遠くに聞こえた。右から左へ流れた声が、ふと圭太の心に引つかかる。

——不幸ヲ返シテヤツテクレ。

「っ、だ……、嫌だ！」

「圭ちゃん？」

おもむろに圭太は立ち上がり、龍の前を通って此処から逃げようとした。しかし逃げ遅れた右腕を、龍にガツチリと掴まれる。

「離して、やだっ。返さなくていい、俺は今のままがいい！」

「圭太っ……」

「ピアノ、弾きたいっ！ 今なら弾けるんだ。弾きたいんだ！ お願ひ、龍くん。返さなくていい。不幸なんていらない！ ねえ龍くん、お願いだから！」

駄々をこねる子供のように、圭太は龍の胸に縋った。涙が溢れそうになる。もしかしたら、もう溢れているのかもしれない。

不幸を返されたら元の生活に逆戻りだ。ピアノを弾けない事を、音楽が嫌いだからと言い聞かせて、溜まり溜まったストレスを否定して、自分は病気じゃないと意地を張る。

だけど、今の圭太に同じことができるとは思えなかった。一度ピアノを弾く歓びを思い出してしまった自分が、それを否定することなどもうできないと思った。

この世界は、音で溢れている。流行りのJ・POP、物静かなクラシック、激しいジャズ、小鳥のさえずり、波のざわめき、川のせ

せらぎ、木々の擦れる音に、風の吹きぬける音。人の足音も。

この世界で生きている限り、圭太は、“圭太は”、音楽から抜け出す事が出来ないのだ。

「お願い、お願い……！」

何度も、圭太は懇願した。五年前のあの日、どうしてピアノをやめたのだろう。やめられたのだろう。

こんなに大好きな音楽を、どうして自分から手放したのだろう。

「圭ちゃん」

ただ一言、「分かった」と言われるのを待っていた圭太は、期待の眼差しで恭平に目を移した。

「圭ちゃん、圭ちゃんの体は、圭ちゃんのものだろう？」

ゆっくり、首を縦に振る。

「圭ちゃんの心も、圭ちゃんものだ。圭ちゃんが今まで溜め続けた不幸——ストレスも、圭ちゃんものだ」

「……」

「圭ちゃん、今の君に、ピアノが弾けるのはほんの一時だ。もし、また心のない人間に《実力が足りない》とでも言われたら、君の心は初めてそれを言われた時と同じほどに傷つく。思い出して。初めてピアノを否定されたとき、二度目に否定されたとき、どっちが辛かった？」

そんなの、一度目に決まっている。二度目以降は、心のどこかに言われるだろうという覚悟があった。だけど一度目は、無防備な、それこそ裸で茨の海に入れられたようなものだ。自分を守るために服を着ていた二度目以降とは到底傷の具合が違う。

今の俺は、裸同然のあの頃と同じ？

確かに今の圭太に、あの頃の痛みなど思い出せない。どちらの方が傷付いたかと聞かれれば、それは「情報」として思い出すことができるが、まるで他人の体験談を語っているような感じだ。

「分かるだろう、圭ちゃん。君は決して乗り越えたわけじゃあない。きつとまたピアノが弾けなくなる、どころか、あの頃以上に、大き

な傷が残る事になるかもしれないんだ」

分らない。だって圭太は、昨日までの自分がどうして、どんな風に傷付いていたのか、全く覚えていないのだ。

それでも、ピアノを弾けない自分は確かに存在した。その「情報」は、今も圭太を支配してくる。それ以上、圭太は反抗の声を上げる事ができなかった。

恭平がもう一度、龍に「返してやってくれ」と言う。掴んでいた腕をぐいと引かれて、圭太の体が龍の方を向いた。

反抗する事を忘れていた体は動かず、ただ視線が龍を捉える。

「……また、チューすんの？」

案外あっさりと、圭太はそう訊ねた。思い出しても嫌悪しないのは、それがただただ夢のように思えるからだ。バツが悪そうに、龍は視線を泳がす。

「あれは……、あの方法が、一番手っ取り早いんだ。他にも不幸を行き来させる方法はある」

そう言って、空いていたほうの手が圭太の目を覆う。視界が龍の指の間から漏れる光だけになれば、それは決まった行為のように、圭太はゆっくり目を閉じた。

「口、開ける」

言われて、薄く唇を開いた。

外界で、一体何が起こっているのだろう。それは分からないが、ただ圭太の脳裏には、今朝起きてからの自分が走馬灯のように駆け巡る。

楽しかった。あんなに楽しくピアノを弾いたのは、きっと十年ぶり……多分それ以上だ。それが、もうできなくなる。傷は乗り越えられても消える事はない。あんな風に純粹無垢にピアノを弾く事は、もう一生できないのだ。

真っ暗な世界で、圭太の心はただ絶望だけを思い浮かべていた。

2 二つの不幸

診療所の窓から、龍は圭太^{けいた}が登校するのを見送っていた。ずっとここにこもっている龍には、圭太は朝から一度も会っていない———と、思っているはずだ。不幸を行き来させることは、本来人間に必要な行爲で、それは一時的でも体力と意識力の低下を招く。不幸を取られたり、与えられたりした後の人間は必ず意識を失い、その瞬間の記憶は薄れ、夢だと思いがちなのだ。

龍に不幸を返された圭太も、数十分間とはいえ意識を失った。恭平^{うへい}の指示で龍は眠る圭太を寝室へと運び、その後はここに留められている。

別に不幸喰いのことをごまかすつもりではないだろうと思う。ただ今は、傷心の圭太に、これ以上傷を増やさせたくはないのだろう。恭平と圭太。二人は本当の親子ではないらしいが、それ以上に、恭平は圭太を愛していると思う。その後ろに妻の姿を見ているのかもしれないが、昨日酒を飲んで、少し気分の良くなっていた恭平は、自分は律子^{りっこ}が初婚なのだと話してくれた。

つまり、圭太は恭平のたった一人の息子。その感情には、同情などもあるのかもしれないが、それらをひっくり返しても確かに、恭平は圭太を愛しているだろう。

昨晚、たとえ酒の入った体の上に寝ぼけていたとはいえ、龍は最低な事を犯した。不幸喰いは、その力に目覚めた時、本能的でも自分の存在理由を悟る。

不幸喰いの使命は、相手の不幸を見極め、癒し、相手が乗り越えられた時に、残り少ないその不幸を喰ってやる事だ。そうすることで、人は新たな道へと進む事ができる。だから不幸喰いは、比較的カウンセラーになることが多い。

既に圭太が見えなくなった頃、龍のいた資料室の扉が開いた。ここは恭平が患者の症状をパソコンに打ち込んだり、たくさんの資料

文献があつたりする部屋だ。主な恭平の仕事部屋といつてもいい。

龍が来る前に整備したその部屋は、今は恭平の机の向かいに龍用の机が配置されている。

扉とは正面になる窓枠に手について、龍は振り返った。

そこに恭平がいることは分かっていた。自分のしたことは、龍自身を何より痛めつけている。他人の不幸が輝く光のように見える恭平には、龍がいつもより輝いて見えているかもしれない。

恭平のいる扉から向かつて右手に、小さなキッチンがある、お湯を沸かす程度に使用されているものだが、恭平はそこで、置きっぱなしになっているやかんに水を入れた。コンロに置いて、火をつける。

「先生」

龍が初めて出会ったときの恭平は、本当に温厚な、一言でいう「いいお兄さん」だった。だけど正直に言えば、今回の事はこっぴどく怒られたほうが楽だったと思う。

「すみませんでした」

恭平に言われた通り、彼に謝る事は、何の意味もなさない。それでも、このやるせない気持ちを声に出す事で、龍は自分を落ち着けていた。

やかんに蓋をして、恭平が振り返る。

「もういいよ。過ぎた事はしかたないだろう？ 圭ちゃんは傷つく事になるけれど、それも仕方ないのかもしれない」

「あいつは、つけなくていい傷をつけることになったんです。仕方ないなんて、そんなことない。俺、あいつがあんなに不幸を抱えているなんて思わなかった。ずっと気にはなっていたけど、特に、力に目覚めてからは……」

溜息を吐くように、恭平は笑った。そのままこちらに近付いてきたかと思ったら、自分のデスクに腰かけた。

「それでも昨日の夜、圭ちゃんの不幸は少なからず減っていた。それは龍くんのおかげだよ」

「俺がまた不幸にしたんじゃ、変わらない」

「君は責任感が強いんだね」

龍が俯きながら苦しげに発した言葉を、恭平は苦笑しながら受け止めた。ああやっぱり、怒ってはいけないのか。

「でもね、かつては不幸喰いでなかった君が、圭ちゃんのことを覚えていてくれた事だけでも、僕は嬉しいんだよ」

不幸喰いの能力は二十歳を境に百人に一人が目覚める。龍はそれよりも前に、圭太に会った事があった。

「ねえ、龍くん」

いつまでも後悔の念に駆られている龍を見かねてか、恭平は戸惑いがちな声を発して龍の注意を引く。言葉の先を聞くために、龍は顔を上げた。

「圭ちゃんを、癒してやってくれないか」

瞬間、龍は目をむく。

「なっ!?! どうして俺にそんなこと……。俺は圭太にひどいことをしたんですよ? いくら不幸喰いでも、もう先生に信じてもらう価値なんか……」

「僕に圭ちゃんは癒せない」

ない、と続けようとした声は、あつさり恭平に遮られた。

「圭ちゃんがためている不幸には、僕のこともある。圭ちゃんの父親は、死に別れただけで彼にとって悪い存在ではなかった。そんな子に、新しい父親は必要なかったんだ。圭ちゃんにとっての父親は、死んだその人だけだったから」

「それでも圭太は、先生を嫌ってはいません」

「好いてもないよ」

どこまでも自分の意見を曲げる気はないように、恭平は言い切った。龍は言葉につまる。

「でも君は違う。圭ちゃんにとって君は、好きも嫌いもない人間だった。だったら、これから好きになってもらうこともできる。——同じ失敗を二度繰り返しはしないだろう?」

つまり恭平は、龍がもう圭太を傷つけない事を前提に、そう提案しているのだ。もちろんそんな気は皆無だが、面と向かって言われるとはつきり頷く事には戸惑う。

それでも、龍はゆっくりと首を上下した。

その様子に、恭平の表情が緩む。椅子から立ち上がればコンロへと向かい、やかんが沸騰している事を確認して火を止めた。

「コーヒー飲むかい？」

「……はい」

二つのカップにインスタントコーヒーの粉を入れる、そこにお湯を注いで、水切りに置いてあるスプーンでよく混ぜれば、それを持って今度こそ龍の傍へやってきた。

差し出されたカップを受け取る。

「ありがとうございます」

「うん。……圭ちゃんの事で少し混乱していたけど、龍くんに相談したい事があつたんだ」

「なんですか？」

真白な湯気をあげるコーヒーに噎せそうになりながら、冷ますために息を吹きかける。そんな龍に、恭平は窓枠に手について外を眺めながら口を開いた。

「昨日来た新患^{しんわ}んだけど、名前は小柴^{こしば}咲。小学六年生だ」

「はい」

「彼女にとつたアンケートがね、どうも気になるんだ。彼女は自分がいじめられている事を認めているらしいし、学校が嫌いだとも言っている。でも、“昨日の自分を不幸”だと思ったことがないらしい」

ようやく一口飲めたコーヒーのカップを左脇の窓枠に置いた。右側の恭平を見る。

「昨日の自分？」

「うん。普通いじめられている子供は、朝が嫌いなものだ。今日もまたいじめられるのかと、昨日までの嫌な記憶が心を蝕むからね。」

ただ彼女にはそれがないらしい。朝を億劫だと思ったことはない
と、彼女にとったアンケートに書かれていた」

龍はただじつと恭平の横顔を見ていた。恭平も分かっている事とは思
うが、その咲という少女が昨日の自分を不幸だと思っていない
ということとは、昨日の自分を他人事だと思っていることになる。

それは今朝の圭太が、自分の背負っている不幸などまるで忘れて
ピアノを弾いていたのと同じこと。

つまり――

「不幸喰い……ですか」

「分からない。でも……咲さんの近くに不幸喰いがいるかもしれ
ない可能性はある」

前に向き直れば、龍は再びコーヒーを口に運んだ。自分が不幸喰
いだから、余計に今の気分はやるせない。

不幸喰いは、自分が不幸な人間のために在るのだと、心のどこか
で分かっている。それでも世界に犯罪が絶えないように、そんな暗
黙の了解を無視し、自分の欲のためだけに不幸を喰らう輩がいるの
だ。

自分の同胞が犯している過ちは、龍にとって悔しくもあり、腹立
たしくもあることだった。

「ごめんね。仕事を始めた矢先に、こんな面倒に巻き込む事になる
かもしれない」

「いいえ。俺はそのためのアシスタントですよ。それに、もし近く
にそんな悪い不幸喰いがいるのなら、圭太に会わせるわけにはいき
ません」

正統派――という表現が正しいのは分からないが――不幸喰いの
龍ですら、圭太の背負う不幸の誘惑に勝てなかったのだ。自分の欲
に忠実である不当な不幸喰いが圭太に会えば、その不幸は根こそぎ
喰われてしまうだろう。そうなれば、圭太は本当に壊れてしまうか
もしれない。

「うん。そうだね」

俯き加減に頷く恭平は、それとは正反対の方向を向く龍の目には入らなかった。

今の彼が思うことは、《圭太を傷つけない》と、それだけだ。
「今度咲さんに会ったら、周囲の人間について、聞いてみることにするよ」

「昨日は母親も来ていましたよね？」

「うん。名前は雪華^{ゆきか}さんだったかな。彼女は娘の本音と傷を癒す事に、少々翻弄されている様子だった。僕としては、彼女はまずいじめをなくすことに奮闘するべきだと思うんだけどね」

「うちの親だつて、多分俺がいじめられているといったら否定しますよ」

龍の親は、「将来、将来」と現在の龍には見向きもせずになんか聞かせてきた。いい大学に入るため、いい会社に入るため。そんなことばかり考えていた親が、目先の息子の傷に気付けたわけがない。

そんなものはお前の勘違いだと、一言で片付けられていただろう。「それでも一応、龍くんの親御さんなりに愛情を示していたんだよ」
今となつてはそれも分かっている。だから龍は、黙ってコーヒーを一口飲んだ。

授業というものは、ボーっとしていれば案外すぐに終わってしまう。何も考えていないのは、眠っているのと同じことなのだろうか。眠っている……。

放課後の下足ロッカーで、ローファーに手をかけたまま圭太の動きが止まった。

今朝の事は、夢だったのだろうか。そうだ、落ち着いて考えたら、“あれ”が現実だったわけがない。男にキスされたとか、五年、いや、実際にはもう六年近く弾けなかったピアノが弾けただとか、不

幸を喰う人間だとか……。

「……ありえなくて、都合よくて、ファンタジーな夢だな」

それが圭太の想像上の世界だというなら、彼は自分を疑いたかった。考えていることが意味不明すぎる。

それともこれは、病気の予兆か？

「……」

バカバカしい、と圭太は首を左右に振った。

龍があまりにも自分のことを理解してくれるから、少し都合よく考えてしまったただけだろう。でなければあんな夢、いくらなんでも突飛過ぎる。

そのまま掛けていた手を手前に引いて、ローファーを取り出した。無造作に地に放ったそれは、ふぞろいに落下する。器用に左右の靴を履き替えれば、内履きをロツカーにしまった。体を外に向け、肩にかけた鞆を持ち直す。

「圭太ーっ！」

踏み出そうとしていた足は、その一声に止まった。それが誰のものかは分かっている。この学校で、彼を《圭太》と呼ぶのは一人だけだ。

億劫そうに振り返る圭太を、気にしていないのか気付いていないのか、香苗かなえは笑顔で迎え入れた。

「今帰り？ あたしもだよー。……でも残念ね。これから練習だから一緒に帰れないの」

誰もそんなことは誘っていない。

「圭太、明日は何時？」

「は？」

明日、何か約束していただろうか。それに何時って、俺が決めるのか？

「……何が？」

こんな訊き方をすれば、香苗が怒る事は分かっていた。だが、無理に話を合わせて覚えていない事がばれれば、余計に彼女の機嫌を

損ねる事になる。どうせ怒られるなら、早いうちに覚えていないと白状したほうがいい。

案の定、香苗の顔から笑顔が消えた。

「……コンサートのチケット、買ってくれたじゃない」

低くそう呟かれて、おもわず「あ」と上げそうになる声を、圭太はグッと抑えた。

すっかり忘れていた。チケットも財布に入ってたまだ。

「明日の五時半開場で、六時開演のコンサート！あたしの登場は三十分後の六時半。それまでにちゃんと来てくれるんでしょ？」

こんなことなら、覚えているふりをした方がよかったかもしれない。圭太が嫌そうにしかめた顔を逸らしても、香苗はただ捲くし立ててくる。

「まさか圭太、最初から来ないつもりだったんじゃないでしょうね！？　そんなの許さない。あたしの演奏が終わった後、ロビーで会おう？　絶対！　じゃないと嫌いになるから！」

そんなことは別に構わないと言ったら、この少女はどうするつもりなのか。これ以上の面倒は避けたくて黙っていたが、ぼんやりそんなことを思ってみてもいた。

とりあえず、五時半なら診療も終わっているから、恭平に行ってもらえるよう頼もうと思う。今ならちょうど龍もいるし、チケットは二枚だから、後々言い訳もできるだろう。

「分かったの？　圭太！」

「分かったよ。だから行けって。練習遅れるよ」

圭太の言葉に、香苗は携帯電話の時計に目をやった。それが表示する時間に慌てれば、さっさと靴を履き替えて外へと出て行く。その背中が見えなくなってから、圭太は盛大に溜息をついた。

「コンサート？」

圭太が帰宅してから診療時間が終わるまでには少し間があった。何かを始めて終えられるほどの時間でもなかったため、ボーっと待っていたように思ったら、うかつにも眠ってしまった。別に何もしてないのに、今日は嫌に憂鬱な気分なのだ。

とりあえず重い体を起こして下へ行ったら、恭平は夕飯の用意をしていた。どうしようかと思案している間に、龍がリビングへ現れたので、そちらに話を持ちかけることにした。

風呂上りらしい龍は、タオルで髪を乱暴に拭きながら、圭太が差し出したチケットを受け取る。

「うん。バイオリンのね。知り合いが出るからって、チケット買わされたんだ。龍くん、音楽興味ある？ よかったら、父さんと二人で行ってきてよ」

こちらの話を聞きながら、龍はソファまで移動した。それに倣って圭太もソファに行き、龍の隣に腰を降ろす。

チケットを凝視していた龍は、不意に顔を上げて口を開いた。

「何でお前行かないの？」

「へ？」

「二枚あるから、誰か誘うのは分かるよ？ でも、お前が買ったんならお前が行けよ。その知り合いだって、そのつもりで売ったんじゃないの？」

思いもかけず核心を突かれて、圭太は言葉に詰まった。大人しく受け取ってくればいいものの、どうしてそういうところにみんなこだわるのだろう。

「俺は……いいよ。音楽好きじゃないし。——父さんは、結構好きなんだ。だから龍くん、父さんと一緒に行ってあげて」

「好きだろ。朝ピアノ弾いてたじゃん」

「え……？」

まるで何でもないことのようにそう言われて、圭太は目を剥いた。ピアノを弾いていた？ 俺が？ じゃあ、

昨晚から今朝に掛けての出来事は、夢じゃない？

フツと、目の前が白けた。そのまま気絶できたらよかったのに、あいにくただの眩暈で終わった。こめかみを押さえて、わずかに前かがみになる。

「圭太。あれは夢じゃないからな」

「……」

「お前はピアノを弾いた。そして不幸喰いのことを知った」

ゆっくり、自分の右手を持ち上げた。ピアノを弾いたのだと自覚した途端、それは小刻みに震えている。知りたくなかった。

知りたくなかった。

「圭太……。これ、コンサート。一緒に行こう？」

圭太は驚いて龍を見る。何を言っているのか、すぐには理解できなかった。

「な……？ 何で？」

「嫌いじゃないだろう、音楽。聴けば少しくらい癒されるかもしれない。逆療法だよ。お前はいつまでも逃げすぎなんだ」

そんな風に言われると、圭太の心は余計頑になる。自分は、逃げた？ ピアノから。音楽から？

「——俺は、逃げてなんかない。音楽が本当に嫌いになったから、聴きたくもなくなっただけだ。俺は、もう嫌なんだ。才能でしか生きられない世界は、才能がない奴には酸素を与えられないのと同じだから。苦しいんだ。だから俺は逃げたんじゃない。自分が生きられる世界に來ただけだ」

「だったら、捨てろよ」

顔色一つ変えずに龍は言い切った。はじめは言葉の意味が分からなくて、圭太は怪訝そうに目を細める。

そんな圭太を見かねて、龍は言葉を続けた。

「捨てろよ、ピアノ。あんな静かな部屋に放置しておかないで、いないならきつぱり決別すればいい」

心臓をぎゅっと驚づかみにされたような心地がした。彼が言わんとすることはもっともだ。でも、それに領けない圭太は、一体何処

から来るのだろう。

「……違う、あれは、父さんが……。あれは、母さんの形見だから、捨てることは……」

まるで言い訳のように、ぎこちなく言葉を紡いだ。

でも嘘ではない。あのピアノは、生前律子が毎日弾いていたものだから、捨てるなんて考えは、圭太にも恭平にもなかった。たとえそれが圭太にとって嫌なものでも、そこにあるのは当たり前だったのだ。

「だったら捨てるという形でなくても、どこかに寄付するとか、考えればいい。誰にも弾かれず暗い部屋に取り残されている方が、お前の母親は嫌がるんじゃないか？」

圭太は言葉を失った。

龍の言うとおりだ。何よりピアノを愛していた律子が、ピアノをただのインテリアにすることを望むはずがない。

そしてそれに、恭平が気付かないはずはもつとない。だったら考えられる事は一つだけだ。律子がピアノを、どこにもやらないことを望んだから。

もう一度圭太が、ピアノを弾く日のために。

「……大きなお世話だ」

吐き捨てるように圭太は言った。でも、この考えが本当なら、律子は圭太にピアノを譲ったという事になる。それはつまり、このピアノをどうするかは圭太が決めてもいいということだ。それが律子の意思に反していても、もうピアノは圭太のものだから関係ない。

そう思うのに、やっぱり捨てるなんて考えは浮かばなかった。ピアノはあの部屋にあればいい。弾きたくないけど、傷付きたくないけど、失いたくない。

圭太は俯いたまま黙り込んでいた。それを、龍がどう思ったのかは分からない。先ほど呟いた言葉を、彼に対してのものだと思っただろうか。分からないが、ふと開いた彼の口からは、それを事実と

する言葉が紡がれた。

「そうか。ならもう何もいわねえよ。その代わり、俺だってお前の気持ちとかいちいち考えるのはやめる。いいな」

パツと顔を上げた圭太は、「え？」と声を上げた。

「大きなお世話だと思われても、俺は先生にお前を任されたんだ。だけど、だから言うんじゃない。俺だってそう思った。圭太、俺がお前を癒してやる」

「何、いつてんの？」

さすがに言葉の意味が分からなくて、圭太は困ったように顔をしかめた。

「だから、またお前がピアノ弾けるようにしてやるつつてんだよ」

「い、いいってば！ 弾きたくないもの弾かせるのが、カウンセラーの仕事なの？ だいたい、俺以外に患者はたくさんいるでしょ？

龍くんの仕事はそっち——」

口を塞ぐ代わりに、頬をつままれた。龍は呆れたように目を細めてから、

「間違いが二つある。一つ目は、……弾きたくないなんて嘘だろ？ 弾けるなら、もう一度弾きたいんだろう、ピアノ。それに、俺はカウンセラーとしてお前を癒すんじゃない。昨日も言ったけど、俺が癒したいから癒すんだ」

——圭ちゃん、少し休んだら？

母の声が背中に聞こえた。だけど、手を止める気は更々ない。

もつと、もつとだ。

もつと練習して、勝たなくちゃ。

奪われる前に、あいつに。

あいつに勝たなくちゃ。

「……」

「何安心してんだよ。行くぞ」

「わっ！ 引つ張らないでよ」

翌日、圭太は龍に、半強制的にコンサート会場まで連れて来られていた。

大きなホールのあるこの会場は、律子がよくコンサートを開いていた場所でもあった。

そして一度だけ、圭太も演奏をした事のある会場。

吐き気がした。でも腕は龍にしっかり掴まれているから、逃げる事は叶わない。

会場に入れば、そこは昔と変わらない世界が広がっていた。オレンジのライトに照らされた廊下は、綺麗に清掃されて塵一つない。行き交う人々も、みな幸せそうに笑っていた。

受付でチケットを切って貰えば、会場に入る。三百人は入るだろう大きな会場で、圭太は龍の背中だけを頼りに歩いた。

自分も参加するなら十枚売って来い。そう言われた割には、圭太達の席は真ん中の二列目というベストポジションだ。だけどそれをわざわざ香苗が用意したということを、圭太が感じ取る事は微塵もない。せいぜい、嫌がらせか、と思うくらいだ。

「凄いな。こんなでかいところだとは思わなかった。お前の知り合
いって高校生なんだろ？」

指定席に座って、龍は感慨深げに呟いた。他の客のざわめきや、
音響調節のテストの音で、集中しなければ声を聞き逃しそうだ。

「そいつ……伎倉^{きくら}はただの友情出演で、主役じゃないもん。それで
もあいつは大分有名だけどさ」

「お前の母親と同じくらい？」

「なわけないだろ。母さんは世界的にだって有名だった。伎倉だっ
てこれからどうなるか分からないけど、高校卒業と同時に母さんは
留学したから、それができなきゃ追いつけないだろうな」

「ふーん」

返事はしても、それがどういうことかはよく分かっていない様子
だった。

「龍くんてさ……、音楽に興味ある？」

「いや、ないな。学生時代は勉強ばかりだったし、クラシックど
ころか、流行りのJ・POPとかもよくわからなかった」

それでよく今日来る気になったな、と圭太は目を丸くした。音楽
に興味のない人間がクラシックを聴いても、眠くなるだけだと思う。
ふと、舞台裏からのバイオリンの音が聴こえた。周りの人間には
聴こえていないようだが、何分圭太は耳がいい。

ベートーヴェンのロマンス第二番だ。誰にでも耳馴染みがあるだ
ろうこの曲は、香苗が圭太によく聴かせてくれたものでもあった。
弾いているのは香苗ではなさそうだが、あの頃、それに倣って圭太
もよくベートーヴェンを弾いていた。

ピアノ・ソナタの第一番から第三十二番まで弾きこなしていた頃
もあったことを、今になって思い出す。

「圭太？」

突然何も話さなくなった圭太を、さすがに怪訝に思った龍は、顔
を覗き込むように身を屈めた。

それに気付く余裕のなかった圭太は、ただ一心にフラッシュバック

クに耐える。

そんな風にたくさんの曲が弾けた圭太は、当然苦勞してピアノを弾いている人間たちに疎まれた。「天才の息子はやはり天才だった」などと書いた記事が出回ったときは、本当に散々な方法でいびられた。

決して天才ではなかった圭太にとって、それは素直に傷になったのだ。

——何が天才だ。あんなものは実力じゃない。ただの人間レコーダーだ。もとある曲を、レコードのままに奏でているだけじゃないか。

そう言ったピアニストの言葉が、そのまま記事になったこともあった。そしてそれに賛同する人は、圭太の知る限り、ピアノを愛する人のほとんどだった。

自分には、ピアノを弾く権利がない。大好きなピアノを弾く、資格がない。

急に、圭太の心は不安に襲われた。嫌だ。ここは嫌だ。このままここにいたら、もっと多くの音楽を耳にする事になる。それは圭太の心を癒しても、潤してもくれない。ただ痛みとなって全身に広がるだけだ。

この場にいることに息苦しさを感じた圭太は、グツと唇を噛み締めた。不意に腕に圧力を感じて、とっさにそちらを見る。

龍が、しっかりと圭太の腕を掴んでいた。

「逃げるな」

言われてから漸く気がつく。いつしか圭太の腰は椅子から浮いていて、体は入り口の方に向かっていた。無意識に、とっさに、圭太はここから逃げようとしていたのだ。

これは正当防衛だ。逃げじゃない。心でそう思うのは簡単なのに、今度は龍の言葉に反抗する意志も生まれない。だって圭太が、“この会場から逃げようとした事”は事実なのだ。

「……っ」

「座れ。大丈夫だから。お前が思っているほど、音楽はお前の敵じゃない」

悔しかった。そんなこと、音楽を知らない龍に言われても何の励みにもなりはしないのに、どこか嬉しさを感じた事が圭太は悔しかった。

大人しく再び席に腰を降ろす。同時に会場の証明が落ちた。

コンサートが始まってからの移動は失礼に当たる。出て行くなら今がチャンスだというのに、抜かりない龍は圭太の腕を掴んで離さない。

鬱陶しく思いながら、そこには確実に龍がいるのだという事実が、どこか圭太を安心させた。

開演のブザーが鳴る。進行係の簡単な諸注意と、演奏者の紹介の後に、当人が入場してきた。盛大な拍手の後に、バイオリンを肩と顎に挟んで演奏を始める。

奏でられる曲は、どれも圭太の知っているものばかりだった。知らない曲でも、聴けば手が震える。弾きたくなる。弾けないのに、鍵盤を目にすれば、逃げ出す事は間違いないのに、弾きたくなる。

——お前が思っているほど、音楽はお前の敵じゃない。

そうかもしれない。音楽は、圭太を決して裏切りはしないのかもしれない。

でも、守ってもくれない。音楽は圭太を必要とはしていない。

耳を塞ぐ。目を閉じる。何も見たくなかった、聴きたくなかった。無になりたい。一人は怖いけれど、人のいる世界も怖い。

一曲の演奏が終われば、拍手が沸き起こる。それが五回、六回と続けば、再び進行係の声が聞こえた。

「皆様、ここで今日はゲストとして、今音楽界を賑わせている高校生バイオリニスト、伎倉香苗の登場でございます！」

拍手と共に、香苗が会場に入った。真っ赤なロングワンピースに身を包んだ彼女は、とても圭太と同じ高校生とは思えない。

ふと、香苗と目が合った気がした。

だけどこのとき、もう圭太は疲れきっていた。これ以上音楽を聴き耐える気力は残っていない。まして香苗は、ピアノを愛し弾き続けていた頃の、圭太の記憶を共有している。彼女の奏でる音は、圭太の思い出をより鮮明に思い起こさせるのだ。

バイオリンを構えた。弓が弦に触れる。そこから先は、文字通り地獄のような時間だった。

全ての演奏が終われば、退場する観客の中に、誰より早く扉を抜けるものがいた。

どこまで走ればいいのか分からない。何処まで行けば、この心は静まってくれるだろう。

苦しい。弾きたい。逃げたい。戻りたい。悲しい。愛しい。もう一度。

弾きたい弾きたい弾きたい。

先に壁が見えた。その先に進むには、角を左折しなくてはならない。だけど圭太の足は、行き先を阻む壁に手をついて、止まる。

弾きたいけれど、弾けない事は分かっていた。だって今も、こんなに手が震えている。

これは、ピアノが弾きたくて弾きたくてたまらなくて、震えているわけではないのだ。圭太の心は、ただ恐れている。幼い頃に受けたあの傷を思い出すことを、再び味わう事を恐れている。

ピアノは圭太の味方じゃない。

胸が苦しかった。喉が焼けそうになる。このままでは、圭太の体はどろどろに溶けて消えてなくなりそうだ。

一体、何がいけなかったのだろう。あの頃、圭太はどうして大好きなピアノをやめなくてはならなくなったのだろう。どうして今、音楽を聴いただけでこんなに恐い思いをしなくてはならないのだろう。

——圭ちゃん。

唐突に、脳裏に浮かんだのは律子だった。天才ピアニストと呼ばれた律子は、死してもなお人々の心にその存在を残している。

律子が圭太の母親じゃなかったら、圭太は今も、ピアノが弾けていただろうか？

否、弾けていた。

律子のせいだ。彼女が母親でなければ、圭太はただ思うままにピアノを弾く事ができていたのだ。有名になりたかったわけじゃない。ただひっそりと、好きな曲を好きなように弾いていたただけだ。それを、律子が壊した。

——母さんのせいで——！

「圭太！」

骨が軋むような痛みが走った。振り返れば、龍がひどく焦ったように圭太の腕を掴んで見下ろしている。それに対して、圭太は訝しげに目を細めた。

「何？」

「何考えてるんだ、お前」

そう言った龍は、何かを恐れているようだった。それが何なのかは、もちろん圭太には分からない。だけど、一瞬龍が圭太の肩越しに後ろを見るから、ピンと来た。

——俺の不幸を、見てる。

律子のことを一瞬でも恨んだ圭太は、その不幸の念を強くしたに違いない。龍は、圭太の不幸の大きさを恐れたのだ。それだけ圭太は、人になに不幸を背負っている。

一度俯いた圭太は、龍の腕を振り払って体を背けた。壁に肩をもたれさせる。

「何って……、分かんないの？俺が今感じる事なんて一つしかない。俺、嫌がったよね？音楽なんか聴きたくないって言ったよね？あの会場から出ようとしたよね？」

「圭——」

「音楽が敵じゃないことは知ってるよ。俺がピアノ弾けなくなったのは、俺のピアノを批判する大人達のせいだ。でも、俺だって努力したんだよ？ 誰にも文句なんか言われなくらい巧くなるうって、何回も何回も練習したんだよ？ でも大して巧くなんかならなかった。いくら敵じゃなくなつて、味方じゃないなら意味がない。意味ないんだよ！ 何が俺を癒すだよ？ これがあんたの癒し方なのかよ？ 母さん恨ませる事が俺を癒す事になんのかよ！？」

体を壁から離せば、龍に向き合つて一気に怒鳴りつけた。一息に言つたので息が上がる。ゆっくり肩で息をして、圭太は龍を睨みつけた。彼は何も言わない。やり方を間違えたと自負しているのかもしれない。

でもその態度も、今はただ圭太を苛立たせた。

「何とか言えよ？ 俺を癒すんだろ？ またピアノ弾けるようにしてくれんだろ？ なあっ！」

一度たりとも、圭太は龍から目を逸らさなかった。逸らしたら負けだ。俺は間違つてない。嫌だった、苦しかった。龍くんはそんな俺の気持ち、全く理解してくれていなかったんだ。

「圭太！」

不意に、この雰囲気、にそぐわない明るい声が、圭太の名前を呼んだ。そういえば、ロビーで会おうと言われていたことを思い出す。まったく、彼女も彼女で、簡単に人前に出てもいい存在ではないというのに。

深い溜息をついてから、圭太はゆっくりと振り返った。真っ赤なドレスを目立たせなかったために、黒いロングコートを羽織った香苗が、こちらに向かって駆けてくる。

それでもオーラなのか、そこを行き交う人々は皆、そこに伎倉香苗がいることに気がついていて。彼女は芸能人でないから、馴れ馴れしく声をかける者もいなかったが。

圭太の元にたどり着いた香苗は、一度二度短く息をしてから、晴れ晴れと顔を上げる。

「良かった、ちゃんと来てくれたのね。ステージからも見えてたんだよ。思わず手を振りそうになっちゃったもん」

「そう……」

「どうだった、久しぶりの音楽は？　またピアノ弾きなくなっただんじやないの？」

「……」

「あのね、あたしのバイオリンの先生、有名なピアノの講師とも知り合いなのよ。最近可愛がってた生徒さんが留学しちゃったから、新しい生徒を欲しがっているらしいの。習ってみない？」

「……いいよ、俺は」

どうしてか圭太は、香苗には自分の感情を露に怒鳴りつける気にはなれなかった。香苗は女の子だし、古い自分を知っているから、傷つけないし、弱いところを見せたくない。

「そんなこと言わないでよ。おばさんの息子だってことは言っていないの。だから気兼ねする事なんてないんだよ？　……あ、こんにちは」

そこで漸く、香苗は龍の存在に気付いたらしかった。どこか声音を高くして、小さく頭を下げる。不意にこちらを見た香苗と合った目が、「誰？」と訊ねていた。

圭太はぎこちなく龍を見て、香苗に向きなおる。

「……この人は、柳沢龍くん。やなぎさわ父さんの助手のカウンセラーだよ」

「はじめまして。圭太の友達って君だったんだね。バイオリン聴かせてもらったよ。音楽は詳しくないんだけど、でも上手だった」

「ありがとうございます。あ、あたし、圭太の幼なじみの伎倉香苗です。柳沢さんって若そうですね。おいくつなんですか？」

「二十四だよ」

「え？　じゃあ……七歳差？　大学は出てらっしゃるんですよね？」

「うん。今二年目。ちょうど研修が終わるころに、篠塚先生が助手を探しているって言うから、まだまだ未熟なんだけど雇ってもらったんだ」

「へえ」

先ほどから、自分を無視して話を進める二人に、圭太はどこか嫌悪し始めていた。大体、香苗は明らかに声音が違っし、龍も自分と話すときは雰囲気がちがう、と思う。

別に圭太は、二人を惹き合わせるためにここに連れてきたわけではない。

それが二人ともに対するやきもちなのだと気づく事はなく、圭太はただ早く帰りたいと顔をしかめ続けていた。

「――四条圭太？」

だから、その声は唐突だった。

四条、それは圭太の旧姓で、そう名乗っていたのは十二歳になる前までだった。だから、かかった声に聴き覚えはなくてもこれだけは分かる。

ピアノを弾いていたころの俺を知っている。

圭太は振り返ることができなかった。そしたら、変わりに香苗が口を開く。

「亜門あもんじゃない。いたの？」

――ドクン。

「香苗ちゃんも久し振り。今日のコンサートの主催者、知り合いなんだ。香苗ちゃん、またうまくなったんじゃない？　しかも綺麗になったね」

「香苗ちゃんて呼ぶのやめて。あと、あんたに綺麗って言われても嬉しくない。このフェミニスト」

「酷いなあ。……四条圭太だよ。俺のこと覚えてる？」

亜門と呼ばれた男が、再び圭太に声をかけた。

覚えているなんてものじゃない。忘れるわけない。圭太は、彼の決戦に敗れてピアノをやめたのだ。

前阪さきさか亜門。かつて同じ音楽スクールで、律子にピアノを習っていた圭太のライバル。振り返ることができなくて、圭太はただ大きく肩で息をした。

ふと、龍が圭太の肩を支える。

「——ごめん。俺達この後用があるんだ。悪いんだけど、話したかったらまた連絡してくれ」

その手のぬくもりが、圭太の意識をなんとか留めてくれた。悔しい。こんな風に助けられるから、圭太は龍が嫌いになれない。

二人が去った後、亜門はふう、とため息をついて、長い前髪をかきあげた。

「嫌われたもんだね、俺も」

「亜門、ここに圭太が来るの分かってたの？」

「分かるわけないじゃん？ 偶然だよ。でも、一回会いたかった。

あいつがピアノしてないと、俺張り合いなくて困るんだよね」

隣の香苗に、につこりと笑いかける。いつの間にか、亜門の名前は世界中に広まっていたが、それでも彼が興味を持つピアノリストは、篠塚圭太以外にいない。

「だったら素直にそう言えばいいのに。わざと四条なんて呼ぶから、嫌がられるのよ」

的確な香苗の指摘に、亜門はしてやられたように笑った。

——優勝は、前阪亜門！

アナウンスの声に、自分は負けたのだと知った。

律子にピアノを学んでいる亜門。師を同じくする者に負けることは、圭太の実力のなさを物語っている。

思えば圭太への酷い中傷は、これから激化していった。

病院の裏には庭があり、そこにはブロックを三十センチほど積み重ねた花壇がある。元々は恭平が患者治療の一つとしてつくり、結婚してから律子が自分の好きな花を植え、世話をしていた。今は看護婦が世話のほとんどを担っている。

しかし今日は、当の看護婦達が暇そうな圭太を見つけたのをいいことに、水遣りを押し付けてきた。だから今、シャワー状のホースで花に水をやっているのは、仏頂面の圭太だ。

花というものに圭太の興味は惹かれない。特別綺麗だとは思わないし、ただでさえ短い命をこんな狭い空間で無理に咲かせなくてもいいと思う。

枯れかけた撫子が目の端に映れば、ますますそう思わずにはいられなかった。季節が終われば枯れてしまう花。自分の人生もこうしてはかなく散ってしまうのだろうか。

少なくとも、花が開く最盛期、圭太のそれは、もうとつくに終わってしまったように感じられた。自分の人生は、このつまらないもののまま、残りの一生変わりはしないのだろうか。

シャー……。

たったった……。

花壇はシングルベッド二つ分ほどの大きさだ。一見大きく感じられるが、いざ水をやってみれば、それは十分もかからず終わってしまった。

ホースの放水ボタンから手を離す。水の音が辺りから消えれば、そこは一気に静かになった。

たったった……。

だからだろう。その音は突然圭太の耳に届いた。足音だ。それも駆け足。そして、近い。

あまりにも軽やかなその足取りに、圭太は訝しげに振り返った。自分より年上である大人たちが、そんな軽やかな音を立てるだろうか。圭太自身も今はこれより重い足音を立てるはずだ。

振り返った先には少女がいた。顎のあたりと眉の上で切り揃えられた黒髪を揺らす少女が、圭太の後ろにいた。

「君……？」

ここは普通の一軒家の裏庭ではない。病院だ。だから、ここに圭太の家族以外の人間がいるのは、決して珍しいことではない。

でもそれも、裏庭で出会うことは珍しいことだった。看護婦と一緒に、病院を半周しなくてはならない。

少女は、圭太を見てまずそうに顔をしかめた。それでも逃げれば余計に怪しいということは分かっているようで、そこから動くことはしない。

「君は？」

できるだけ穏やかに、圭太は訊ねた。こんなところに来る子供は、大概が患者だ。

「……」

少女は何も言わなかった。と、いうよりは、圭太の質問が悪かったというべきだろうか。「君は？」と訊かれて、答えるべき内容が何か分からなかったのだろう。

「名前。俺は圭太。君の名前は？」

「……咲」

咲と名乗った少女は、顔に似合わない低い声を出した。いや、地声ではない。初めて見る人間に対して、戸惑っている声だ。

圭太は、咲の顔を覗き込むように膝に手をついて屈んだ。

「どうしてこんなところにいるの？」

「……お兄ちゃんは？」

「俺？ 俺はこの息子だから。花に水やりしてたんだ」

「かんじゃじゃないの？」

「違うよ」

「咲は、かんじゃなの」

まるで言葉の意味など理解していないように、咲はそう言った。

圭太をまっすぐ見つめる目に、一点の曇りもない。

「……そう、なんだ」

「咲は、心を元氣にするために、先生とお話してるの。そう、ママが言ってた」

「そう」

「お兄ちゃんは？」

「え？」

唐突な質問に、圭太は目を丸くした。自分は患者ではないといっているのに、どうして少女は、自分を彼女と同じ対象のような目線で問い掛けてくるのだろう。

「俺？ 俺……は、だから、患者じゃないから、何もないよ」

「何もないのに、ここにいたの？」

「？ どういう意味？」

「咲は、きつとここにはだれもいないと思ったの」

「どうして」

「ここは、咲だったら来たくないから」

「……」

圭太は、それ以上言葉をつむぐ事ができなかった。別に咲の言葉に信憑性があったからではない。でもたしかに、看護婦達はここに来る事をためらうものが多かった。日当たりが悪いわけではないのに、いつでもそこは薄ら寒いから、と。

しかし、圭太にはわからない。ここがなぜそう毛嫌いされるのか。

別にここは寒くないし、花たちだって問題なく育っている。

でも、こんな幼い少女すらが、ここには来たくないのだと言う。

これではまるで、違和感なくここにいる圭太のほうが異質なようだ。

「でも、だったら、咲……ちゃんはどうしてここに来たんだよ？」

「だれもいないと思ったから」

咲の視線は、心なし下を向いていた。一人になりたかったのか。

「治療……嫌なの？」

「先生は、咲にいろんな質問する。咲はそれに答えるだけでいいんだけど、なんかね、たまに先生はいやな顔をするの」

「嫌な顔？」

「そう。咲がまちがった答えを出したみたいに、まゆをキュって寄せるの」

患者の意見に私的感情を挟んではいけない。カウンセラーでない圭太すら、そんなことは常識として分かるのに、恭平がそれをやっているというのか。にわかには信じられない話だった。

「だから咲ちゃんは、診療所に戻りたくないの？」

「うん。それにね、咲は別に、先生とお話しなくても元気だもん」

はきはきとそう口にする。それはたしかに、彼女は病気などではないのでないかと、圭太に想像させてくれた。

でも、元気だとも言えない。

「元気って、言うならさ。どうしてここにいるんだよ。どうして病院に来る事になったの？」

こんなことを訊いたと恭平や龍に知られば、間違いなく怒られるだろう。素人が、精神病患者の私情に口を挟むものではない。

まして圭太はカウンセラーの息子だ。そんなことを安易にやったとなると、いろいろな責任も降りかかってくる。それでも、この少女の内に隠されたものが、どうしても気になった。

「咲は……」

ふと、少女の瞳に影が落ちる。

「咲は……病気なんかじゃないもん」

圭太はハツとした。目の前に、自分がいる。病気なんかじゃない。どこもおかしくなどない。と、断固として言い張っていた自分が、それと同じことを言う少女が、目の前にいる。

「咲ちゃんは……、病気なんかじゃないよ。別にどっかにおかしいところがあるわけじゃない。普通だよ。ただちよっと、嫌な事が多いだけで」

咲が、ふと顔を上げる。その顔が、ほつとしたように緩んだ。

「うん。大丈夫だよ。それにね、いやなのは今日だけだから」

「え？」

「明日になれば忘れちゃうもん。やなこと言われても、咲は大丈夫なの」

気丈な少女なのだな、と一瞬思ったが、その考えはすぐに思い直された。

だったらどうして、病院^{びょういん}に来るのだ。

「咲ちゃん、どうしてここに来る事になったの？」

「ママがね、行こうって言ったから」

圭太はゆっくりと首を傾げる。だったらその母親は、どうして咲を病院に連れてくる気になったのだろう。この少女は、一見どこにでもいる普通の小学生だ。

「……早く、帰りたいな」

徐に、咲がそう言った。視線が圭太から外れ、意味もなくだろうが遠くを見つめる。

「家、好き？」

「好き。ママがいるし、まいねちゃんもいる」

「まいねちゃんて？」

「いとこ。いっしょに住んでるの。あのね、やなことあっても忘れちゃうって言ったでしょ？ それはまいねちゃんのおかげなの。まいねちゃんがおまじないしてくれるから、咲は毎日元気なんだよ」

「……そうなんだ」

圭太は曖昧に笑った。おまじないだの何だの、この年頃の少女な

らば好きそうなものだ。しかし、生憎圭太はそういうものに興味がなく、話についてもいけない。

「咲ちゃん」

圭太とは違う声が、咲の名前を呼んだ。振り返らずとも、それが誰の声か圭太にはわかる。今一番聴きたくなく、ここ最近ずっと避け続けている声だ。

「こんなところにいたの？ お母さんが待ってるよ。今日はもう帰るんだって」

「帰っていいの？」

「先生とのお話は終わったからね。行こう？」

足音が背後から近付いてくる。きゅっと結んだ唇を、圭太は耐えるように噛み締めた。龍の顔を見ると、やっぱり無意味に責めなくなる。決して、龍が恨めしいわけではない。ただ、自分が楽になりたいがために。

ふと、圭太は安心したように肩を落とした。咲が、圭太の隣を横切ったからだ。龍と咲が、圭太の後ろで会話をする。これでとりあえず、龍と顔をあわせる必要はなくなった。

「うん、早く帰りたい」

心底嬉しそうにそう言った咲は、またあの軽快な足音をたてながら駆け出したようだった。この足音が聞こえなくなったら、自分も家に帰ろう、と思って圭太は目を伏せる。

「圭太」

なのに、龍はこうして圭太の名前を呼んでくるのだ。

できたらまだ、目も合わせたくないのに、そこで圭太が振り返るのを待っているのが分かるから、仕方なく振り返ってしまう。

一日ぶりに合わせた龍の目は、いつもと変わらず力強かった。

「……何」

「早く中入れよ。ここにいたら、嫌な気持ちにならないか？」

「……みんな言うけど、俺はそれほど」

「そうか。——ここに充滿してるのは、お前の不幸だもんな」

「は？」

意味深な言葉を残して、龍は咲の行った方へと足を向けてしまう。
一人残った圭太は、ただそこで呆然とするほかなかった。

「やっぱり今日も、咲さんにした質問の答えは変わらなかったよ」

「昨日の自分を、不幸だとは思っていないって……？」

「うん。昨日も今日も嫌な事は言われているけれど、辛いのは今日だって。昨日なんて、今日に比べれば全然思い出らしい」

「昨日が思い出なんて……俺でもいえませんよ」

ソファに腰かけた龍と恭平は、夕食が終われば仕事の話に没頭した。

傍に自分がいるのに、平然とそんな話をして本当にいいのだろうか。そう思いつつも、圭太は興味から二人の話に聞き入っていた。

大きな窓を開け放ち、庭に片足を投げ出す恰好で横座りしている。
「正直、こういう例は稀だよ。もし本当に不幸喰いが近くにいたら、それは僕らが思っているより全然近くなのかもしれない」

「不幸喰い？」

思わず、圭太はそう聞き返してしまった。

龍と恭平の視線が圭太に集中する。そこに圭太がいることを、まるで忘れていたようだ。

「ああ、圭ちゃん……。これはあまり公にできない話だから、よかったら上に行っていてくれるかな？」

恭平が、申し訳なさそうにそう申し出てくる。その言葉を、圭太は聞こえなかったふりをした。

「不幸喰いは、人を不幸にするためにいるんじゃないんでしょ？
なんで咲ちゃんが病院に来なきゃいけないような事態になっただけ？」

「それは……」

「不幸喰いだって、いい人間ばかりじゃない。いいから圭太、お前は先生の言う事聞いて上に行ってる」

言葉に詰まりかかった恭平が変わって、龍が厳しくそう口にする。自分が首を突っ込んだところで、どうにかなる問題でないことは分かっている。それでも、圭太は素直に立ち上がることができなかった。

一度関わってしまった咲に対して、圭太は情がわいてしまったのだ。

「俺、咲ちゃんの気持ち分かるよ」

「俺や先生だってそれなりに理解している」

「不幸喰いに不幸喰われた気持ちだって分かる！」

「だけど、そのあと再び同じ不幸を背負う苦しみは分からないだろう……っ」

一度たりとも躊躇わない龍に、圭太も返す言葉がなくなってくる。カウンセラーでない圭太に関わる問題ではないと言う事が、全身から伝えられるようだった。それでも圭太は、なんとか口を開いた。

「咲ちゃんは……、父さんと話すのが嫌だって言ってた」

ひゅっと、恭平が息を飲む音が響いた。言いたくはなかったが、どうしてもこの問題に対して、圭太は引き下がりたくない。

「父さん、咲ちゃんは父さんの戸惑いを敏感に感じ取ってるよ。父さんが咲ちゃんに対して困惑してるの、ちゃんと気付いてるよ。あんな小さな子供に怪訝な顔なんか見せちゃダメだよ」

「……そうだね」

恭平の視線が机におちた。さすがに龍も、困惑して二人を見回す。

「二人は、咲ちゃんを元氣だと思わなかった？」

唐突に話を切り出してやった。自分のペースに持っていくことで、強制的にでも認めさせようと思う。

もう圭太も、無関係ではないのだと。

「不幸喰いとか関係なしに、学校で嫌な事、言われてるんだよね？ それにしては、いつ来ても咲ちゃんが元氣だとは思わなかった？」

二人は答えない。それは肯定を意味しているのだと、圭太は受け取る。これでとどめだ。

「でも」

「でも、元気じゃない」

第一声が重なったと思ったら、紡ぐはずだった言葉が龍の口から吐かれた。

困った圭太は、真意をはかるように龍を見上げる。

「見た目はどんなに元気でも、咲ちゃん自身は決して元気じゃない、そうだろう？ 分かっているよ。俺や先生には、彼女の抱える不幸が見えているんだから」

ふと立ち上がった龍は、圭太の傍らに腰を降ろした。僅かに首を傾げて、説得するように肩に手を置いてくる。

「圭太。俺たちは、お前に関係ないからとか、首をつっこまれるのは迷惑だからとか、そういう意味で話に入ってくるなど言っているわけじゃないんだ。人を癒す事は、簡単な事じゃない。時には嫌がる人間の不幸を暴かなきゃいけないこともある。俺たちは、それにお前を巻き込みたくないんだ。お前は自分だけで十分すぎるくらい不幸を背負っているから。それ以上、不幸を目の当たりのする必要はない」

視線がおちる。そうだ。圭太にとって他人は自分を傷つける存在で、そこに関わる事を最初に避けたのは、圭太自身だった。

今回の事だつて同じこと。

関われば、余計な傷を負う事になるのかもしれない。

だけど、

「でも、あの子は俺と同じものを背負ってる」

そう、咲の瞳が語っていた気がした。理不尽な言葉に傷付いて、心無い視線に胸を痛める。それは圭太がその心に抱える傷に、とてもよく似ていた。

「圭太」

「俺も、咲ちゃんくらいの頃にピアノをやめたんだ。周りの人間に

いろんなこと言われて、何もかもが嫌になつてた。だから咲ちゃんの気持ちも、なんとなくだけ分かるんだ。元気そうなのは龍くんたちの言うとおり、不幸喰いのせいなのかもしれない。咲ちゃん自身は、きつとめちゃくちゃ傷付いてる。だから……」

だから？

そこで圭太はハツとした。そうだ。咲は不幸喰いに不幸を喰われている。だから元気そうなのだ。毎日毎日不幸を積み重ねていつていた圭太と咲の違うところは、そこだけ。

下げていた顔を上げてまっすぐに龍を見た。圭太は、大事な事を見落としていた。咲は圭太に、とても重要な事を教えてくれていたのに。

「ま、い……、まい、ね？ そう、まいね！ まいねって子におまじないしてもらってるから、大丈夫なんだって咲ちゃんが言ってた。それってもしかして、不幸喰い……？」

龍と恭平も、とつさに顔を見合わせる。

「先生」

「そのまいねさんとは誰か、圭ちゃん聞いてる？」

「いとこって、言ってた気がする」

圭太がそう言えば、恭平は一度頷いた。その後に龍を見る。

「従姉と一緒に住んでいる事は、僕も雪華さんから聞いているよ。ただどんな人なのかまでは把握していない。龍くん、申し訳ないけれど、調べてみてくれるかい？」

「はい」

即答で龍が頷いた。仕事関係の事となると、二人の態度は一変する。

まいねとはどんな人間なのか、圭太には想像もつかないが、本当に咲の不幸を喰っているのなら、それはただただ恨めしいことだった。

二階建ての古びたアパートにはエレベータもなく、雨季は雨漏りも当然だった。部屋に入っても襖で仕切られた部屋が三つあるだけ。トイレと風呂はついているものの、蛇口を捻れば赤黒いお湯が出るのがほとんどだった。

ほんの三ヶ月前までは、もう少し広いマンションに住んでいた。一年前までは、一軒家に住んでいた。それでも少女は幸せだ。雪華と咲と一緒にいられるのが、少女——まいねの一番の幸せだった。お風呂から上がれば、キッチンのある部屋を横切って一つの襖を開ける。六畳の小さな空間が、咲とまいねの部屋だった。まいねの蒲団はお金に困った雪華に売られてしまい、今は咲と同じ蒲団で一緒に眠っている。

そこに、一足先に風呂を済ませた咲が横になっていた。

「咲、寝たの？」

「んん……」

眠ってはいなくとも、うとうとくらいはしていたのだろう。小さく首を振って咲が目を開いた。

「おふろ、上がった？」

「上がった。咲はすぐに眠くなっちゃうね」

「ちがうもん。だれもいないから休んでただけだもん」

「おばさんは？……仕事か」

誰もいないと言う咲に、つい雪華の部屋に視線を向けてからそう言った。この時間は、いつも雪華は仕事で家を空けている。

雪華の夫と、まいねの両親は一緒に亡くなった。それを知る人間は、雪華が巨万の富を手に入れたなどと思っている者もいるようだが、本当は彼らの保険金が、咲たちが高校までを卒業できるギリギリの額だった事を、まいねは既に知っている。

それは生活費の足しにすれば、案外簡単になくなってしまいう額だった。だから今、雪華は二人を養っていく為に必死で働いているのだ。

そうやって必死に自分たちのことを考えてくれる雪華が、まいねは大好きだった。両親がいなくても、二人がいてくれるのなら寂しくはない。

「咲、今日は病院行つてたの？」

「うん」

「どうだった？」

「あのね。けいた……っていうお兄ちゃんに会った」

「けいた？」

咲の言葉にまいねはきよんとした。普段病院に行くことを嫌そうにしていた咲が、初めて瞳を輝かせる。いつもは夜を憂鬱そうに過ごしているのに、今日はまったく違った。

「けいたお兄ちゃんは、すごくいい人なんだよ。咲は病気なんかじゃないって言ってくれたの。まいねちゃん以外では、お兄ちゃんが初めて」

晴れ晴れとした表情で、咲が笑う。それはまいねをも自然に笑顔にした。

「いい人に会えてよかったね。病院、少しは行くの嫌じゃなくなっただ？」

「……でも、咲にはまいねちゃんがいるから、やっぱり病院には行かなくてもいいと思うの」

「うん。でもおばさんが連れて行ってくれるんだから、まちがいじやないよ。おばさんがまちがったこと言っただ事ないもんね」

至って当然の事だとしても言うように、まいねはにつこりと笑った。咲が笑顔を返してはくれなかったが、それには気がつかなかったように言葉を続ける。

「じゃあ、今日はおまじないいらなかな」

「いや、して！ おまじない、して」

それまで元気だった咲が、打って変わったようにまいねの腕に縋ってきた。その様子にはさすがにまいねも驚いたようにまたたく。

「だって、咲今日元気そうだよ」

「でも……でもお願い。まいねちゃんのおまじないがあれば、咲は嫌な事全部忘れられるもん。先生とお話しても、けいたお兄ちゃんとお話してもダメなの。まいねちゃんのおまじないだけが、咲を助けてくれるんだもん」

まいねは目を細めた。ゆっくりと頷く。

たしかにこのおまじないは、咲にだけ利点があるわけではない。まいねにとっても、あるかないかならば“ある”方がいいものだ。

「……分かった。今日もおまじない、してあげるね」

敷かれた蒲団に膝立ちになったまいねは、そこに座っていた咲の、涙で潤んだ瞳を右手で覆う。

そつと左手を背中に運び、本能的に知っているつばを二、三度、側面での確に突いた。すると、咲のからだからフツと力が抜ける。薄く開かれた唇から、紫色の光がゆっくりと踊り出てきた。

それは外気に触れて本来の形を露にする。小さな花びらをたくさんつけた花の姿となれば、中心に向かって薄い紫のグラデーションに変わっていった。まいねのよく知る花で、シロツメクサにも似ているその花は、スカビオサと言う名前らしい。不幸を表す花だ。

咲から吐き出された不幸は、まいねが息を吸えば空気と一緒に口腔へと入ってくる。

こくん、と音を立てて飲み込む頃には、咲は完全に意識を失っていた。自分より体の重い咲を支えきる事が出来ず、まいねは一緒に蒲団へと倒れこむ。

それはいつもの事で、その後に咲の顔色を確認するのも、まいねのいつもの行動だった。

顔色はいい。規則的に寝息もたてている。

ホッと息をつけば、なんだかまいねもどつと疲れて、そのまま一緒に眠りに落ちた。

3 重なる影

初めて咲^{さき}と出会い、龍^{りゅう}や恭平^{きょうへい}と話をしてから、数日経っていた。圭太^{けいた}は彼らと、どこかぎこちない日々を送っている。

そんなある夜だった。夕食を終え、自室へと向かおうとしていた圭太が、龍に声をかけられたのは。

「何？」

どこか突き放したように声をかけるのはいつものことだ。だから龍自身も、あまり気にした節はなく言葉を続けてくる。

「明日、放課後何か予定あるか？」

わずかに顎を引いて、圭太は龍を見上げた。恭平が見ているニュースのキャスターの声だけが、一時キッチンの音を一人占めする。「何で」

そう返しながらも、圭太は思っていた。龍は、分かっているに聞いている。一緒に暮らすようになって一週間足らずだが、圭太が家で友人の話をしたことはない。

だから龍は、圭太の放課後がいつだって空白なのだと分かっている、そんなことを聞いているのだ。素直に認めるのはどうしてもしやくて、「何で」としか言葉を返せなかった。

「明日、咲ちゃんの学校へ行くんだ。放課後の様子を少し見ようと思つてな。お前も一緒に行かないか？」

その言葉は、本当に圭太にとつて「何で？」だった。先日は関わらせたくないなどと豪語していたくせに、何故。

それは訊ねる前に、確信として圭太の頭に浮かんできた。

咲が、圭太にだけまいねという女ことを語ったからだ。

咲がこの三人ならば一番圭太に心を開いていると、この二人は知っている。だから、圭太を同行させたがるのか。

……なにが、お前にこれ以上不幸を負って欲しくない、だ。いつしか圭太の視線は、自分の履く迷彩柄のズボンに移っていた。

自嘲する。バカバカしい。結局彼らは、自分のことに圭太を利用するのだ。

「圭太？」

龍が名前を呼ぶ。それを合図に、圭太は彼の顔を睨み見た。

「俺、行かないよ」

龍だけでなく、恭平も圭太をじつと見てくる。圭太も横目で、一度恭平の方を見た。そして再び、視線を龍に向ける。

咲が気になるのは本当だ。昔の自分を見ているようで、今の彼女は圭太には不快だ。でも、これから自分と同じ未来を歩んでいくのかも知れないと思ったたら、だったらどうか、その傷が治るうちに癒されて欲しいと思う。

こんな思いは、圭太だけでも抱えきれないのだから。

だけど、それを利用されるのはごめんだった。咲のために何かを行うのならともかく、龍や恭平のために動く気は、圭太にはさらさららないのだ。

圭太が拒否することにそんな理由があると思わなかった二人は、ただその答えに目を丸める。

「……どうしてだよ。お前、咲ちゃんのこと気にしてただろ」

「咲ちゃんのことは気になってた、けど、俺に何ができるんだよ？俺はカウンセラーじゃないし、何か余計な事を言われて、面倒になるのは龍くんたちでしょ」

そう言えば、ふ、と恭平が苦笑した。何がおかしいのかと、圭太の視線がそちらに向く。

「そんなことを気にしていたのかい？大丈夫だよ。咲さんは圭ちゃんに、僕にも龍くんにも話さなかったことを話したんだ。彼女は圭ちゃんに心を開いている。何も心配する事はないんだよ」

圭太の心配を取り払うつもりで、恭平はそう言った。晩酌に開けた残り少ないビールを、喉に流し込む。

そしてそれを聞いた圭太は、目を見開いてから俯いた。やっぱり――。と、握った拳が震える。ばれないように、それをサッと背中

に隠した。

「来るだろ、圭太？ 小学校は三時に終わるらしい。お前は？」

恭平の言葉に、圭太が納得したと思ったのだろうか。すでに決定事項のように、龍はそう問い掛けてきた。

「……行かない。絶対行かないから！」

どちらともなく二人を見て、圭太はそう言い切った。何かを返される前に、さっさとダイニングを出て行く。

部屋を出る間際に、二人のため息が聞こえてきた。それが一層、圭太の神経を逆撫でする。

嫌いだ。やっぱり他人なんて、大嫌いだ！

母親すら分かってくれなかった圭太の思いを分かってくれる人など、所詮はいないのだ。

翌日、圭太は駅前にいた。夏休みを目前に控えた学校は午前で放課となり、駅前には午後を思い思いに友人達と満喫しようとする学生で溢れていた。もちろん、圭太はここで友人と遊ぶわけではない。ただまっすぐに家へ帰って、また龍達に「ごちゃごちゃと言われるのが嫌だったのだ。昼食は、学生の少なそうなところを選ぶつもりだったが、果たしてどこなら学生が少ないのか分からず、結局バス停前のコンビニで買ったおにぎりを、バスの中で食した。

これからどうしようかと、圭太はぼんやり考える。こういうとき、自分は他の高校生とは違うのだなと実感した。友人と呼べる人間がないわけではない。学校での休み時間を共に過ごすものは多からずいる。だけど、彼らとの付き合いはその場凌ぎであるのも事実で当然だ。だって圭太ですら、自分をつまらない人間だな、と思うのだから。

だから、圭太を学校外での遊びに誘うのは、せいぜい香苗かなえくらいだった。彼女は幼なじみのよしみだと思っているのか、姉ぶりたい

のか、しょっちゅう圭太を誘ってくる。

しかしそれすらも断つてばかりの圭太には、こうして駅前に向いても、一体どこへ行けばいいのか全く分からなかった。学校にいれば、カラオケや映画という言葉も聞こえてくるが、カラオケへ一人で行くのも気まずいし、何より音で溢れる場所へ、圭太が自分から行けるわけがない。だったら映画かとも考えるが、一体現在どんな映画が上映されているのか、流行っているのかなど、情報に疎い圭太には全く分からない。

券売機の隣の、僅かな壁に背をついた。目の前を行き交う人は大概が制服を着ている。この時期はこの学校も午前放課で、みんな考える事は同じだということだろう。

溜息が出た。何でよりによって、自分はここを選んだのか。人で溢れる場所はさまざまな音が響いてくる。耳障りだ。携帯の音も、電車のアナウンスも、幸せそうな人々の笑い声も。

携帯電話で時間を確認する。一時十四分。今から帰宅しても、二時前に家へ着いてしまう。ここの騒音も嫌だが、家で龍や恭平の声を聞くのはもっと嫌で、圭太は再び、盛大に溜息をついた。

「あら？」

さすがにここにいるのも限度があるかな、と思ったときだった。少し低めの、女の声。圭太は俯いていたが、その響きは間違いなく自分に向けられていた。ふと顔を上げて相手を確認する。

だけどその女性をみて、圭太はすぐに眉を潜めた。光の加減によって青く見えるパンツスーツは、太陽の下では薄紫になるだろう。一筋の乱れもなく一つに纏められた髪は、うなじのところで丸く括られている。真っ赤な口紅が、軽い釣り目の彼女の印象を、よりきつくしていた。

どこかで会った。真っ先にそう思ったのに、それがどこだったのか思い出せない。まだその年はとっていない女性。見た目だけなら、圭太が最後に見た律子^{りっこ}とそう変わらないはずだ。

「久しぶりね。おぼえてる？」

「あの……」

誰ですか、と尋ねるまでもなかった。訝る圭太を察したらしく、彼との距離が一メートル足らずになる距離まで近付いた女性が、にこりと笑う。

「咲と仲良くしてくれたのよね」

「……咲ちゃんの、お母さん？」

「こしはゆきか小柴雪華です」

そうだ、と圭太の記憶が蘇ってきた。あの日、初めて咲が問診に来た日、圭太は病院の駐車場で彼女に会ったのだ。あの時も、今日と同じような感想を雪華に抱いた事を、圭太は漸く思い出した。

「このあたりで働いてらっしゃるんですか？」

「いいえ。今日は休みの。久しぶりの休みだったから、大学時代の友達と連絡とって、ちょっとはしゃいじゃった」

「へえ……」

まるで少女のように雪華は笑う。それをつい、圭太は冷めた視線で見ってしまった。

圭太には咲の不幸は見えない。だけど——自分が人一倍の不幸を背負っているからか——彼女が人より幸せを感じていないのは分かった。雪華は咲の母親だ。それに、恭平の元に連れてきたのなら、彼女は娘の心に、闇という名の病気があることを気付いている事になる。

だったらどうして、休みの日にのんきに友達と遊んでいられるのだろうと、圭太には甚だ不思議だった。龍や恭平は、咲のために尽力しようとしている。この人だって、咲のために学校に掛け合ったり、恭平と話をしたり、できることはたくさんあるはずだ。

「圭太くん？」

声をかけられて、圭太はハツとした。「あ」とか「お」とか、言葉にならない声が苦し紛れに出てくる。

「どうしたの？ わたし、何かおかしいかしら？」

「——っ、全然！」

……何を力いっぱい言っているんだ。俺は。

雪華が眉尻を下げて笑うから、余計に気まずくて、圭太は顔を逸らして唇を飲んだ。

「誰かと待ち合わせ？」

「え？ あ……いや。ちょっとブラブラしてただけです。……小柴さんは」

「雪華でいいわ」

「……雪華……さんは、これから帰るんですか？」

「ええ。みんなはもう少し遊ぶって言っていたけど、三時を過ぎれば咲たちが帰ってくるから。それまでには家に帰っていたくて、先に抜けてきちゃった。夜にも仕事をしているから、一緒にいられる時間は少ないんだけどね」

そう言って苦笑する雪華を見て、圭太は先ほどの自分の考えを反省した。そうだな。この人だって、息抜きくらいしたくなるよな。友達と遊んでいたって、ちゃんと娘の事は心配しているんだ。母親……だもんな。

不意に圭太の頭に浮かんだのは律子だった。彼女も彼女なりに圭太を気にかけてくれていた——のだと思う。しかしそれは圭太にとってお節介でしかなく、ただ疎ましく思っているうちに、律子はこの世を去ってしまった。

早すぎだよ。と今なら思う。きっと生きていたら、未だに疎ましかっただろうし、思い出してもその感想は変わらないが、それでも生きていてくれれば。

「ねえ、……圭太くん？」

「はい」

つい考え事をしてしまう圭太の思考は、雪華の声に遮られる。交わった視線で、雪華の瞳は仄かに色気を含んでいた。

「何……ですか？」

「予定がないなら、少し話さない？ わたしもこのまままっすぐ帰っても、まだ子供が帰ってくるまでしばらくあるし」

どうしようかと迷ったが、龍は咲を迎えに行くと言っていた。そして雪華が、咲の帰ってくるまでの時間を潰したいと言っのなら、それは圭太にとって好都合だと思った。彼女といれば、圭太が帰宅するのも三時近くになる。龍はその前に家を出ているはずだ。

そう思つて了承したのに、雪華に連れられた店の入り口で、圭太は激しく後悔した。ここは、高校生の来るべき場所ではない。

駐車場から外観を見上げただけで、明らかに《高い》と確信できた。金額だけではない。“なにもかもが”、だ。まるで協会のような建物の壁はガラス張りで、中は大人の雰囲気と言うにふさわしいくらいにトーンを落とした証明が取り付けられているようだった。そこから見える客人も、大人の、それもきちんとした社会人のカッブルばかりだ。

「緊張する？」

「あ……、あの、別の店にしませんか？」

「それは構わないけれど、安い店だと学生も多いわよ？　こんなおばさんと入店するところ、お友達にでも見られたりしたら嫌じゃない？」

生憎見られて困る《おともだち》はいなかったが、クラスメイトに見られれば、確実に明日、何かを追及されるだろう。圭太くらいの年頃の少年は、自分の欲求に従順だ。

渋りながらも頷いて、圭太は雪華のあとに続いて店内に入った。

「お二人様ですか？」と問う店員すら、異色な二人組みに目を細めている。二十一歳で圭太を生んだ律子も若かったが、雪華はさすがに、高校生の息子がいると言つて納得させるには辛い。

案内されたのは、入り口に近い壁側の席だった。丁度圭太が座つた場所からショーケースが見え、焼きたてのケーキが所狭しと並んでいる。

「圭太くん、何飲む？」

ケーキに視線が集中していたため、反応が遅れる。咄嗟のことに

脳が働かないでいると、雪華がサツとメニューを差し出してくれた。

「あ、じゃあ……カプチーノ」

「ケーキはいいの？」

「え」

「ケース、気にしていたでしょう」

顎でショーケースを指して、からかうように雪華が言う。やっぱり誰だろうと女は目敏いな、と圭太の視線は机に向かってしまった。それによって目に入ったメニュー表に愕然としてしまう。ここは喫茶店だから、飲み物がメインとなってしまうのはわかるが、それでも表記された金額は、圭太の知っているコーヒーやケーキの値段の三倍以上だ。

「い、いいです。飲み物だけで」

「遠慮しなくていいのよ？　ここはわたしが出すから」

「そんなっ。もつといいです！　父さんの患者さんのお母さんに奢ってもらうなんて」

「そんな、難しく考えないでよ。わたしは大人であなただは子供。ここに誘ったのもわたし。それじゃダメかしら？」

「いや……」

ここで甘えてしまつてはダメだと思い、何かいい言い訳はないかと考えているうちに、雪華が片手を上げて店員を呼ぶ。圭太に有無を言わせずに、コーヒーとカプチーノを注文した。

「圭太くん、何にするの？」

「え？」

やはり頼ませる気なのか。それに、この状況は卑怯だ。圭太が頼むまで、おそらく雪華は店員を帰さないだろう。ここに店員を留めるのは、あまりに失礼と言うものだ。

「じゃあ、チーズケーキ……」

「かしこまりました」と言い残して、店員は去っていった。圭太はつい目の前の女性を、目を細めて見てしまう。

「そんな顔しないでよ」

「俺、お金出します」

雪華は苦笑した。

「圭太くんは律儀ね。いいわ。じゃあここは奢るかわりに条件を出させて」

答えによつては再び断ろうと思いつつ、圭太は黙っていた。言つてしまったものの、やはりケーキの代金を負担するのは懷に痛い。

「……咲が、あなたのことをとても楽しそうに話すの。とても気に入ったみたい。これから診療のときとかに、咲と仲良くしてくれないかしら？」

フツと、肩の力が抜けた気がした。背もたれに背中を着いて、漸く自分の体が強張っていたのだと気付く。それと同時に、頼られた事への嬉しさが、ドツと胸にこみ上げた。

「俺でいいなら」

少年は、無意識にふわりと笑う。それを見た雪華が目を見開き、途端に顔を下げてしまった。

「雪華さん？」

いきなり俯いた彼女の顔は見えない。だけど肩が小刻みに震えているから、圭太は焦ってしまう。

自分はなにか、いけないことを言ってしまったのか？ 咲と仲良くして欲しいと請われて、分かったと答えただけだ。それとも雪華は、何か他の答えが欲しかったのか。

圭太がおろおろとしている間に、店員が飲み物とケーキを運んできた。客の私情に口を挟んでは来ないが、気まずそうに圭太の顔を見てから、そそくさと去っていく。圭太が泣かせたと思われただろう。いや、実際原因は圭太なのかもしれないが。

せっかくコーヒーとカプチーノの香りが空気を彩るのに、圭太はまったくそちらに集中できない。こういう時どう声をかけたらいいのか、女性経験など皆無に等しい圭太には分からない。

雪華は両手で顔を隠して、ただしくしくと泣いていた。大人の女らしく嗚咽は上げないが、時折鼻を吸る音が聞こえる。

「あ、あの……」

漸く言葉を紡げても、圭太にはそんなことしかいえなかった。なんなんだ。わけが分からない。何も悪い事なんて言ったつもりはないのに、どうして泣かれなくてはならないのだ。と、理不尽な状況にイライラもしてきた。

雪華を置いて帰れるわけがなかったが、いつそそうしてやるうかとも思い始めたとき、やっと彼女が顔を上げてくれる。

「ごめ……ごめんなさい。驚いたわよね」

「……大丈夫、ですか？」

いつそ帰っていいからと言ってくれ。内心そう思いながら、圭太は訊ねた。

「うん、平気よ。ごめんなさい」

謝られる事は、正直解決にはならない。圭太が知りたいのは、どうして泣いたのか。自分のせいなのか。自分のせいならば、圭太こそ彼女に謝らなければいけない。

「俺、何か言いました？」

「違うの。あなたのせいじゃないわ。ほら、ケーキ、食べて」

そう言われて、圭太の視線はケーキを見た。

一見はよく見るチーズケーキだ。黄色いスポンジに、天辺には生クリームが渦巻かれている。しかしそこから無造作に垂らされているブルーベリーソースに、圭太は思わず唾を飲んだ。さすが、一般的なチーズケーキの三倍の値段を取るだけはある。きつと、味も三倍……いや、それ以上だろう。

だがここで、「じゃあ、ケーキいただきます」とどうして言えようか。目の前の女性が憂鬱そうに俯いているのに、そんな無神経な事、いくら圭太でも行えない。

「俺が悪いのなら、謝らせてください」

「もう、本当律儀ね。違うって言っているのに」

「でも、俺と話していて泣いたんだし……」

「そうね」

瞬いたあとの瞳を悲しく揺らして、雪華は呟いた。同時に、無造作に置かれていた圭太の手に自分の手を重ねる。

「……え？」

なんて、まぬけな声しか圭太には出せなかった。な、なんで、手……握んの？

ごくりと唾を飲んだ。圭太が異性と手を繋いだのは、小学校低学年以来だ。なれない行為に、ドキリと心臓が跳ねてしまう。

相手は、父の患者の母親。おそらく圭太と十以上は年も離れている。でも雪華は、確かに美人だ。……って、何考えてる俺！

「あの、雪華さん……？」

「あなたのせいだと言うなら、そうかもしれない。しっかりした手、してるのね」

そう言われて、圭太は余計に意識を手に集中させる。言われた通り、雪華の手は、圭太には小さかった。今は一方的に握られているだけだが、もしもこの手を握り返したら、きっとすっぽり包み込めてしまうのだろう。

「わたしの話を、聞いてくれる？」

「いや、あの……」

見つめられた瞳の艶つぽさに、圭太はたじろいだ。逸らしたいのに、どうしてか目を逸らせない。

そうしている間に、雪華の顔は圭太へと近付いてくる。

「圭太くん」

「——っ、無理ですっ！」

「——え？」

ふと、雪華の手が離された。すると枷が外れたように、圭太の肩から力が抜ける。息が上がった。

「あの、泣かせたのが俺なら、謝ります。でも俺、カウンセラーじゃないし……あなたの相談になんてのれません。家に行けば父さんがいるから、相談ならそっちに……」

雪華に握られていた感触が、まだ手に残っている。それは気持ち

悪いわけではないが、何かモヤモヤとした感じを残して、それを早く消したい圭太は、ぎゅっと掌を握った。

本当は、「無理」というのは「相談にのれない」ということではなかった。女性に免疫がないのももちろんだが、あれ以上近くにこられていたら、何か人として間違ったことを犯してしまいそうだった。

もしも雪華が、圭太を恭平の息子や、咲の友達として扱ってくれたなら、きっとこんな気は起きなかっただろう。つまりこれは、雪華が圭太の前で「女」であつたことを示している。

そんなの有り得ない。絶対に無理だ。

深呼吸をして心を落ち着かせると、圭太はゆっくりと雪華を見た。彼女も気を入れなおすようにコーヒーを飲んでいる。それでカプチーノの存在を思い出し、慌てて真似てみた。

「……圭太くん。わたしが悩んでいる事は、咲のことだけじゃないの」

カチャ、とカップを置く音がする。冷め始めたカプチーノの湯気の間から、圭太は雪華をちらりと見た。

「あなたのこと」

「……俺、ですか」

正直、圭太は嫌気がさしていた。思えば、初めから雪華は圭太に対して女の視線だった。彼女に誘われたあの時、どうして断つておかなかったのか。

その理由は簡単だ。一児の母である雪華が、まさか高校生の自分などに、本気で何かを仕掛けてくるはずがない、と思ったからだ。なのに、目の前の女性が圭太に何を望んでいるのか、それが分かっってしまうから圭太は嫌気がさしていた。

「ごめんね。わたしのこと、嫌よね」

そんな感情を敏感に感じ取ったらしい雪華が、整えられた髪を撫でながら視線を下げる。

圭太が何も答えなければ、雪華は言葉を続けた。

「でも、違ふのよ。あなたに何かして欲しいとか、そう言うわけじゃないの。ただ、少し聞いて欲しい。笑って欲しいの。あなたは、わたしが亡くした夫によく似ているから」

瞬間、圭太の呼吸が止まった。きゅつと、唇をかむ。

「彼は、交通事故で亡くなったの。咲と主人とわたし。別に特別裕福でも、何か突飛なものがあったわけでもないわ。でも、幸せだった」

「……俺が、あなたの夫に似ているなら、どうだっていうんですか」「どうでもないわ。ただ、わたしが少し幸せな気分になるだけ。――あなたは不服？」

「少し」

誰かと比べられるのは、誰しも不服だ。そう思ったのか、雪華は困ったように少しだけ笑った。

きつと、律子もそうだったのだろう。恭平が亡き夫に似ていたのかは知れないが、彼といることが幸せだったのだ。そして恭平は圭太と違って、律子のその気持ちに応えた。

そこに、圭太の存在などなかったのだ。

二人が恋に落ち、結婚する事に、圭太は関係なかった。家族なのに、家族になるのに。

まるで仲間はずれにでもされているみたいで、圭太はどうしても恭平を好きになれなかった。律子を憎らしく思った。

だから咲のことを思えば、圭太は何を言われても、雪華の願いを聞くことはできない。そう思うのに、やっぱりここでも律子の影がちらつく。

恭平と再婚なんて、本当はしてほしくなかった。だけど、恭平といるときの律子が幸せそうで、どこか「よかった」とも思っていた。あんなに憎らしく思っていた母親なのに、圭太はやはり、心のどこかで彼女を好いていた。幸せを願っていた。きつとこれが、腹を痛めて自分を生んでくれた律子への情だ。

自分の傷と、母親の幸せ。当時の圭太にはどちらも優劣つけられ

ないものだった。だから今も、彼には優劣がつけられない。

雪華の幸せと咲の傷、どちらを取るか。

「ねえ、圭太くん」

唐突に、雪華が艶っぽく圭太の名を呼んでくる。

「何ですか？」

「明後日、わたしの家に来ない？」

「は——？」

「やだ、変な風に考えないでよ？ 明日は診療だから無理だけど、明後日は何の用事もないわ。暇なら是非、咲と遊んであげて欲しいの。きつと喜ぶわ」

咲と会う事は、圭太は全く構わない。しかしそれを頼むには、雪華の声は色味を帯びている。本当にただ、自分と咲が遊ぶ事を望んでいるのか、圭太には分りかねた。

「やつぱり嫌かしら？」

「いや……」

「明日から咲も半ドンだし、わたしは仕事でどうしても遅くなってしまうから、せめて午後だけでも、一緒にいてあげて欲しいの。お願い」

苦そうに笑う雪華に、圭太は瞬いた。今の言葉を要約すれば、その日雪華は仕事で家にはいない、ということだろうか。それを悟った圭太は何となくホッとして、小さくだが頷いた。

「分かりました。じゃあ俺、咲ちゃんち行きます」

コーヒークップの取っ手に向かっていた雪華の手がふと止まり、圭太を見上げる。同意されると思っていたいなかったらしく、その目が安心したように細められた。真っ赤な唇がゆっくりと開く。

「ありがとう。咲、喜ぶわ」

その表情に、ドキリとした。パツと顔をそむけて繕うように苦笑する。

そんな圭太に気付かなかったのか、雪華もふふ、と笑った。

「さ、ケーキ食べて。ここのケーキはおいしいと評判よ」

そう言われて、漸く圭太は安心してケーキに手を伸ばした。一口食べたそれは確かにおいしかったが、圭太の気持ちのせいかな、普通の三倍以上の味を感じる事はなかった。

「圭太？」

この声を聞いた時、圭太はこれまでの自分の苦労がすべて徒労であることを悟った。

駅に戻った圭太は、雪華と共に電車に乗り、最寄りの小さな無人駅へと降り立った。そこで雪華の車に乗るかとも誘われたが、せっかくのいい天気だから歩きたい、と断ったのだ。本音を言えば、ただこれ以上彼女と話しているのが嫌だった。色んな意味で。

あとは家へと向かい歩き出した圭太だったが、大通りに出る少し手前で、聞き慣れた声に呼び止められた。それから気がつく。そう言えばここは、雪華に教えられた住所と、近くの公立小学校を繋ぐ道だ。最後の最後に気を抜いてしまった。

ゆっくりと振り返った圭太は、予想通りそこに立っている龍に溜息をつく。

それに機嫌を悪くした節はなかったが、龍は不思議そうに首をかしげていた。

「けいたお兄ちゃんっ」

と、明るく掛かった声に、圭太は龍の傍らに立っている咲を見た。無邪気に浮かべられる笑顔が、どうしてか圭太の心を痛めた。

「久しぶり、咲ちゃん……。元気？」

「……元気っ。久しぶりー」

やっぱり、元気じゃないな、と思った。今も一瞬、圭太に元気だと告げていいか迷ったようだ。というか、精神病患者に「元気か」と聞く事自体、タブーだったろう。あとで龍に怒られるかもしれない。もちろん、そんな差別はしたくないと反論するが。

不意に、咲とは反対側に居る少女が目についた。真っ黒な長い髪を二つのお下げにし、真ん丸な目は人形のようにくりくりとしている、かわいらしい少女だ。

圭太と目が合うと、少女は礼儀正しくお辞儀した。

「あやさき絢崎まいねです。はじめまして、けいたお兄ちゃん」

「あ、初めまして。しのづか篠塚圭太です」

反射的に圭太も頭を下げたが、まだランドセルを背負った少女に先手を打たれているこの光景は、傍から見たらさぞ滑稽だろう。

それに、まいねという名前は、圭太も忘れる事のできないものだった。

——まいねちゃんにおまじないしてもらってから、大丈夫なんだよ。
——僕らが思っているより、不幸喰いは近くににいるのかもしれない。
い。

不幸……喰い。

この少女が、咲の不幸を喰らって、より深い不幸を与えている？
正直、圭太はまいねをもっと年上にイメージしていた。不幸喰い——しかも不当に不幸を喰らっている——というのなら、もっと知識の豊富な年齢であると憶測していたのだ。

だって、この少女が不幸喰いなんて、まさか信じられない。

「圭太、これから家に帰るのか？」

「え？ うん」

「じゃあお兄ちゃん、一緒に行こう」

その言葉を頭で理解する前に、咲は圭太の手をしっかりと握っていた。小さな、小さな手。雪華よりも幼くて弱い、少女の手。

もし今、先ほどの選択肢が目の前にあったなら、圭太は迷わず咲を守るだろうと思うくらい、少女の手は小さく、柔らかく、温かかった。

「咲は、けいたお兄ちゃんが大好きなんだよ」

唐突にまいねが話し掛けてくる。二人の少女は圭太を囲み、龍は後ろからついてくる形になっていた。

「そう……なの？」

「うんっ。咲、お兄ちゃん大好きだよ。お兄ちゃんは、咲のこと分かってくれるもんっ」

思わず、圭太は咲の手を握る力を強めた。嬉しげに笑う少女。だけれどその手に、足に、無数の傷がある。それは決して、古いものはなかった。

今も、本当は泣き出したいほど辛いに決まっている。不幸を喰われているのなら、いつだって咲は、初めていじめを受けた日と同じ恐怖を味わっているのだ。

それでもこうして少女を気丈に振舞わせるものは何なのか。圭太にはまったく予想がつかなかった。もちろん自分ではない。咲が言うほど、圭太は咲の気持ちを分かっているのだから。

圭太は苦笑した。分かっているなら、雪華と咲を量りにかけて、迷ったりはしない。結局自分は、不幸ぶっているだけで、不幸ではないのだ。

ピアノを見て吐き気を起こすのも、所詮は心が弱いからだ。この少女のように、物質的な傷があるわけではないのに。

「そんなこと……ないよ」

咲とまいねが、きょとんと圭太を見上げていた。ただ自嘲するような笑みだけを、少年は浮かべ続ける。

龍が後ろからじっと見つめている事も、今の圭太には気付けなかった。

咲とまいねを自宅に送り届け、雪華と顔を合わせる前に、圭太は小柴家に背を向けた。三人はそれを不思議そうに見ていたが、後を繕うように龍が、「じゃあ、お母さんによろしくね」と残して圭太を追ってきたので、少女達は深く気に止めてはいないだろう。

あとは足早に帰宅した。玄関を抜ければ、そのまま正面に見える階段を上ろうとする。そこで、龍に声をかけられた。

「何？」

「何かあったか？」

いきなり核心をつかれれば、圭太は瞬く事しかできなかった。何か――、何かなら、たくさんあった。だけど、何を話せばいいのか、何を話さなくちゃならないのか、何を話す必要があるのか、圭太には分らない。

「何もないよ」

だからそう答えることしかできなかった。

すると、そちら向いていた顔を戻す暇も与えずに、龍は続けて口を開く。

「だったら、あの態度はなんなんだ」

「え？」

玄関を上がった龍は、階段を横切ってリビングへの道を進む。ほんの一瞬合った視線が、ついて来いといっていた。逆らう事も忘れて、圭太は龍に続いてダイニングに入り、そこからリビングへと進む。

「咲ちゃんたちに、どうしてあんな不安定な笑顔を向けるんだ。どうして曖昧な返事をするんだ。あのこが常に不安を抱えている事を、お前は分かっているんだろう？ お前は彼女に頼られているんだから、何も言わずにあんな不安定なことをしてやるな」

叱られているのだと、すぐに分かった。もしかしたらと覚悟もしていたが、この言い方は理不尽ではないか。

圭太は、カウンセラーではない。

龍が曲を描いた四人掛けのソファに座ったのを見ると、圭太はダイニングとリビングを繋ぐ壁に手をついて、言った。

「そんなことに気を使えないよ。俺はカウンセラーじゃない」

「だけど、咲ちゃんのことに関わろうとしただろう。関わりたいなら、責任もちゃんと持て」

「……だからって、わざとらしくヘラヘラ笑えないよ。俺にだっていろいろあるんだ」

「だからそのいろいろを訊いたんじゃないか。さっき」

尤もな意見ばかりを返されて、圭太は言葉を無くした。一番無責

任なのは自分だ。えらそうに父親に言った先日の言葉を思い出し、圭太は激しく嫌悪した。

——咲ちゃんは、父さんの戸惑いを敏感に感じ取ってる。あんな小さい子に、怪訝な顔しちゃうダメだよ。

よく言う。それを自分が行って、しかも言い訳までしようとしていたのだ。情けない。かつこ悪すぎる。

自嘲を浮かべれば、圭太は視線を龍に移した。彼は眉一つ動かさずに、まっすぐ圭太をみている。

「話せよ。聞いてやるから」

きゅうつと、胸が締め付けられるような心地がして、圭太は慌てて目を逸らした。壁についていた手に力がこもる。

話せば、楽になれるだろうか。雪華に言われた事、された事。それについて、圭太が思ったこと。

言葉にできないわけではなかった。別に混乱しているわけでもなく、言うべきことは分かる。だけど言葉になつてくれない。息が喉につまんで、圭太は苦しさに唇を噛み締めた。

「圭太」

穏やかな声音が自分を呼ぶ。でも、どうしていいかわからない。雪華とのことが、なんだか激しくいけなかったことだったような気がして、隠せるならどこまでも隠しとおしたいと思った。

「……何も、ない。話すようなことなんか。勉強するから、もう行くね」

龍の目は一切見ないで、圭太は踵を返した。あの瞳はダメだ。射られてしまう。

どうしてこうまで、龍に心乱されるのか、それは圭太自身にも分からなかった。律子への情はかけがえのないものだし、恭平にも、四年以上生活を共にした分の情がある。しかし龍は、まだ出会って幾日も経ってはいないのに。

はじめ、圭太は龍が、自分のことを分かってくれているのだと思った。しかしそれは、ただ圭太の不幸が見えていただけだ。あのあ

と無理やり香苗のコンサートに連れて行った彼を、初めほど純粹に信頼はできていない。

それなのに、背後で溜息をつかれただけで、圭太の足はピタリと止まってしまう。

幻滅されたか——と拳を握った圭太に向かって、龍の声が響いた。

「どうしてお前はそうなんだ」

「そう……って、何？」

「なんで、何も話そうとしないんだよ。なんで隠すんだ。そうやって溜め込んで、発散もしないから、不幸が^{ストレス}どんどん蓄積していくんだ。そんなに自分を知られるのが怖いのか？」

意味もなく、圭太の右手が左腕をさする。何でかなんて、圭太にも分からない。——いや、違う。彼の言葉は当たっていた。

圭太は怖いのだ。自分を知られる事がでなく、誰にも分かってもらえないのが。

傷付いた自分の心を曝して、否定されるのが怖いのだ。だって、圭太の言葉がすべて正論なわけではない。だけど間違ったことを違うといわれるのは、怖い。自分を否定されたようで、怖いのだ。

「昔からそうだよな、お前は。隠すか、裏腹な事を言うか。そうしてしか自分の心を守れないのは分かるけど、それは余計にお前を傷つけている事も、本当は分かっているんだろ？」

そう言われて、圭太はゆっくりと振り返った。そうだ。圭太はそうやって自分を守ってきた。もつと巧い方法があることも、恭平に任せれば間違いないことも分かっているのに、それしかできなかった。だって圭太にとって、恭平は律子の味方で、律子は圭太からピアノを奪った。直接でなくても、律子のせいではないと言い切れない。そんな恭平のカウンセリングを、圭太は信用しきれなかったのだ。

例え何人の患者の回復を見てきても。

しかし、今一番圭太の心に引っかかったのは、そのことではなかった。

「昔つて、俺たち、どつかで会ったことあるの？ 初めて家に来た時も、龍くんそう言ったよね。でかくなっただな、って。龍くんは、昔の俺を知ってるの？」

あの時のように、龍はごまかす言葉を述べようとはしなかった。ただゆっくり腰を上げ、今まで座っていた四人掛けのソファの前にある、一人掛けのソファを横切る。そしてその背もたれに腰掛けるように体を落ち着かせた。

「会ったこと、あるよ。随分前」

体ごと龍に向ければ、圭太は彼をまっすぐに見た。いつ、どこで自分は彼に会ったのか。そのときどんな話をしたのか。圭太の記憶にいない龍が、どうして自分をその記憶に鮮明に残しているのか。知りたい事は山ほどあつて、それを言葉にすることも思いつかず、ただ龍を見る。圭太の感情は、その瞳がすべて語っていた。

小さく息をついて、龍は視線を逸らした。その先に、脳裏を過ぎる思い出を見るかのように、すっと目を細める。

話が長くなるのかは分からなかったが、圭太は一番近い椅子に腰掛けた。

「俺が、十八の時だ。俺は大学受験を控えていて。……俺の親は、まあ、スパルタつつつの？ とにかく俺にはいい小学校、中学校、高校を受験させてきた親だった。でもさ、さすがに大学までとなると、俺も疲れてきてて、ストレスばかりが溜まっていったんだ。元々勉強なんか好きじゃない仇がきたんだな。壊れるのは、案外あっさりだったよ」

当時の龍は、身のこなしも生きる場所も、今とは全く違っていた。彼の役目は親の期待に応えて、いい学校、いい会社へと上り詰めていく事。本人も、それを疑った事はなかった。

しかし人より遅く芽生えた自我は、親の期待に反していた。龍自

身の心は、決して自分の将来に期待をしてはいなかった。

ただ自分が一番にやりたい事を見つけて、それに対して一生懸命になりたい。

まだ今の圭太より幼かった少年が思ったのは、たったそれだけのことだった。

しかし幼かった少年に、両親に逆らう術はなく、いくつ年を重ねても、ただ親の操り人形のように生きることしかできなかった。

そしてはじめての反抗は、高校三年生のときに起きた。イライラが収まらず、親の顔を見るのがとにかく嫌で、部屋に引きこもった。「どうしたの!?」と声を荒げる母親の声が聞きたくなくて、ベッドと同じくらいの大きさの本棚に、びっしりと詰まった参考書を破り捨てた。

何度母に咎められても、父に殴られても、壊れた少年の心は、一切の声を聞きうけはしなかったのだ。

そんな両親のとった最後の手段が、カウンセリングだった。初めは嫌がる龍を無理やりに、恭平の元を訪れたのだ。

正直、龍もはじめは、恭平に一切心を開かなかった。見ず知らずの人間に、自分の心を明かすのは嫌だった。それでも、さすがはカウンセラーだ。何をどうされたのか、明確なことがあるわけではなく、ただ段々と、恭平は龍の心を癒していつてくれた。

そんな龍が圭太と出会ったのは、もう数回で診療も終わるといいうある日。

その日龍は、恭平が母と話をしたと言ったのを受けて、一人受付で終わるのを待っていた。しかし、思いのほか話は長く、五分、十分と経っても母は出てこない。さすがに嫌気がさした龍は、病院を抜け出した。

この病院は、院長である恭平の家と繋がっているらしく、隣には立派な一軒家が建っていた。

どこからか、ピアノの音が漏れてくる。音楽に興味のない龍には、

生憎何の曲かは分からなかったが、上手だとは思った。もつとも、素人の龍に言わせれば、よっぽど下手でない限り、ピアノが弾ける人はみんな巧いのだが。

きつと、音楽の好きな人間ならばこのままこの音に聴き入ったのだろう。しかし龍がそれ以上その演奏に心惹かれる事はなく、すぐに体を横に向けた。

病院と家があるが、この敷地はそう広いわけではない。ぐるりと一周しても、そんなに時間は経たないだろう。そういえば、病院の裏に花壇があるからあまりに暇なら行ってくればいいと、いつか看護婦に声を掛けられた。

ピアノと同じく花にも興味はないが、耳で感じるものよりも、目で見るものの方がいくらか楽しいかと思えば、龍は裏庭へと向かった。

病院を横切ると、案外そこは早く着いた。思ったより花壇は大きく、裏庭にしておくにはもったいないほどに輝いている。

咲き乱れた花は様々な色で、でもしつこくないのは、植えた人間のセンスがいいからだ。たいした期待はしていなかったが、思いのほか、龍はここへ来て良かったと思った。

花に見入っていた龍の耳に、不意に足音が聞こえた。

音のする方に顔を向けると、自分よりも随分幼い少年が駆けてくる。

少年の遊び相手は小さな石だった。それを蹴って、転がして、追いかけて、また蹴る。不意に石が花壇に道を阻まれると、少年は嫌そうな顔をしながらも、すぐに他の石を蹴り始めた。しかし今度、それを阻んだのは龍の足だ。

少年は顔を上げて、見知らぬ少年——彼から見れば青年に値する——に首を傾げた。

「お前、誰？」

龍は先に口を開いてそう訊ねた。少年は答えない。

「ここで何してんの？」

質問を変える。まだ答えない。

「…………お前も患者？」

「違う」

そこで、漸く少年は声を発した。内心で、やっと喋った、と思いつつ、龍は言った。

「じゃあ何？」

「ここは、おれの家^{うち}」

「ああ、息子？」

少年は頷いた。

龍は納得しつつも、僅かに疑問も感じる。恭平の若さで、この年齢の息子というのは不似合いだ。

「俺は、患者」

ゆっくりと言葉を紡ぐ。診療を始めたばかりの彼ならば、おそらく言えなかった台詞だ。

少年はもう一度頷く。

「今まで先生と話してたんだけどさ、母さんに順番が回ったから、ちょっと出てきちゃったんだ」

少年は表情を変えずに瞬いた。そのとき彼が何を思っていたのか、龍には分らない。

ただ、どこか悲しげな子供だとは、会った時から思っていた。少しでもきつい言葉をかけたら、二度と立ち上がれなくなりそうだ。

「お前、今暇なの？」

「…………うん」

少し考えるように視線を下げながらも、少年が頷いたので、龍も同じように頷いた。だけどこのとき、どうしてこの少年と関わろうと思ってしまったのか、龍はこの先数年経っても、答えを見つけないことはできなかった。

「じゃあさ、ちょっと俺の暇つぶしに付き合ってくんない？」

そう提案した龍を、少年は再び見上げながらも、断りはしなかった。真っ先に少年が花壇の縁に座り、龍に隣を勧める。促されるま

まに腰掛けた。

「いい天気だな」

膝の間で手を組んだ龍は、丸めた背中から首だけを伸ばして空を仰いだ。少年が真似をしたのが、視界の端に映る。

「……俺さあ、物心ついたときからずっと、勉強ばっかしてきた。小さい時はそれが当たり前で、親の期待に応えるのが当たり前で、それを苦痛だとは思わなかったのに、さ」

ポツリ、と自分のことを語り始めた。別に聞いて欲しかったわけでない。ただ沈黙を破るのと、眩しいくらいの青空に、少し自分のことでも話してみようと思ったただけだ。

正直、この見知らぬ少年に話したところで、きっとすぐに忘れてしまう話だろうと思ったこともあった。

「いつからだろう。苦痛に思い始めたのは。何時に起きなさい、何時に寝なさい。この問題が解けないとご飯は食べさせない。トイレはこの時間に行きなさい。……窮屈だったんだと思う。嫌いな勉強を強要されるのも、自由な時間を一切奪われるのも」

恭平にすら言っていない事を、龍は戸惑うことなく口にしていた。それは少年に話しているというよりは、独り言に近かったような気がする。龍の視界には、真っ青な空しか映っていなかったから。

「壊れたんだな……俺の心は」

誰にも言えず、誰も口にしなかったことを吐き捨てれば、龍の心は不思議と晴れた。恭平のカウンセリングも少なからず影響しているはずだが。

ふと少年を見た。名前も知らない少年は、驚く事に龍の話をまじめに聞いていたようだった。

その事実には、龍はなんだか無性に恥ずかしくなって、一度視線を逸らす。

ゴホンッ、とわざとらしいくらいの咳払いをしてから再び少年に目をやった。

「……ま、先生のおかげで、もう全然元気なだけだよ」

「おれは……」

取り繕うような龍の声を聞いたのか聞かなかったのか、少年が口を開いた。大人しいと思っていた少年が自分のことを話そうとしている光景は、龍に不思議な気分を感じさせる。

「ピアノ……やめて。今、いつもならレッスンの時間なんだけど、だから暇で。ここで遊んでたんだ」

ピアノ……。そう聞いて真っ先に浮かんだのは、病院を出た際に聞こえたあの音色だ。しかし弾いていたのは、この少年ではないだろう。

「……へえ。どのくらいやっていたんだ？」

「母さんがピアニストでね。おれもちっちゃい頃からやってから、十年位かな」

「そうか」

多分、この少年はピアノが好きだったのだ。どういう理由でやめたのか龍には分かりかねるが、今まで目の前にあった好きなものなくなり、心にポツカリ穴が開いてしまったのだろう。だから龍にそんな話を始めたのだ。

勉強を強要されて心を壊した龍に、共感して。

しかし、だからどうしたらいいのか、龍には分からなかった。少年が自分の話を聞いてくれたときのように、黙っていればいいのだろうか。でも。

自分と少年は違う。と、思った。

もう傷を治しかけている龍とは裏腹に、少年はまだ、辛いのだろうと思った。だってここには、ピアノの音色が聴こえない。ピアノの音色を聴きたくなくて、少年は逃げてきたのだと、妙に確信めいて思えた。

そして先ほどピアノを弾いていたのは、少年の母親だったのだろう。

「どうしてピアノ、やめたんだ？」

問い掛けてしまってから、内心で余計な事をしたとは思っていた。

しかしあとにはひけないし、何となく見よう見まねで、恭平のように質問を重ねてみる。

「じゃあ、今は何をしているのが一番楽しい？」

「……今は、つまらない」

人生が。

少年の言葉がそう続くのだと思うと、龍はどこかいたたまれない気持ちになった。こんな幼いうちから人生をつまらないと思って、少年の未来に何があるのか。

純粹無垢に人生を楽しいと思えるのは、精々中学生が限度だ。

「だったら、見つけろよ。友達と遊ぶとか、いろんなことに挑戦するとかして、楽しい事見つけないとお前、いつか絶対後悔したって思うぞ」

「もう、してる。ピアノなんか……始めなきゃ良かった」

……ああ。

そこで龍にはピンと来た。この子は、本当はピアノが好きなのだ。今も弾きたくてたまらないのだ。きっとこの少年が感じているのは、喪失感なんてもんじゃない。

そしてその原因は、ピアニストである母親。

龍にも経験がある。成績が伸び悩み、どうしても勝てない生徒がいた。いくらテストでいい点をとれても、学年一位、下手をすれば、県内一位でないと両親は認めてくれない。

何度、自分より成績のいい生徒を疎んだ事だろう。それでも龍は、勝つ為にがむしゃらに勉強すれば、それでよかったのだ。

だけどきつと、この少年は違う。だってライバルは、赤の他人でなく母親だ。自分より何十年も前からピアノを始めているだろう相手、自分がピアノを始めるきっかけになった相手に、そう簡単には勝てるはずもない。

それでも少年は勝とうとして、そして、挫折したのだろう。

「……お母さん、有名なのか？」

「有名だよ。ピアノを好きな人に、知らない人はいないくらい。母

さんは、すごいいんだ。十六歳でコンクールで優勝したの。これって、すごくすごく、すごい事なんだよ！」

もしかしたら嫌がるかとも思ったが、案外あっさり、少年はそう言ってくれた。それどころか、本当に母が自慢なのだというように目を輝かせている。自分をまっすぐに見つめてくる無垢な瞳を、龍は目を細めて見返した。

「憧れてるのか？」

ここで初めて、少年はにっこりと笑った。

「うん！ おれの夢は、母さんみたいなピアニストになることだったから」

――。

瞬間、龍の表情が凍りつく。小学生か、もしくは中学生になったばかりの声変わりもまだの少年が、自分の夢を語ってくれるのは、微笑ましいことのはずだ。

しかし、少年の夢は既に「過去」だった。

人生はこれから、むしろ、まだ始まって間もないというのに、この少年は自分の夢を過去として語るのだ。こんなことがあっていいのだろうか。

胸が痛んだ。視線が下がる。無意識に、体も前のめりになっていた。

堕ちていく。

「どうしたの？ どこか痛いのか？」

と、少年が心配そうに声をかけてきた。痛い。でも、違うだろうか？ 痛いのは、本当に痛いのは、お前だろうか？

龍は自分が齒がゆかった。病気になってしまった自分が、心を壊してしまった自分が。自分の傷を、初めて恥ずかしいと思った。

この子が必死に耐えている痛みを、どうして自分は耐えられなかったのだろうか。

そして思うと同時に、恭平と少年に腹が立つてくる。

――先生は、何をやっているんだ。どうして自分の息子の傷に気

付いてやらないんだ。何で癒してやらないんだ。俺なんかより、他の患者なんかより、よっぽど大切な事だろう！ こいつだって――。龍は頭^{かぶり}を振った。そんなことを考えていても、結局自分には何もできないのだと思い直す。

「いいや。……母さんの事、好きなんだな」

「……。うつん」

瞬間、少年はそれまで浮かべていた笑顔を完全に消し、地面へと視線を落とした。

「――大嫌い」

圭太は、薄れた記憶を思い起こしていた。そう、あれはたしか十一歳か十二歳のときだ。

たしかに圭太は、一人の青年——いや、あれは今の自分と同じくらいの年齢だったから、実際はまだ少年といっても良かったのだろう——に出会った。しかしそれを龍だと断定するには、圭太は唸ってしまう。

あの少年は、清潔そうな黒髪に、ノンフレームの眼鏡をかけていた。わずかに脚色はされているだろうが、今の龍とはかけ離れている。

それに、当時の圭太にとって、彼は本当に大きな人だった。龍も圭太より大きい、それよりも、もっと大きな印象を持っていたのだ。

「やっぱりもう、覚えてないか？」

「覚えてるよ。家の裏庭で、男の人と話したことはよく覚えてる。

普段父さんの患者と会う事なんてほとんどないから……、忘れるわけないよ」

「そうか」

龍はあっさりと頷いたが、それは本当だった。圭太はこの先何年生きてても、あの少年と話したことは忘れていなかったはずだ。

だって、彼は生まれて初めて、圭太が自分の傷を明かした人間だった。律子を嫌いだと伝えたのが彼だったことは記憶になかったが、この人は自分と同じ傷を抱いていると安心して、いつしか心を曝け出していた人だった。

「……俺が本当にお前に初めて会ったのは、その時だよ。診療はその直後に終わってしまったから、二度とお前に会う事はないと思った」

それは圭太も同じだった。二度と会わないと思ったからこそ、律

子が大嫌いだと吐き捨てることもできたのだと思う。しかし、龍の言葉はまだ続く。

「そのあと、俺は進学した大学で心理学を専攻した。別にカウンセラーになるつもりがあったわけじゃない。親の薦める大学に行きたくなくて、だからって特に学びたい事もなくて、一番身近に感じたから選んだだけだ。でも、二十歳を過ぎたころ――」

不幸喰いの力に目覚めた、と、龍は小さく言った。

ドク、と圭太の心臓が鳴り出す。人の不幸を喰う、その奇妙な力が龍の体に備わったのだ、と思うだけで、人間の禁忌を知った気がしてしまう。

どうして、そんな力が存在するのだろう。不幸を喰ったからといってその人が幸せになれるわけでないなら、それほど無意味な能力ちからはない。無意味で、奇妙な力……。

誰を救うわけでもない能力。

ふと圭太は、龍に不幸を喰われたときのことを思い出した。あの瞬間、圭太の意識はまどろみ、今思い出しても夢を見ていたようだ。とても心地良くて、安心して、幸福すら感じた。

それはまるで、麻薬のように――。

ああ、そうか。不幸喰いに不幸を喰われる事は、麻薬を服用すると同じことなのだ。快樂は一時のみで、効果が切れれば絶望が待っている。体も、心も、蝕まれてしまう。

そんな力を持った龍は、恭平は、一体どんな思いを抱えているのだろう。きっと圭太が思うほど、二人は幸せな世界には居ないのではないだろうか。

フツと、心が重くなるような気がした。

「圭太」

名前を呼ばれてハツとする。いつしか俯いていた顔を上げて龍の方に向けると、驚く事に、彼は圭太の目の前に立っていた。

じれったそうに、龍はまず溜息をつく。

「またお前は……。そうやってなんでも抱えるから、お前の不幸は

どんどん大きくなっていくんだ。圭太、不幸喰いがいい奴ばかりでないことは、この前話しただろう？ そんな奴にとって、お前の不幸にどんなに魅力があると思う？」

「……俺の不幸を喰いたがる奴がいるの？」

「いるのなんてものか。わんさかだ。お前は人一倍、いや、人三倍くらいは不幸を溜め込みやすい。ただでさえそうなのに、お前は幼いころに傷付きすぎたんだ。蓄積されたその不幸を喰いたがる奴は、きつと大勢いる」

「龍くんはどうして、そんなに俺を気にかけてくれるんだよ？」

奇麗事だとか、偽善だとか、そんなことを思ったわけではなかった。ただ純粹に、彼が自分を心配してくれる理由を知りたい。

だって、カウンセラーとしてでなく柳沢龍^{やなぎさわ}として圭太を癒してやりたいと言ったのは、彼自身なのだ。

龍は、一瞬困ったように唸って眉を掻いた。

「……初めてお前と話をしたとき、お前と先生に、無性に腹が立った。先生には、どうして他人である患者を癒す前に、息子である圭太を癒してやらないんだって。お前には……」

「……何？」

「——どうして泣かないんだって。不幸喰いでなかった俺にだって、お前が不幸を抱えている事は分かったのに、お前は母親を嫌いだとか、そんな心にもない言葉でしか自分を守らないから。ガキならガキらしく、大声で喚けばよかったんだ。奪われたくないって、欲しいうって、叫べばよかったんだ……って」

それこそ、奇麗事だ。圭太はしかめた顔をはぐらかすように下げた。嘆く事も叫ぶ事も、やろうと思えば簡単なのだ。だけどできなかったのは、圭太が奪われたくないように、律子からピアノを奪いなくなかったから。

圭太がピアノを続けるには、そこから律子の存在を消すほかなかったから。

しかしそんな感情を、龍は続けて言葉にして放ってしまった。

「……だから、あの時は何も言わなかったんだ。でも、不幸喰いになって、俺の脳裏に一番に浮かんできたのはお前だった。あの子は、まだ不幸を抱えているんだろうか。俺に何ができるとも限らないけど、もう一度会う事は出来ないかって、そう思った」

たったそれだけで、圭太は目頭が熱くなったような気がした。そのせいで、やっぱり顔は上げられない。

龍の言葉の、何に感動したわけでもない。もしかしたら、また奇麗事なのかもしれない。でも、だけど

龍は、自分のことを覚えていてくれた。名前も知らない、たった一度、ほんの数十分の記憶を共にしただけの相手を、この五年間ずっと覚えていてくれた。会いたいと思ってくれていた。

圭太がピアノをやめたところで、誰も気にかけてはくれなかった。彼のピアノには嫌という程中傷的な言葉を浴びせたピアノリストも、何度も母親と比べて批判したマスコミも、圭太がピアノをやめた途端、そんな人間は初めから存在しなかった、とでも言うように名前を出さなくなった。篠塚圭太という人間は、瞬く間に世間の記憶から消えていった。

だから圭太にとって、自分の記憶を鮮明に残してくれる人は貴重なのだ。だってそれは自分の存在を証明し、認めてくれている証拠だから。

「でも、思ったから行動できるわけじゃなかった。まだ心理学の勉強をし始めたばかりの俺が、お前にしてやれることなんてたかが知れてる。……いや、何も無いも同然だ。だから、それからとはとにかく勉強したよ。——不思議だよな。今までは大嫌いだった勉強が、夢が出来た途端に苦痛じゃなくなるんだ」

「……何それ。俺に会う事が夢だったの？」

苦笑じみた笑いが漏れた。そんなちっぽけな事のために、龍は力ウンセラーになったというのか。

「笑うなよ。俺にとっては大事なことだったんだ。お前に会うには、半端な覚悟じゃないかと思った。きつと不幸を抱えていたなら、

癒してやりたくなる。でも、だったらそれ相応の資格が必要だろ？
だから俺は、カウンセラーになったんだ」

不満げにそう言う龍だが、圭太はそんな口調も気にはならなかった。喉が焼けるような痛みが走り、胸が締め付けられるような心地。これは、喜びだ。

とうに失ったのだと思っていた感情が、龍の言葉で、一つ一つ、舞い戻ってくる。

思えば、初めからそうだった。いつしか自分が不都合なく生きられる術を身につけた圭太が、怒りや悲しみを露にしたのは、実に久しい事だった。そしてそれは、龍によってもたらされたものでもあった。

圭太すらが気付かぬうちに、彼は喜怒哀楽の全てを失っていたのだ。それすらが不幸を蓄積する材料になっていたとも気付かずに。

干渉される事への怒りも

傷をほじくり返される哀しみも

再びピアノを奏でられた楽しさも

自分を忘れないでいてくれた喜びも

圭太の傷を増やす出来事になってしまったこともあったが、すべては龍がくれたものだった。

「で、今年。偶然……、本当に奇跡かってくらい偶然に、先生が助手を募集している事を知ったんだ。それで俺は、お前に再会した」

「……俺に、幻滅した？」

「幻滅なんかしねえよ。ただ、びつくりした。俺が想像してたより、お前はたくさんの不幸を抱えていたから。性格も、余計頑なになつて可愛くなくなってるし」

「うるさいよ」

「でも」

二人の声が重なった。漸く心が落ち着き始めた圭太が顔を上げると、龍が慈しむように優しい視線を向けてくれている。

「でも、やっぱり思うことは一つだった。俺は、お前を癒してやり

たい。知識はあっても実践はないから、きつと傷つけることも少くないけど、それでも一緒に、お前の抱える不幸を一つずつ取り去っていこう。圭太、お前は一人じゃない。聞いてやるから、言いたい事はもつと口にしろよ。お前はもつと、我がまま言ってもいいんだよ」

——っ！

熱いものが一気にこみ上げた。それが温かい水滴となって頬を伝うのが分かったが、隠す事も忘れて、圭太は龍の顔を見つめた。

自分が誰かにそう言っただけで欲しかったのだと、身にしみて分かる。

そしてそれは、律子や恭平では意味をなさなかった。

圭太が欲しかったのは、他人の優しさだった。律子が圭太を心配するのも、恭平が同情を向けるのも、確かにありがたいことだったが、それは気休めでしかなかった。

心の無い大人。それは言い方を変えれば赤の他人で、そんな人間につけられた傷は、同じ他人にしか癒せない。出生も生きてきた環境も違う人間が、圭太の存在を認め、分かってくれる事が、彼には必要だったのだ。

涙が後から後から溢れてくる。こんな風に泣いた事が、圭太の記憶にはなかった。何度自分のピアノを否定されても、彼はただ頑なに涙を耐えてきたからだ。

どうしても止まらない涙を拭っていたら、ふと視界が暗くなった。このぬくもりを、圭太は知っている。いつか、彼はこの温かさの中で眠りについた。何も言わずに抱きしめてくれる龍の腕に縋りつくように、圭太はしっかりとそれを握りしめる。

大好きな龍くん。でも、涙で喉が詰まってか、はたまた違う事が理由なのか、圭太はどうしても、彼に雪華のことを話すことはできなかった。

4 越えられないもの

翌日、西日がまぶしく輝くようになったところに、雪華が咲をつれて問診にきた。龍は恭平の斜め後ろについて、咲への問答に耳を傾けていたが、その内容はやはりいつもと変わらず、咲が今もどこかにいる不幸喰いに不幸を喰われ続けているのは間違いないようだった。

さすがにこう何度も会話を続けていると、咲自身も大人に気を許せるようになって来たらしく、ここ最近は随分と込み入った話までも聞けるようになった。

たとえば、まいねのこと。雪華からの情報もあるが、まいねは咲のいとこで、雪華の弟夫婦の娘らしい。彼女の両親と咲の父親は、同じ車に乗っていた際の事故で亡くなり、夫に親族のいなかった雪華は、彼の遺産と、まいねを引き取る事での弟夫婦の遺産のいくらかを手に入れることになった。

龍は、昨日まいねと一緒に帰宅したことを考えていた。

咲とまいねはとにかく仲がよく、しょっちゅう二人で話をしていた。無邪気な咲とは正反対に、まいねはしっかりしていて機転もきき、二人は友達というより本当の姉妹のようだった。

不幸喰いに、不幸喰いを見分けることはできない。相手の不幸の負い加減から、もしか……、と推測する事はできても、結局は体のどこかにある痣——不幸を表す花であるスカビオサ型——を見つけるしか、断定する方法などない。

むしろ力に目醒めて四年程しか経っていない龍には、不幸の負い加減すら、判断しにくいのだ。

咲の問診が終われば、診療室には雪華が呼ばれた。咲の様子は相変わらずか、いつも通りの質問から始まる。

しかし、雪華の反応はいつもと違うものだった。

「実は……、昨日、夜の仕事を終えて帰宅したら、部屋が荒れてい

て、まいねが泣いていました。咲はぐっすり眠っていて……嫌な予感がしたんです。まいねに聞いたら、咲がまた発狂したのだと言いました」

「咲さんにそんな様子はありませんでしたか？」

恭平が、あくまで冷静に問い掛けた。いまにも泣き出しそうな表情で、雪華が頭を振る。

「朝、目覚めた咲に問いました。どうして暴れたの？ そんなに学校で嫌な事があったの？ と」

「そうしたら？」

「——知らない、と言いました」

「知らない？」

「覚えていないんです。暴れてなんていない。どうして部屋が荒れているのか分からない。」

わたしは何もしていない、とそれしか言わないんです」

「そうですか」と頷く恭平を横目で見ながら、龍は頭を抱えた。覚えていない……。咲のような症例で、そんなことは起こりうるのだろうか？ 彼女は不幸を喰われる事で、必要以上の傷を負っている。しかし、咲自身はとても強いのだと、龍は最近思い始めていた。あの子は他人を怖がらない。不幸を喰われていない状態でいじめに遭っても、きつと発狂するほどの傷は負わなかったのではないだろうか。

そんな彼女が、自分の行いを忘れるなんて、龍には理解できなかった。しかし恭平が何も言わないから、わざわざ口を出すことが出来ない。彼の経験には、そういうこともあるのかもしれない。

雪華との話が終われば、圭太^{けいた}へ預けていた咲を迎えに、龍は雪華と共に病院を出る。二人は、自宅の玄関先の段差に腰かけて話をしていた。

「ママ……」

少女は母親の存在に気がつく、か細い声で呼んだ。まだ圭太と別れがたいのか、腰かけた段差から立ち上がろうとしない。

「先生との話は終わったわ。帰りましょう」

穏やかな声音で雪華が誘いかけた。それすらにも焦れるように、咲は視線を彷徨わせる。圭太が不思議そうに少女を見ていた。

「……本当に圭太くんが好きなのね」

といった瞬間、圭太の表情に困惑が浮かんだ気がして、龍はきよとんと瞬いた。咲に必要とされることを、圭太は内心で喜んでいたはずだ。

なのに、どうしたのだろう。

気まずそうな圭太が咲へと声をかけた。

「咲ちゃん……、帰るって」

「……まだ、お兄ちゃんとお話したい」

「でも、俺ももう入らなくちゃ。明日、遊びに行くから」

「本当？」

パツと、少女の表情が華やいだ。それを合図としたように、立ち上がって母親の元へと駆け寄る。

その様子に、やはり圭太と別れがたかったのかと判断すれば、龍は安堵の溜息をついた。

「じゃあ、ありがとうございました」

「いえ。お疲れ様でした。咲ちゃん、またね」

「バイバイ」

雪華の言葉に業務用の挨拶を返せば、龍は膝に手をついた。すこし屈んで、咲に別れの言葉を告げる。その返事を聞けば、圭太の元へ行くのかと数歩歩いた。圭太も二人を見送るつもりなのかこちらへと歩んでいたの、丁度距離があつたところで立ち止まり、二人で車を仰いだ。

先に乗り込んだ咲を確認して、雪華がもう一度こちらに頭を下げる。龍が同じ動作を返すと、雪華の視線が急になまめかしくなった。その表情で圭太を見る。

「またね、圭太くん」

「……さようなら」

そう返す圭太の目は雪華を見てはいなかった。まるで助けを求めるように、そつと後ろから龍の白衣の裾を握る。横目で見た圭太は、困ったように唇を噛み締めていた。

雪華といえ、その様子に溜息をつきながら微笑を浮かべ、車へと乗り込んでいった。

エンジン音が響き、六台入る駐車場を独占していた車は、悠々と道路へと向かう。龍達のほうには運転席が向いていた。その奥から咲が手を振るのが見えれば、動作を返しながら、圭太の脇をつついて注意を引く。

漸く顔を上げた圭太も手を振るが、一度雪華がこちらを向けば、ピタリと固まってしまふ。

結局圭太は、車が見えなくなるまでそのぎこちなさを崩さなかった。

「どうしたんだよ？ お前」

「え？」

龍は病院、圭太は自宅と、近くとも別の場所へと戻るつもりの人。龍は圭太が踵を返す前に、素早く問い掛けた。

明らかに狼狽した圭太が、ぱちくりと、その大きな双眸を瞬かす。

「小柴^{ほし}さんに、何かあるのか」

「何、それ。咲ちゃんのお母さんでしょ。俺が関わりあるわけ、ないじゃん」

怪しいんだよ。その言い方が。

龍は溜息をついた。何かを隠しているのが、ありありと伺える。

圭太は図星をつかれるのが嫌いだから、いつだって裏腹な台詞で有耶無耶にしようとする。

本当に何でもないなら、まず興味すら示さないという圭太の性格を、龍は把握しているつもりだ。

それに、龍が確信を露にする理由は、ほかにもあった。

「知ってるか？ お前は俺に隠し事できないんだ」

「……？」

「お前は隠そうとすると、不幸の念を大きくする。ほんの少しだけどな。隠し事するだけで心が痛むなら、吐き出せって、いつも言ってるだろ」

龍が言い終わる前に、圭太は表情を歪めた。また泣きそうになっているのか、不幸喰いの力を疎んでいるのか、さすがにそこまでは龍には分からない。

一つ分かるのは、どちらだろうと圭太が、自分の感情を抑えようとしていることだけだ。だから彼の^{ストレス}不幸が、またその大きさを増すほんの少しとはいえ、圭太は自分に心を開いてくれたのだと思っていた。しかしそれは思い過ごしだったのか、それとも自惚れだったのか。やはり少年は、最後には自分で抱えようとしてしまうのだ。「俺は頼りにならないか……？」

「ち、違うよ。龍くんには感謝してる。俺、龍くんに助けられたところ、あるんだ。……てか、それだって分かるんだろ？俺の不幸、昨日から少しも減ってない？」

正直な話をすれば、龍には減っているようには見えない。でも、圭太の根底にあった、一番輝いていた不幸は、その色を落としていた。たまたま気の持ちようかと思っていたが、自分のおかげだったのか……？

「龍くんがいてよかったって、俺、本当にそう思ってるよ。……でもごめん。まだ何もかも、話せるわけじゃないんだ」

「だったら、そう言え。わざわざ探るなんて、無粋な事しないからだから隠すな。お前が自分で不幸を増やしてたら、俺がどれだけがんばっても間に合わない」

ポン、と圭太の頭を一撫ですれば、龍は病院へと体を向けた。少しずつでいいから、この小さな少年の、心の拠所になってあげたい。多分それが、龍が圭太を気にかけて最初の理由だ。

梅雨が明けて随分と経った空は、朝から肌をじんわりと湿らすほどの熱気があった。はやく夏休みになってほしいと思いが、圭太は制服に袖を通す。

学校へ行く準備を万端にして、階段を下りる。キッチンに入れば、甘い卵焼きの匂いがした。

「おはよ……」

「おはよ」

「おはよう」

席に着く前に挨拶すれば、新聞を読んでいた龍と、キッチンで皿に朝食を盛っていた恭平が、一緒に言葉を返してくれた。どうしても、それが圭太の心を安心させてくれる。家をあつたかいと思うのは、随分と久しい感覚だった。多分、実父が生きていた頃以来だろう。

龍の向かい側である自分の定位置に立てば、日課となったように体が動き、三人分の箸を並べてから席についた。もちろん箸立てには、ピンクの箸が一膳残る。

恭平が料理を並べ、「いただきます」と唱えれば、朝食はスタートする。龍が来てからも、朝食の静けさはそう変わらなかった。恭平と龍は時折言葉の掛け合いを行うが、圭太は何も言わないからだ。しかしそれが苦痛だとは思わない。むしろ黙っていても苦痛に思わない空間は、貴重だと思う。

「圭太」

そんな圭太に、珍しく龍が声をかけた。

卵焼きを味わっていた圭太は、ふいつと顔を上げる。

「何？」

「お前の学校に、音楽科ってあるんだよね？」

「うん。あるけど」

「そこに友達、いるのか？」

「友達……」

言葉の意味を確かめるように、圭太は呟いた。友達。一緒に何か

をしたり遊んだりして、気持ちの通い合っている人。生憎、圭太には休み時間を共に過ごす程度の友人しかいないため、ほかのクラスにも、まして学科になど、友達と呼べる人間はいない。

「いない。音楽科はークラスだけど、名前がわかるのも、伎倉きくらくらいしか……」

「伎倉？」

「前、コンサートに行ったときに会っただろ。伎倉かなえ香苗。あれ、俺の幼なじみ」

「ああ……」

ようやく思い出したように龍は視線を上にした。少し考えるように黙り込んでいたので、変わって恭平が口を開いた。

「香苗ちゃんか。なつかしいね。律子さんがいた頃は、よく遊びに来ていたよね」

「別に母さんがいないから来なくなっただんじやないよ。中学に上がって、あいつも教室やめたから、共通点がなくなっただけ」

興味無さげにご飯を口に含んでいると、考えをまとめたように龍が圭太を見た。

「じゃあさ、圭太。その子に頼んでくれねえ？ 楽譜書いて欲しいんだ」

「楽譜？」

訝る圭太を、龍は瞳で窺たしなめた。

「ああ。この家、せっかく立派なグランドピアノがあるのに、誰も弾いてねえんだろ？ だったらせっかくだし、咲ちゃんの好きな歌、弾いてみようと思ってさ」

「龍くん、ピアノ弾けるの？」

「まさか。でも一応音楽療法ってのは実証されてるし。片手でもいいんだ。好きな曲を新しい方法で聴くのって、新鮮で楽しいからな。ただ、咲ちゃんに聞いたら好きなのはアニメの曲だって言うから。」

「MDはもらったけど、さすがにそれじゃ俺は弾けないし……」
「伎倉だって、バイオリンの楽譜しか書けないんじゃないかな」

「だったらその子伝で書ける奴に頼んでもらうとかさ。無理か？」
さりげない動作でMDを渡され、圭太はそれを凝視した。音楽科
へ足を運ぶのは正直荷が重い。どうしようかと頭を掻いた。

迷うのは、心のどこかで龍の申し出を断りたくないからだ。しば
らく考えれば、ぎこちなくだが頷いた。

「分か……った。頼んでみる」

「ありがとう」

途端に龍のホツとした顔が視界に飛び込んできて、圭太は複雑な
気分になった。

龍が喜ぶのは嬉しいが、そのために自分の重荷になることをする
のは、正しいのだろうか。心のどこかで本当は嫌だと思っている圭
太の気持ちは、ストレスとなって二人に見えてはいないのだろうか。
そんな思いを抱えたまま、圭太はいつもより早く家を出た。

「伎倉」

圭太から香苗に声をかけるのは、実に久しい事だった。圭太自身、
そんなことをする日がくるとは思っていなかったし、香苗も、目を
丸くしている。

いつもなら「香苗って呼んでつてば」と怒鳴るところ、今日はそ
れも忘れていたようだ。まるで意識を取り戻したようにぴくつと背
筋を伸ばしてから、履き替えていた靴をロッカーにしまう。

音楽科へ足を踏み入れたくなかった圭太は、玄関で香苗を待つて
いた。家を早めに出てきたのもそのためだ。

ロッカーの戸をばたんと閉めて、香苗は繕うように苦笑した。

「あはは、何？」

「……あのさ、頼みがあるんだけど」

「え……、うん。珍しいね。どしたの？」

ふと笑みを消せば、香苗はきょとんと訊ねてきた。次々と登校し

て来た生徒が行き交うため、圭太は半ば強引に、持っていたMDを押し付ける。

「これのさ、楽譜書いてくんない？ あんたが書けないなら書ける人に頼んで。いいかな」

「圭太ピアノ弾くの？」

香苗は素直にMDを受け取ってくれたが、その口はやはり理由を求めた。しかし、ピアノについて詮索されるのは、どうあってもいい気がしない。

すでに教室へ行こうと歩き出していた圭太の後ろを、香苗は急いでついてくる。

「ちよつと、圭太！ やってあげないよ？」

ピタリ。圭太は立ち止まった。全く面倒だ。頭を掻いて溜息をつく。

「龍さんに頼まれたんだよ。患者に弾いてあげたいんだって」

「ああ、おじさんのアシスタントの人？ 前にコンサート来てくれたよね」

MDを顎に当てれば、そういうどうでもいいことをよく覚えている女は、さらりと語った。でも、と言葉を続ける。

「だったら圭太が書いてあげたら？ あたしが誰かに頼むより、よっぽど早いじゃない」

前を向いたままの圭太は、顔をしかめた。余計なことを、と思う。「俺は無理。もう五年くらい弾いてないから、楽譜の書き方なんて忘れたよ」

「忘れたって何よ。今でも普通にしてるだけで分かるんでしょ？」

「だって圭太は——」

「黙れよ！」

自分でも驚くくらいに、圭太は声を荒げていた。教室へ向かおうとしていた生徒や、廊下を行き交っていた職員が一斉にこちらを見る。

人から注目される事に嫌悪すれば、香苗に向いていた体を再び正

面に戻して、教室へと突き進む。

「ちょ、ちよつと待って！ 圭太ってば！」

香苗はすぐに後を追ってきた。その声に、やはり周りの注意はこちらに向いて、圭太は舌打ちする。

自分の教室を通り過ぎた。香苗はそれに気付かないらしく、相変わらずよく動く口を操る。

「気に入らない事があるなら、ちゃんと言ってよ！ 圭太っていつもそう。だからあたし、圭太が嫌がることも言っちゃうんじゃないねえ、何が嫌なの？ どうしたらまた笑ってくれるの？ 本当にピアノ、嫌いになっちゃったの？」

ただただ廊下を直進した。その先にあるのは化学室だ。圭太が目指していたのはそこだった。この少女は、放っておいたら公衆の面前で圭太の傷を暴きかねない。

「ねえっ、何とか言いなさいよ！ なんでそんなに自分の才能嫌うのよ？ おばさん言ってたよ。圭太の力は凄い物だって。他人はいろいろ言うけど、神様はちゃんと意味を持ってその力を持たせたんだって。あたしだって羨ましいもん！ だって圭太は、一回聴いたらどんな音でも——きゃっ！」

化学室にはいるなり、圭太は香苗の腕を掴んで押し込んだ。ドアを閉めてその前に立つ。きちんと聞かすまで、逃がす気はなかった。「何が羨ましいだよ。お前に何が分かるんだよ？ 他人は色々言うって……それが俺には痛かったんだ。一番辛い事だったんだ。分かってくれる人だけ分かってくれればいいなんて思うほど、俺はできた人間じゃないんだよ！ ……なのになんなんだよ。母さんも前も、冗談じゃないんだよ……もううんざりなんだよっ！」

香苗に口を挟む隙も与えないまま、圭太は一気に捲くし立てた。胸が苦しい。自分の傷を言葉にするのは、辛くて、泣きたくて、それ以上は声にならなかった。

くるりと踵を返して、化学室を出て行こうとする。——と、つんと体が止まった。その腕を香苗ががっしりと掴んでいる事に気が

つけば、圭太は億劫そうに振り返る。

また、気休めのような言葉で慰められるのだろうか。それが嫌で、何も言わせないようにしたのに……。

香苗や律子に慰められるのは嫌いだ。そこは生温くて、ぬるま湯みたいで、自分がふやけていく気がする。それが心地よくて、傷などないと勘違いしそうになって。でも消えない傷に再び心を蝕まれるから、大嫌いだ。

しかし圭太の思いとは裏腹に、交わった香苗の視線はどこか嬉々としていた。

「圭太、いい顔するようになったね」

「……は？」

「驚いた。何言っても面倒そうにしかない圭太が、あたしを怒鳴りつけてくるんだもん。何かと思ったよ。——でも、嬉しいな。また昔みたいに、喧嘩とかできるのかな」

驚いたのは、こつちだ。

圭太は魂抜かれたようにただ瞬いた。ずっと、感情をあらわにするのが嫌だった。楽しい事も嬉しい事も、いつか何かに奪われる。怒ったり哀しんだりするのもバカらしい。だったら何も感じないほうがいいと思った。そう思っていた。

でも、目の前で笑う香苗が、今まで見た彼女で一番綺麗だと思うのは、多分錯覚なんかじゃなくて。

そしてそれは、自分もたらしめたものなのだと思うと、圭太はつい彼女に見入ってしまう。さつきも香苗は、「どうしたらまた笑ってくれるの」と言った。……もしかしたら、圭太が失ったと思っていた喜と楽は、本当は律子に奪われたのではなく、自分自身が潰れてしまっていたのだろうか。

ストレス
不幸を言い訳にして、見えないつもりでいたのだろうか。

ここにあつたのに。

「うん、決めた！ 圭太、楽譜あたしが書くよ。だから条件、出しでもいい？」

「は？」

圭太が考えている間、香苗も何かを考えていたらしく、口を開けばそういうことだった。

別に条件飲んでまで、書いてくれとは頼んでいないのだが……。

「今日、一緒に帰ろう」

「はああ？」

明らかに嫌そうに、圭太は声を出した。だって、香苗と帰ったところで話すこともないし、だからといって彼女の詮索じみた会話に付き合いたくはない。

「何よ？ いいじゃない。あたしたちって高校で再会してからこっち、全然一緒に遊んだりしてないしさ。……てか、誘っても圭太が断るんだけど。たまには、ね？ もうすぐ夏休みなんだし、遊ぼうよ」

いつしか一緒に帰ろうと言う話が遊ぼうと言う言葉に変われば、

圭太は余計に嫌そうに顔をしかめた。

だから自分と遊んでも楽しくなんてないだろうに。香苗は圭太と違い、クラスにも、もしくは学校内、いや学校外にだって友達はたくさんいるはずだ。それなのに、どうして誘うのが自分なのか。

それにふと、今日は無理なのだと言う事を思い出した。

「今日は無理。先約入ってる」

「先約って？」

「……なんでもいいだろ」

「圭太。分かってる？ あなた、あたしに逆らえる立場じゃないのよ、今」

だから、別にそこまでして書いてもらわなくてもいいのだ。

そう思いながらも口にしなかったのは、頭の隅に龍の姿がちらついていたからだ。「ありがとう」と自分にいった、龍の表情が忘れられない。彼を、がっかりさせたくない。

「患者の家……、遊びに行くんだ」

「患者？ 何で圭太が患者さんの家に行くのよ？」

圭太は嫌そうに視線を逸らしてから腕をさすった。香苗と話すと、語尾の「？」をよく聞く。

そしてそれが、圭太にはとにかく億劫だった。

「……その子のお母さんに、頼まれ、て」

「何で？」

突然香苗の視線が厳しくなった。

「何でって……」

「何で患者さんのお母さんと仲良くなるの？ 患者って男？ 女？
いくつ？」

「お前こそ何なんだよ。何をこちゃこちゃと……」

「知りたいからよ」

「だから何で？」

途端に黙るから、圭太は訝って眉を潜めた。誰かから、圭太について探れとも言われているのだろうか。しかしそんな人物は、生憎思いつかない。

だったら、律子が死んで、圭太の母親代わりにでもなったつもりなのだろうか。

「……圭太は、誰かに興味や関心を持たなかったから、どんな人なのか、気になって……」

なんだ、そんなことが。小さく肩で溜息をつけば、視線だけ香苗を捉える。多分香苗は、圭太のことを友達だと、そう思っているのだ。

それなのに圭太がこう冷たい態度では、彼女も悲しくなってしまうのだろう。一方通行の思いほど、虚しいものはない。

「患者は、十二歳の女の子。診療中に偶然敷地であって、仲良くなっただ」

単調にそれだけ教えてやった。パツと香苗の表情が華やいたのが、視界の端に映る。

「じゃあ、そのお母さんとは？ あ、お母さんは一緒に病院に来るのか」

「……ん、まあ」

言いながら、気付かぬうちに圭太は唇を噛み締める。それが何かを隠している証拠だと、目敏い香苗が気付かないわけがない。

「違うの？」

「違うないって」

慌てて取り繕ってももう遅いのだ。彼女から注がれた疑いの眼差しは、圭太の表情の一系列の乱れも許さない。

「まさか、圭太が明るくなったのは、そのお母さんのおかげ？　十二歳の子の母親なら、まだ若いんでしょ。圭太、それ不倫だよ」

「バカかつ……！　……そんなんじゃない。大体、あの人の旦那はもう死んでる」

「死んでいたらいいって言うの？　自分はおばさんの再婚に反抗してたくせに」

「——だから俺はそんなことしない」

香苗の言葉をそのまま続けてやれば、一度目を瞞ってから彼女は黙り込んだ。愚問だと、反省したのだろう。

「そうね。うん、ごめん。……圭太のこと、信じるよ。だから——あたしも行く」

「……はい？」

信じると言つて、一緒に行くとは、それはイコールでつながる話か？　信じるからこそ、圭太を一人で送り出すのではないのだろうか。

心でどれだけ思ったところで香苗に伝わるはずもなく、勝手に全てを決定してしまった少女は、そのまま圭太の脇を通り抜けて化学室を出て行った。

追いかけてようと踵を返すも虚しく、校内に朝礼開始のチャイムが鳴り響いた。

この後圭太が、いつか教室で絡まれた二人組に、再び香苗に対して問いただされたのは、もはや言うまでもない。

別に香苗についてこられて困る事など何もない。しかし、咲と仲良く遊んでいる自分を見られると思えば、恥ずかしいと言うか情けないと言うか……とにかく複雑な感情が渦を巻くものだから、できるならついてきて欲しくはなかったのだ。

そう思っ、て、終礼が終わるなりすぐに下足ロッカーへと向かえば案の定香苗はまだいなかった。チャンスとばかりにさっさと靴を履きかえ、圭太は玄関を出る。

そのまま校門も出ようとしたとき、

「四条圭太」

聞き覚えのある声が届いた。

「……………亜門」

校門に背を靠れた亜門は、ポケットに手をつ突っ込んでこちらを見ている。一重まぶたの細い眼が、狐のように細められた。

はじめから視線をぶつけてしまった今回は、圭太は逸らすことができない。

圭太の中の亜門は、小学生で止まっていた。しかし目の前の男は、面立ちも背格好も、あのころとはまるで違う。大人の男になっていた。

「久しぶり。また俺のこと忘れてないよね？」

「……………何か用？」

素気なく、圭太は訊ねた。香苗に対してもそうだが、圭太は自分の過去を知っている人間に優しくできない。

「つめたっ！ 昔は一緒に練習してた仲じゃん？ なあ、またピアノやらないの？」

「……………やらない」

もしかしたら、また弾けるようになるかもしれないという予感があった。だけど、それを亜門にほめかすことをしなかったのは、

確信していたからだ。

たとえやつても、もうこいつには近づけない。

事実今も、ちらほらと通り過ぎる生徒の中に亜門の存在に気が付いているものはいるようだった。高校生ピアニストとして、音楽科の人間ならば誰しもが知っている存在だからだ。

圭太の返答に、亜門はつまらなそうに肩を竦めた。

「へえ。腰ぬけはいつまで経っても腰ぬけか」

「……」

「言い返すこともできないわけ？」

舌打ちが耳に届く。顔を逸らしていたから、亜門がどんな様子かは確かめられなかった。

早く、ここから去りたい。

亜門を見ると、思い知るのだ。律子がどれだけ素晴らしいピアニストだったか。教え子を有名にできるなら、その力は本物だ。

コンクールで亜門に負けた時、圭太はもう、律子に追いつけないのだと知った。律子が死んだとき、もう誰も、彼女を越えられないのだと悟った。

折れた心は、もう元にはもどらない。

「圭太！」

とつさに、圭太は声の方に向き直った。相手が誰でも、今の圭太には救いだ。

そこには、不機嫌そうな香苗が立っていた。

「圭太、あたしのこと置いていく気だったんでしょ？　うちの教室から、圭太がさっさと帰ってくの見えたんだか——……あれ、亜門」

「香苗ちゃん、久し振り」

「こんなところで何してるの？」

「圭ちゃんをいじめてたの」

自分をそう呼んだ亜門を、圭太は激しく睨んでやった。バカにしている、とそう思う。

「行こう、伎倉」

亜門の顔を見ないままに、圭太は歩き出した。香苗が慌ててあとを追ってくる。背中に、亜門の声が届いた。

「圭太！ またピアノやるときは、ちゃんと言えよ！」

何で、そんなことを報告しなくてはならないのだと、思った圭太は振り返ることなく歩き続けた。

一度、後ろを振り返った香苗が、遠慮がちに口を開く。

「亜門、また圭太にピアノ、やってほしいんだろうね」

「……大きな世話なんだよ」

どんな理由だろうと、彼の存在が圭太の傷を増やす。あの後ろに、律子の姿が見えてたまらない。

嫌いなわけでない。亜門は圭太にとって、本当に良きライバルだった。けどそれは、圭太の中ではもう過去のことだ。きっと、亜門の中でも。

自分をからかうことで亜門がストレスを発散しているのだとしか、圭太には思えなかった。

学校から小柴家までは、歩けば三十分ほどの道のりだ。近くまで行くバスもあるが、せつかくのいい天気なので、圭太は歩いていく事にした。場所を分かっていない香苗は、もちろん異を唱えない。

しかし良すぎるほどの天気は、十分も歩けば暑さをもたらず。

「ねえ、圭太？ その患者さんの家って近いの？ もう体中焼けそうだよ」

そう言って持ち上げた腕を、香苗はゆっくりと撫でた。べたつく感触に顔をしかめている。

「あそこにコンビニ、見えるだろ」

顎で前方を指してやると、隣の少女は顔を上げた。うん、と頷く。「ここからあそこまでを、往復半するくらい」

「ええっ？ それって結構遠いじゃん。もう、焼けたら先生に怒られる」

嘆く香苗に、だったら帰れと言ってやりたかった。後に続く言葉

が予想できたので言わなかったが。

「ねーえ。じゃあコンビ二寄って行かない？ おなか空くでしょ、もうお昼なんだし」

「別に」

「別について何？」

「金ないし。行きたかったら一人で行けば？」

「じゃあ圭太お昼どうすんの？」

「食わなくても死なないじゃん」

あつさりそう吐き捨てると、香苗が持ち前のお節介を發揮した。せつかく余計な事を言いそうなのを回避したばかりなのに、早速選択を誤ったらしい。

「死なないけど体に悪いよ！ 病気になったらどうするの？ まだまだ育ち盛りなんだからね！」

勘弁してくれ。圭太達の歩く右側を走る旧国道。そこに行き交う自動車の排気ガスにより熱気を感じながら、圭太は頭を抱えた。

「いいから、行こう！ お金ないならあたしが奢ってあげる。今日は特別だよ」

言うなり圭太の腕を掴んで、香苗はコンビ二へと急いだ。

昔も、こんな事があった。まだ律子が再婚する前、母子家庭だった頃だ。律子が風邪をこじらせて入院してしまったため、圭太は自炊する事になった。

しかしそれまで料理なんてしたことなかった圭太だ。まだ小学生で、コンビ二に一人で入るのも慣れていなかった。家にあるお菓子でしのごう。そう思っていることを香苗に話したら、確か無理やり家にお邪魔させられたのだ。まだ香苗を「香苗ちゃん」と慕っていた頃の話である。

本当に、香苗はあの頃から何も変わっていないのだな、と思うと、圭太は自分に溜息をついた。色んなものを抱えてしまうのが体質だとしても、圭太はそれに卑屈になりすぎていた。誰も理解などしてくれないのだと、勝手に思い込んでいたのだ。

多分香苗は、そんな圭太も受け入れてくれたのに。

コンビニで必要以上だろうと思うほどのおにぎりやサンドウィッチ、そしてお菓子を買った香苗と、それをただただ呆然と眺めていた圭太は、暑さにめげそうになりながらも何とか小柴家に着いた。

古ぼけたアパートの入り口前に曝すように設置された駐車場には、先日目にした雪華の車はない。分かっていたが何となくホッとすれば、ギシギシとなるアルミ製の階段を上った。部屋は一階と二階で合計十室ほどある。

そのうちの一つ。雪華からは二〇二号室だと聞いていたが、部屋番号など分からないほど汚れた壁から、「小柴」とプレートの掛けられた部屋を見つけた。

「ここ？」

あまりに寂れたそのアパートに言葉を失っていた香苗は、掠れた声でそれだけ問うた。

圭太は頷くと、使えるのかも分からないチャイムを鳴らす。しかし誰も扉を開けないから、やはり壊れているのかと思った。

「こんにちはー」

声をかけながらノックをしても、やはり誰も出ては来なかった。

と、香苗が一步前へ出る。

「すいませーん！ 篠塚しのづかですけど！ ……誰も出ないじゃない。誘っておいで、失礼なの。圭太が大人しいからって、なめてんじやないの？」

失礼なのはお前だ。大人しいは確かかもしれないが、それを本人の前で言うなよ。

思ったが、口にはしなかった。言葉にならなかったのだ。香苗が、家のドアをガラリと開けてしまったから。

「やだ、鍵、掛かってないじゃん」

「古いから、壊れてんじゃない？ いいから閉めとけよ」

「でも……圭太——」

まるでいけないものでも見てしまったかのように、香苗の声が震える。怪訝に思った圭太が家の中に目をやった時、思わず唾を飲み込んだ。

小さなアパートは、扉を引けばすぐにリビングとして使われているのだらう部屋が目に入る。しかしそこは、瞬きを忘れるほどにひどく荒れていた。

「泥棒でも、入ったんじゃないの？　ねえ、警察に」

「待って、落ち着けよ。まだ分からないから。慌てるな」

それは、まるで自分自身に言い聞かせているように単調な言葉だった。香苗にしてみれば、必要以上に圭太が落ち着いて見えたかもしれない。

「でも……」

「精神病患者がいたんだ。誰かが暴れたって可能性もある」

精神科医の息子である圭太がそう言えば、幾ばくかの説得力があるのだらう。香苗はそれを境に口を出さなくなった。

それを受けて、圭太は考え込む。今の言葉は事実だ。精神病患者に、心が不安定になりすぎて暴れる者は少なくない。龍だってそうだった。

でも、咲が……？　あの少女が、そこまで心を乱すのだらうか。

咲は、一度会っただけで圭太を好きだと言ったのだ。咲のいじめの程度がどれほどか、圭太には知る由もない。それでも、人間不信にもなっていないあの少女に、それほどの傷があるとはどうしても思えなかった。

だけど本当は、もっと大きなものを抱えていたのだらうか？　圭太が気付かなかっただけで、本当の咲は、彼が思う以上に傷付いていたのだらうか。

まだ、十二歳なのに？

納得がいなくて、気がつけば圭太は勝手に家の中へと上がりこんでいた。香苗が名前を呼んでくるが、それに耳を貸す余裕はない。

壊れたアパートに廊下はなく、部屋はすべて襖で区切られていた。服も本も、好き放題に散らかっている。足元を見ながら歩いていたが、突如痛みが走った。

「……っ」

「圭太？」

香苗の心配そうな声に、漸く彼女が着いてきていたのだと悟る。振り返ってから舌打ちした。

「そこから動くな。多分、皿とかも割れてたんだ。大きいのは片付けたんだろうけど、まだ破片が散ってる」

「踏んだの？ 大丈夫？」

「俺は大丈夫だよ。とにかく、そこから動くなよ」

踏んだ破片は小さなものだった。歩きたび内出血でもしたような痛みが走るが、それもじきにおさまるだろう。そのまま奥の襖を開けて、圭太は硬直した。

その荒れようは、先ほどの部屋と比にならない。びりびりに破られて散っているのはおそらく教科書だ。敷きっぱなしの蒲団のシーツは、はさみか何かで裂くように切られていた。

カーテンは取れ、机は横になっている。本もそこらにばら撒かれ、服も散々になっていた。

入り口際に、くたびれた赤いランドセルが二つ、放り投げられたようにおいてある。ここは、咲とまいねの部屋なのか。それにしても、この荒れ方は尋常じゃない。

「ねえ、圭太、もう帰ろう？ 警察呼ばないなら、せめておじさんに言おうよ」

どうして。咲が本当にこれをやったのだろうか。だが咲でないなら誰が？ まいねがやったのなら、雪華は恭平にそちらも相談するだろう。雪華がやったなら、昨日家へ来た咲は、もっと彼女を恐れるはずだ。

いや、昨日の咲は……変ではなかったか？

雪華が迎えにきたとき、彼女は帰りたくなさそうだった。だけど、

圭太が今日訪れる約束をしたから、明るく帰って行つたのだ。そのときはもう、雪華に対しておかしな態度ではなかった。

圭太と別れ難かつたのかと思つたが、もし違つたら？ 家へ、帰りたくなかつたのだとしたら？

「圭太！ もう、いい加減にしなよ。そんなところで考えてたつて何もないつて。その患者の子が暴れたのか、泥棒が入つたのか、どつちかなんでしょ？ それともポルターガイストでも起きたつて言うの？」

！ 香苗の怒鳴り声が届いたのは、彼女が半分ほど喋つた時点であつた。それでも、その言葉が、圭太の疑問と合致する。

「それだ！」

「は……？」

思わぬところで圭太が食いついてきたのだらう。香苗の目が点になる。しかしそれに構うことを知らない圭太は、もう靴を履いて小柴家を飛び出していた。

「ちよつと、待ってよ！」

香苗が追ってくる。こればかりは彼女の言葉のおかげだったから、圭太は他意なしに香苗の手を掴む。繋がった二つの手に、香苗が釘付けになっている事も、気付きはしなかった。

もちろんあの部屋は、ポルターガイスト現象なんかで荒れたわけではない。圭太は大切な事を忘れていた。

——不幸喰いだ。

咲は、また不幸喰いに不幸を喰われたのだ。そしてその直後に、きつとひどく中傷的なことがあつたのだらう。それは咲の心にこれ以上ない傷をつけ、彼女は自分の心を守りきれなくなったのだ。

そして、不幸喰いは咲の近くにいます。

——あやみき 絢崎まいね。

彼女が不幸喰いなのではないかと、圭太には予感があつた。それなのに、色んなことがありすぎて、彼の思考からそれはすっかり飛んでいた。いやむしろ、二人と一緒に帰ってきたあの日、龍が何も

言わないから忘れきっていたのだ。

「けいたお兄ちゃん」

アパートから離れ、旧国道に出る一つ前の角を曲がった時、咄嗟に掛かった声には聞き覚えがあった。振り返った先の二人の少女に、圭太は一瞬息を飲む。

「……咲ちゃん、——……まいね、ちゃん」

「どうしたの？ 今日はいれなくなっただんじやなかったの？」

「いや……。俺はそんなこと言っていないよ。ちゃんと今、二人の家に行ったところ」

「え、でも、まいねちゃんが……」

「お兄ちゃん、何かあった？」

咲の言葉を遮ったまいねは、単調にそう訊ねてきた。

「何かって……？」

「何かを見たの？」

「家、荒れてたんだけど」

それを答えたのは香苗だ。まいねが視線をそちらに移し、香苗を見上げた。

「けいたお兄ちゃんの彼女？」

「違うよ」

即答したのは圭太だ。香苗の視線を急に感じて振り返れば、恨めしそうにこちらを睨んでいる。なんだよ？ 違う事違うって言うて悪いのか？

「でも手、繋いでる」

そう言われて、圭太は初めて自分が香苗の手を握っている事に気がついた。そう、握っているのは圭太だ。

さすがに自覚してしまえばこそばゆくて、すぐに手は離れた。今更、変な汗が掌を湿らせる。

「……こいつは幼なじみ。で、さ。その、あの荒れてたのって……」
「咲がやったの」

唐突に咲はそう言った。視線は一心に地面を見つめ、まるでどう

でもいいといたげに投げやりな言葉を吐く。

「どうして」

「分らない」

「分らないって……」

「覚えてないの」

「覚えていない？」

圭太は訝るように目を細めた。発狂した事を、覚えていないと言うのか。確かに心が壊れて我を失う人間はある。圭太も何度か見たことがあった。でも、今の咲はまるで普通なのに？

「咲ちゃん。君は、自分をいじめた人間を恨んでいるの？」

ふと、少女が顔を上げた。圭太の言葉を理解できなかったように揺れる瞳は、やがてその首を横に振る。

「咲は……咲をいじめるみんなが嫌い。でも、咲にはまいねちゃんがいるから、大丈夫なの」

その言葉を聞くのは、実に二回目だ。初めては、最初に咲に会ったとき。

「まいねちゃんがおまじないしてくれるから」？

「それもあるけど、咲はまいねちゃんが大好きだから」

「……分かった」

頷いて、圭太は香苗についてくるよう促した。「用事があるから」と、二人には適当に理由を繕う。

咲は、まいねを信じている。でも、まいねが不幸喰いなのは、恐らく間違いないと思う。おまじないとは、不幸を喰うあの行為。あの日帰りがらなかったのは、恐らく発狂した事を覚えていない自分が恐かったから。その原因がまいねだと、あの少女はまだ気付いていない。

龍に相談しよう。龍なら何とかしてくれる。それだけを思って、

圭太は残りの帰路を急いだ。

*

家に向かう途中に、香苗には楽譜を渡して帰るよう言った。しかし彼女は一緒に圭太の家へ行くのだと言い張り、結局玄関先に来るまでに説得する事はできなかった。

早く龍に話してしまいたかったのに、恭平と会えば、下手したら夕食まで同席するかもしれない。恨めしげな溜息を盛大に吐いて、圭太は玄関を開けた。

くく

ドキリとした。音、ピアノの音。それが玄関に響いてきている。ペダルを踏んでいないようで、反響はしていないため外には聴こえなかったが、少なくとも家屋には大きく響き渡る。

素人の音だ。習いたての子供。いや、そちらのほうがまだ上手く弾けるかもしれない。

でもこれは、ピアノの音で、そして――……。

ソ・ミ ソ・ミ レドレド

「圭太！」

香苗の叫び声が聴こえた時、もう圭太の視界は色を無くしていた。

レレミ ファーレ ミミファ ソーミ

無情に響くこの音は、圭太の始まりの音だ。

初めてのピアノの発表会で演奏した曲。初めて律子に、ピアノで弾いてもらった曲。初めて世間に、有名ピアニストの息子である圭太の名前がさらされることとなった曲だ。

だからこそ、痛い。

あの日、あの時、この曲を奏でた過去がなかったら、圭太の未来は変わっていたのかも知れないと思えるから、だから余計に、この音を聴くのが痛いんだ。

何も、何も越えられてはいないんだと思った。

例えば龍の存在が、圭太の救いになっていても。

例えば恭平との朝食に、安息感を覚えても。

例えば香苗が、自分対して変わりなく親身になってくれている事に
気付けても。

圭太の傷は、まだ傷のままだった。

——またピアノやらないの？

——やらない。

それとも、亜門にあんなことを言ったから、言葉が現実になってしまったのだろうか。

ふわりと、体が軽くなる。自分を包む心地よい温かみに、圭太はゆっくり息を吐いた。この感覚は三度目だ。温かい体温、優しい香り。龍くん。だけど俺が、痛みを伴っても何かを拒絶しようと思わないのは、きつと龍くんのおかげなんだ。あんたは俺の欲しいものをくれるわけじゃない。でも、俺が望む温かさを与えてくれる。それが、嬉しかった。

恭平（父さん）よりも、父さんみたいで。

律子（母さん）よりも、母さんみたいで。

香苗（幼なじみ）よりも、友達みたいで。

だって、俺と同じ痛みを伴って、俺の知らない強さを持っていたのは、龍くんだけだったから。

「圭太、大丈夫ですか？」

ベッドに寝かせた圭太に蒲団をかけたところで、龍は今にも泣き出しそうな少女の声に振り返った。

「大丈夫だよ。ごめん、俺のせいだな。今日は帰りが遅いつて聞いていて、油断した」

香苗の声を聞きつけて、ピアノのある部屋から出た龍が見たのは、

顔面蒼白に蹲っている圭太だった。自分が安易に弾いていたピアノ。その音が、彼の抱えるストレスを刺激して、意識障害を起こさせたのだ。

いくらこの頃の圭太の状態がよかったにしても、彼のピアノへのトラウマはそんなに簡単なものではない。あの音を、彼の体が受け付けようとするしないのだ。

「柳沢さんやなぎさわのせいなんかじゃありません。圭太……圭ちゃん、ピアノ好きなのに、やれないから。あの、圭ちゃんは、病気なんですか？」

「どうして？」

「ピアノをやめる前から、圭ちゃん変だった。最初はレッスンに來なくなつて。來ても絶対ピアノと向かい合わなくて。楽譜とか、貰つても目を通さないし。——高校入つて再会した圭ちゃんは、まったく笑わなくなつてた」

龍は、視線を圭太に向けた。今は意識の混濁は収まり、まだあどけない子供のような表情で眠っている。その前髪を、さらりと一撫でした。

「こいつは、元々ストレスを溜めやすいんだ。なのに、自分を守るのが下手な性格だから、どんどんその心に負荷をかけていつて……」

「……」
「辛かつたんですね」

何も言わないでも、多分香苗は理解してくれると思つた。彼女は、圭太のことが好きなのだ。律子や恭平とは違う、《好き》。

それは、これからの圭太に必要なものだ。

「あの、これ。頼まれてた楽譜です」

ふと背後に寄つて來た香苗は、龍に一枚の紙切れを差し出した。受け取りながら、「ありがとう」と声をかける。

「条件出してもいいですか？」

「え？」

「圭太を、癒してあげてください。そしたら、あたしがバイオリン

でその曲を弾いてもかまいません」

それは確かに、願ってもない申し出だ。龍が必死に練習するよりは、香苗が弾くほうが何倍も早いし、上手い。

「うん。俺に出来る事は、最初から全部するつもりだよ」

「柳沢さん……」

まだ何かを言いたそうな香苗に、龍はゆっくりと立ち上がった。そのまま一緒に部屋を出て、扉を閉める。

「――圭太には、特別な力があります」

「特別な力？」

「絶対音感です」

ああ、そうなのか。と龍は思った。だから圭太は、あんなにも不幸を抱えているんだ。

絶対音感。つまりは、圭太は楽譜がなくてもピアノを奏でる事が出来る。一度耳にした音は、すべて脳内で音符化されるのだから。

だから圭太のストレスは、必要以上に溜まっていくのだ。世界から音が消えることはない。例えばそれが車の走る音でも、小鳥のさえずりでも、音楽家の演奏でも、だ。

「圭太はその力を隠していませんでした。むしろおばさんは誇ってたし……。でも、羨む人はみんな、圭太を批判した」

「優しいあいつに、それは耐えられなかったんだな」

人にはない力を持つこと。その異端さは龍にも分かる。ただ龍の場合は、本来人に曝け出すものではなかったし、恭平と言う同士もいた。圭太は驚きつつも拒絶は見せなかったから、恵まれていたのだが。

「圭太、柳沢さんのこと信頼してるみたいだから。彼が誰かの頼みごと聞くななんて、今までなかったんですよ」

「あいつはみんなのこと信頼してるよ。ただ、近すぎて素直に言えないだけで」

「わかってるんですね」

「……俺がそうだったから」

龍がそう言うと、香苗はふ、と笑った。

「来週、圭太の誕生日なんですよ」

「え？」

唐突な情報に、龍は瞬いた。来週は七月も中旬だ。そういえば、圭太の誕生日など聞いたことがなかったな、と今更になって思いだす。

「七月十八日。おじさんは毎年ケーキ作ってましたよ。今は知らないけど、おじさんのことだから作ってるんじゃないかな。あたしも今年は参加させてもらおうと思うんです。柳沢さんも、圭太のこと祝ってあげますよね？」

「うん。もちろん」

龍の返事を満足げに受け取れば、香苗はにっこりと笑った。「あたしはこれで失礼します」と言い置いて、篠塚家を後にする。その後ろ姿を見送りながら、いつか彼女と圭太がもつと親しくなる日が来るのだろうか、などと考えて、龍はつい笑みをこぼしていた。

真っ暗な部屋で、圭太は時計を見ることもなくただ茫然と横たわっていた。目が覚めたのがいつかは覚えていないし、時計を確認したわけでないから、はっきりした時間も分らない。だが、もう随分長い間こうしている気がする。

誰かを呼び寄せる気にはなれなかった。ここが自室であることは雰囲気で分かっているし、一步廊下に出れば龍も恭平もいるだろう。電気のない部屋がこうも真っ暗なのだから、香苗はおそらく帰ったのだろうが。

どれくらい眠っていたのだろう。帰ってくるなりピアノの音を聴いて倒れたことは覚えていて。それが龍の奏でていた音であるということも、何となくだが理解している。

圭太は、自分が情けなかった。龍が自分を癒したいのと言ってくれた時、正直圭太は、傷を克服した気でいた。ピアノはまだ弾けないが、あとは気持ち次第でなんとかなるだろうと、安易にそう思っていた。

とんだ思い込みだ。自嘲^{わい}える。

本当の自分はまだ非常に弱くて、あの音色を聴いてだけで、情けなくも倒れてしまうというのに。

掛け蒲団を引っ張り上げて、その中へと潜り込んだ。真っ暗な世界は不安で、怖くて、息苦しくて、嫌いだ。でも、光のある世界も嫌いだ。笑っている人が羨ましい。愛する人と共にいられる人が羨ましい。羨望で、そんな世界は圭太には歪んで見えた。

どこにも、居場所が見つけれない。

——龍くん。

圭太が心の底で呼んだのは、その名前だった。龍くん、龍くん、龍くん！

どうしてだろう。圭太を地獄の底に突き落とすのは龍なのに、救

いあげてくれるのも龍なのは。圭太の心をズタズタに傷つけるのは龍なのに、こういうときに、彼が助けを求めるのも龍なのは。

たとえ鼻屑だと言われても、勝手だと言われても、圭太の心は、こんなにも龍を求めている。誰よりも、自分の心を癒せるのは龍なのだ、本能が知っている。

そんな風に考えている時、不意に部屋の扉が開かれた。相変わらず蒲団に潜り込んでいた圭太は、扉がわずかにきしむ音でそれを悟る。

ゆつくりとした足音は、圭太のベッドの前で止まる。息苦しいままに潜り込んでいる圭太の蒲団を、首の下までずりおろし、整えてくれた。

——龍くんだ。

起きていることを知られたくなくて目を閉じていたが、圭太にはそれが分かった。この香りは、龍の匂いだ。香水ではない。多分、龍が使っているシャンプーの匂い。

蒲団を整え終えれば、龍は圭太の髪を梳くように一撫でする。

「……ごめん、な」

起こさないようにだろう。か細い声でそれだけ言って、龍は踵を返したようだった。

違う。龍くんが悪いんじゃない。俺は、あんたに謝ってほしいわけじゃない。

「龍くん」

そう思うのと、圭太が龍を呼び止めるのはほぼ同時だった。このまま、彼が罪悪感に苛まれ続けるのは嫌だった。それは龍のためであると同時に、自分のためだ。

「起きてたのか？」

「……や、今」

「そうか。……電気、つける？」

「ん、お願い」

こんな嘘を黙って許してくれるのが、龍の優しさだ。パチン、と

いう音を合図に、圭太の視界が明るくなる。起こした上半身から、わずかに距離の離れた龍と目が合った。

お互いに何も話さない時間が、数分。

普段なら、圭太は龍と話さずとも何時間でも一緒にいられる。しかし今は、うつむく龍からその罪悪感がひしひしと伝わってきて、圭太は一度目を閉じた。

「……龍くん、こつち。ここ、座つてよ」

ベッドの端を叩くと、龍はそれにしたがってくれた。こういう状況になってから、ふと龍に、不幸を喰われたときのことを思い出した。

でも今は、そんな思い出話をしているときではない。

「あのさ、ありがとう。ここまで運んでくれたの、龍くんだね？」

圭太の第一声がそれだったことに、龍は驚いたように瞬いた。香苗のコンサートに無理やり連れて行つたあの時のように、頭ごなしに責められることを覚悟していたのかもしれない。

「ああ、うん」

気の抜けたような龍の返事に、圭太はこみ上げたように笑った。

しかしその笑みは、すぐに重い表情に変わる。

「龍くんはさ、悪くないよ。謝るのは俺のほうだ。ごめん、弱くて知らぬ間に俯いた圭太は、蒲団を握りしめていた。自分が弱いなんて、本当は口にしたくない。だけど、このままじゃ何も変わらないことも、ちゃんと分かっている。」

誰も何も発しない部屋はとにかく静かだった。まだ、蝉が鳴くにも早すぎる時期だ。耳鳴りだけが、静寂を破る。

ふと、耳鳴りじゃない音が混じった。人が、息を吐く音。

「——圭太、お前は決して弱くないよ。自分が弱いなんて過小評価しちゃだめだ。そう思ってしまうことは誰にでもあるけど、それはお前をより辛い状況にするだけだろう？」

「でも、俺……」

「お前は強い。俺は、そう思うよ。少なくとも、今までのストレス

を、お前はため込むだけで耐えてこられたんだ。俺みたいに発狂することもなかった。偉いよ、それは」

どうして龍は、こうまで圭太の欲しい言葉をくれるのだろう。ぎゅゅと締め付けらる胸が痛くて、だけどそれが心地いい痛みだから、圭太はごまかすようにベッドへ倒れた。

「いつかピアノ……弾けるかな」

「弾きたいか？」

「弾きたい。弾きたいんだ、もう一度。大好きだったから。弾いてる時が、一番幸せだったから。だから、やめることが一番辛かった」それ以上、龍は何も言わない。「弾けるよ」なんて気休めが、今の圭太に必要なことも分かっているのだ。腕で顔を覆って、圭太はただ思いに馳せた。

「……そういえば、どうして今日のはあんなに早く帰ってきたんだ？ 咲ちゃんの家へ行っていたんじゃないのか？」

その言葉にハツとする。そうだ、自分はそれを確認するために、急いでここへ帰ってきたのだ。

体を横向きにすれば、肘について僅かに起こした。圭太の慌てた様子に、龍はきょとんとしている。

「咲ちゃんち行ったとき、誰もいなくてさ。伎倉が勝手にドア開けちゃったんだ。……そしたら、中、びっくりするくらい荒れてて……で、俺、思ったんだけど……、やっぱりまいねちゃんが、不幸喰いなんじゃないの？」

それしか考えられなくて、圭太は必死に訴えた。その様子に龍もはじめは目を丸くしていたが、やがてゆっくり首を横に振る。

「何で！？ 咲ちゃんは、俺に言ったんだ。まいねちゃんがおまじないしてくれるから、大丈夫なんだ、って。それで、咲ちゃんは自分を不幸だと思ってなかったんだろ？ あの子が不幸を喰ってると思うないじゃん！」

「違うんだよ、圭太」

「何で！」

これで咲が救えると、圭太は心のどこかで思っていた。あの部屋を荒らしたのが本当に咲なのなら、こんなに悲しいことはないと思っただのだ。辛さを隠して自分に笑いかけてくれるあの少女が、暴れなくなるほど傷を抱える、こんな状況は。

シヨックを隠しきれない圭太に、龍はベッドから腰を上げた。圭太の胸の前あたりで、今度は床に腰を下ろす。すると、ほんの少しだけだが、龍の視線が低くなった。

「圭太がそう言ったとき、俺も先生も、その可能性を考えた。でもこの間、——ほら、俺と咲ちゃんとまいねちゃんが、一緒に帰ってきたとき——初めてまいねちゃんに会って、それはないと思った」「まいねちゃんが、いい子そうだから？」

「そんなことで判断しねえよ。ま、確かにいい子そうだったけどなでも違う。——あのな圭太。誰もかれもが不幸喰いになれるわけじゃないんだ」

とくん、とくん。あんなに興奮していた体が、心が、龍の放つ一声一声におさまっていった。今は、彼の話す言葉にただ聞き入っていく。

「不幸喰いは、満二十歳を超えた者だけに目覚める力だと言われている。あの時点で、俺たちはまいねちゃんの年齢を知らなかった。でも、彼女は咲ちゃんと同じ十二歳だ。不幸喰いじゃない」

「……」

そうだ。圭太だって、あの時点でまいねは咲より年上だと思っていた。龍も恭平も、ちゃんと圭太の疑問を調べてくれていたのだ。そしてそれは、思い違いに終わった。

「でも、だったら、誰なの？」

誰が、咲の不幸を喰っているのか。あの少女になんの恨みがあった、抱える不幸をよりひどいもの変えているのか。

まいねが不幸喰いであるほうが、まだよかった。まいねならば、勘違いしているだけだったかもしれない。それが咲の幸せだと、本気で信じていただけだったかもしれない。

だけど、それが判断力を培った大人の仕業なら、確実に悪意を持つての行動だ。まだ幼いあの少女を、不幸にすることだけが目的なのだといっても過言でない。

「それが分らないから、俺たちも困ってるんだ。咲ちゃんは、本来とても強い子だ。いじめに立ち向かう勇氣も、きつと持つてる。だからこそ一刻も早く不幸喰いを見つけて、やめさせなくちゃいけないだけだな」

「……本当に、まいねちゃんじゃないのかな」

「圭太、だからそれは……」

「だって、二十歳以上って、そう言われてるだけなんですよ？ 誰かがそれを証明したわけじゃないんでしょ？ 諦め悪いかもしれないけど、俺はかすかでもその可能性にかけたいよ！ まいねちゃんなら、きつとわかってくれる」

咲が大好きだと言ったまいね。だったら、確実に不幸喰いが存在するのなら、どうかまいねであってほしい。咲を恨む誰かなど、存在しないほしい。

「もう一回、もう一回だけ調べてみてよ。お願い。あの子を、咲ちゃんを助けてあげたいんだ。龍くんにならわかるでしょ？ 溜まり溜まったストレスは、あの子の人生を壊してしまう」

圭太には、咲の背後に幼き自分が見える。亜門に負けたことだけが理由じゃない。たくさん人間に蔑まれ、貶され、罵られ、圭太はピアノを続ける氣力を失った。圭太にはピアノという対象物があったけれど、いじめなんて抽象的な行為を受けている咲の行き着く先は、果たしていったい何なのだろう。

——咲は、けいたお兄ちゃんが大好きなんだよ。

あの言葉、本当は嬉しかったのだ。何もできていないだろう自分を、大好きだと言ってくれる咲。あの子は、此処に篠塚圭太が存在するのだと知ってくれている。

自分がいてもいなくても、何も変わらない世界。ましていなくても誰も氣がついてくれない世界を、圭太は嫌というほど知って

いた。そしてそれが、どんなにつらいかも。

龍だって、知っているはずだ。自分の望まないものばかりが存在する世界が、どんなに窮屈か。

ふわりと、額に何かが触れた。温かくて骨ばったそれは、圭太の額から頭にかけてを何度か往復し、やがて彼の体をベッドへと倒した。されるがままに横たわってからも、龍は圭太の頭を撫でるのをやめない。

「龍くん……」

「そうやってお前が一生懸命になるのは、いいことだよな。何でもため込む性格のくせに、話してくれるんだから大進歩だ。分ったよ。圭太、お前がそこまでして咲ちゃんを助けたいのなら、俺も精一杯力になる」

「うん」

どこか不安さをぬぐえない声音ながらも、圭太ははっきりと頷いた。龍ならわかってくれると、信じた通りだ。

彼が頭を撫でる手が心地よくて、圭太の視界はだんだんとまどろんだ。

「龍くん……、ありがとね。俺、龍くんに会えてよかったよ」

「俺だけかよ？　だったらまだまだお前はガキだな。親のありがたさが分かるようになってから、そういうこと言え」

「褒めてんだから、まずは礼くらい言えよ」

苦笑じみた笑いを零してから、圭太はゆっくり目を閉じる。不幸を喰われた時のあの感覚と、似ていて違う。だけど今のほうが確実に、圭太の心は安堵感に満ちていた。

真っ暗な世界は不安で、怖くて、息苦しくて、嫌いだ。でも、光のある世界も嫌いだ。笑っている人が羨ましい。愛する人と共にいられる人が羨ましい。羨望で、そんな世界は圭太には歪んで見えた。でも今、圭太には龍がいる。龍は、圭太を暗闇から救い出してくれる存在だ。ほんの一瞬で、圭太の世界に光をとめてくれる。

そして彼と一緒になら、圭太は笑うことができる。大好きな人と、

一緒にいることができる。

——お前は強い。俺は、そう思うよ。

幸せって、こういうことなのかな。

不幸を喰われたあの日以来だと言えるほど安心した心地で、圭太はそのまま眠りに落ちた。

5 愛するすべての人へ

朝、部屋に差し込む日差しが圭太の脳を覚醒へと誘った。やがて目覚ましが鳴り、圭太は完全に目を醒ます。

体を起こそうとして目を剥いた。蒲団が重いと思ったら、龍が圭太の脇で眠っていたのだ。昨日からずっと、彼は自分についていてくれていたのか？

「りゅ、龍くん」

「ん……？」

起こされることに不満そうな声を発しながら、龍の体はむくりと持ち上がった。朝は弱いのか、眠たげに眼をこすっている。まだ眠り眼の龍の様子が思いのほか可愛くて、圭太はついくすりと笑ってしまう。

「龍くん、もう朝だよ」

「……んで、ここに圭太がいるんだよ？」

「いやあのね、ここ、俺の部屋」

「は……？」

言葉の意味を理解するなり、龍は確かめるようにあたりを見回している。「ああ、そうだ」などと一人ではやく声も時折混じった。

「ずっとここにいてくれたの？」

「いや、お前が寝てすぐは、一回先生んとこ行っただよ。それでまた戻った」

真つ暗な部屋に、圭太を一人にするのが不安だったのだろう。龍のおかげで安定しつつあったとはいえ、一度は意識障害を起こした体が、そう簡単に孤独や闇を受け入れないと思ったのだ。もしかしたら、恭平がそう指示したのかもしれないが。

「父さんと、何話した？」

「先生が知っている不幸喰いのこと。全部、お互いの知識絞り出ししてみた。でもやっぱり、二十歳以下の不幸喰いについては分らなく

て……」

「……まいねちゃんが不幸喰いである可能性は低いんだ」

「だけど、そうすればつじつまが合うことも少くないんだ。先生も、異例の可能性がないわけじゃないって言っていたし。だから今日、まいねちゃんに会って、話してこようと思う」

「不幸喰いのことを？」

と尋ねると、龍は頷いた。途端に圭太の表情が不安に染まる。

「でも、いいの？　なんか、不幸喰い会の掟で、第三者にその存在を明かしちゃいけないとかあるんじゃない？」

テレビの見過ぎとしか取れないような圭太の言葉に、龍はおかしそうに笑った。ベッドを支えにして、立ち上がる。

「そんなん、あつたらお前にばれた時点でアウトだろうが」

あ、そっか。バカな質問だったかと、圭太は照れ臭そうに頭を掻いた。そして立ち上がる龍を合図にすれば、自分も蒲団から出て隣に立った。

「学校行くのか？　本調子じゃないなら、一時間くらい遅刻してもいいって先生が言ってたぞ」

遅刻というのが父らしくて、つい苦笑が漏れる。しかし、体は案外すつきりしていた。

「平気。どうせ午前中で終わるんだし、行くよ。……それに、今日は龍くんも頑張ってくれるんでしょ？」

素直な笑みを浮かべてそう訊ねた。当の龍は、困ったように笑い返す。

「俺だけじゃねえよ。先生だって、空き時間に不幸喰いについて調べてくれるって言ってた。それに、あの香苗^{かなえ}って子だって、昨日頼んだ楽譜の曲、バイオリンで弾いてくれるって言ってくれたよ」

「へえ、伎倉^{きくら}まで？　みんな咲ちゃんのこと心配してくれてるんだね」

「バカ。お前のためだろうが」

「え？」

意外すぎる返答に目を剥いて、圭太の体はピタリと動きを止めた。先に扉に手をかけていた龍が、何の気なしに振り返って溜息をつく。「先生はもちろん、仕事の一環てのもあるよ。だけど、お前が何より親身になって調べようとしているから、みんな協力的に動いてくれるんだ。咲ちゃんさきより、誰もがお前を優先してる。家族だし、友達なんだからな」

それは嬉しいような照れくさいような、くすぐったい感覚だった。みんなが圭太のことを心配してくれていたのは分かっていたが、こっちはつきり言われると、困る。

素直に感謝の意を表せられなくて困るから、圭太は戸惑うように笑った。

その日の放課後、圭太は香苗に会おうと音楽科教室のある塔まで向かった。だけど、幾距離が進めばもういろんな楽器の音が聴こえてきて、結局それ以上は先に行けなかった。

仕方ないから、校門で待とうと靴を履きかえ、玄関を出たところでまた立ち止まる。

見覚えのある車が、学校の敷地の中にいた。圭太の学校にはバス停も完備されているため、駐車場を含めた前庭の敷地が広く、生徒を迎えに来る親たちも入ってくる事ができる。それに混じって、雪華ゆきかの車があった。

たまたま同じ車なだけかもしれない。だけど、このエンジン音は、きつと紛れもない。

嫌な汗が背中を流れた。気付かないふりをしよう。用があるのが自分とは限らない、と、車を横切ろうとしたとき。

「圭太くん」

開いた窓から、雪華の声が圭太を呼んだ。

「……あ、どうも」

「これから、用事とかあるのかしら？　よかつたら乗らない？　今から咲たちを迎えに行くから、そのあと一緒に遊んでくれないかと思つて」

「今日、お仕事は……？」

「休みなの。ね？　行きましよう？」

「俺、人待つてるんです」

なんとかやんわりと断ろうとしているのに、雪華はなかなか諦めてくれなかった。

だったら、その人も一緒に。咲があなたにすぐ会いたがつているの。お願い。

と、言葉巧みに言い寄ってくる。

だけど圭太も、このまま雪華を迎えに行かれては困るのだと気がつくのだった。

龍が、まいねに話すと言っていた。ならば放課後を狙うはずだ。

雪華を迎えに行かれては、龍とまいねの接触が図れない。

「分かりました。あの、寄ってほしいところがあるんですけど、いいですか？」

「昨日は、すぐに帰っちゃったそうね」

圭太が車に乗り込み、学校を出たところで、雪華がそう口を開いた。

そういえば。後がごたごたしすぎて忘れていた。

「すみません。……急用、できちゃつて。家にも誰もいなかったし」

「ええ、まいねから聞いているわ。家が荒れているのも見たのよね。驚いたでしょう？」

「……まあ」

驚いた、で雪華は済ませられるのか。自分の娘が、発狂するほど傷ついたというのに。

「雪華さんは……、咲ちゃんのいじめがなくなるように動かないんですか？」

思えば、咲が誰にいじめられているのかも、どういう風にいじめられているのかも、圭太は知らない。でも雪華は母親だ。いじめがなくなるように、学校にかけあたりだってしているのではないのだろうか。

「そうね……。あ、寄ってほしい所ってどこ？」

はぐらかした。直感でそう思った。どうしてだろう。雪華は咲を心配していると、確かにそう思うこともあるのに、思わないことのほうが多いのは。

しかし、寄ってほしいところと言ったのは口から出まかせ。できるだけ小学校につくのを遅らせたかったからだ。行き先が思いつかなくて困っていると、

「わたしも、寄りたいところがあるの」

そう言うなり、雪華はハンドルを切って小学校とは違う道へと入って行った。突然運転が雑になるから、圭太はドア側のひじ掛けに身を寄せる。

「ちよっ……。どこ行くんですか？」

「どうしても、あなたと行きたかったところよ」

圭太は顔をしかめる。何かがおかしいと、本能が叫んだ。雪華が、圭太をほかの人より特別な目で見ていることは感じていた。でも、それは恋い焦がれる感情とは違うと思う。

——あなたは、わたしが亡くした夫によく似ているから。

……。何が？

何かが頭に引っかかる。けどその何かが分かる前に、車が止まった。ゆっくりあたりを見回すと、そこは公園のようだ。

人が集まる大きな公園ではない。ブランコとジャングルジムと滑り台があるだけの、小さな公園。

雪華が車から降りたので、圭太も後に続いた。何も言わない彼女が、奇妙だった。

ブランコに手をかけて、雪華が空を仰ぐ。

もう夏が近い。太陽は高く、綿をちぎったような雲がわずかに、

空間を占める青の邪魔をしていた。

「ここね、夫とよく来た公園なの。夜には星がよく見えるから、わたしたちはそれを楽しみにしていたわ」

「……なんで、そこへ俺と……？」

「言っただしょう？ あなたは夫によく似てる」

だから来た、というのでは、あまりにも納得がかなかった。だいたい、ここは田舎でもないが都会でもなく、夜になればどこにいてもそれなりに星は見えるはずだ。それなのに、こんな大通りから外れた人気のない公園へ、わざわざ赴いていたのか？

「そういう場所へは、俺でなく咲ちゃんを連れてきたらどうですか？」

「咲は、もう少し大きくなったら連れてくるわ」

ふと、気が重くなってきた。何なのだろう。どうしてこうも、彼女のそばは居心地が悪いのか。

「あの、俺の用事はいいです。大したものじゃないから。だから、はやく咲ちゃん達を迎えに行きませんか？」

「ねえ、ここをどう思う？ とてもいい場所だと思わない？ とても気持ちいい風が吹いているでしょう？」

圭太の声などまるで届いていないように、雪華はうつとりと話し続けた。なんだか妙に口が渴いて、圭太はごくりと唾を飲む。

そうか。この場所。この場所が、よけいに圭太の気分を鬱にさせているのだ。とてもじゃないが、ここは“気持ち悪い”。

「あの、龍くんが、咲ちゃんの不幸の元凶を取り払おうとしてくれます。あとはいじめがなくなれば、咲ちゃんはきっと大丈夫です。だから、だから行きましょう？」

「何言ってるの？ 圭太くんたら。咲は不幸なんかじゃないわ。あの子は、とても幸せな子。だってわたしの娘だし、そばにまいねだっているんだから」

「は……？」

振り返った雪華の瞳は、キラキラと光っていた。

この人…… イッてる。

「あの、雪華さん……、父さんの所に……」

「初めて会ったときから、あなたはあの人に似ていると思っていた。優しくて、優しくて、愚かなその心。咲の友達になってくれてありがとう。今度は、わたしがあなたを癒してあげる」

じりじりと、圭太へと近づいてくる。心臓が鳴った。ドクン。いや違う。そんな易しい音じゃなくて、もっと生々しい、自分の危機に警報を鳴らす、音。

もっと早く、どうして龍に相談しなかったのかと、圭太は後悔した。不幸に打ち勝てなかったのは、咲じゃない。雪華だ。

夫を亡くした傷。咲がいじめられているという戸惑い。二人の少女を養わなくてはならない負荷。そのすべてが、彼女の心をどん底に落としていた。

「あの、俺は大丈夫ですから、雪華さんこそ……、父さんや龍さんと、話をしたらどうですか？」

「篠塚先生や柳沢先生のこと？ あの二人はいいわ。たいした傷を負っていないもの」

雪華の言葉の意味が分からず、圭太は顔をしかめる。じりじりと彼女が近づいてくる分だけ、後ろに下がった。

ポケットを探って、携帯を探す。しかし、鞆ごと雪華の車においでしてしまったようだ。

走れば逃げられる距離にあるのに、足が震えて、後ずさるのがやっつと。情けないけれど、結局圭太の力など、その程度だった。

「まいねちゃん」

校門から出てくるまいねを視界に止めれば、龍は真っ先に呼びとめた。隣の咲は、今日は目の端だ。

「こんにちは」

相変わらず礼儀正しい挨拶が返ってくる。龍も同じ言葉を返して、咲を見た。

「まいねちゃんと話がしたいんだ。咲ちゃんも近くにいてくれていいけど、できたら聞かないでほしい。ダメかな？」

「いいよ。いつも咲の話、先生と一緒にきいてくれるもんね」

まいねと似ていて気さくだが、それとは違って無邪気な返答だった。いつ会っても、この少女は明るい。

学校は咲が嫌だろうと思い、龍は二人を車に乗せた。それで篠塚病院まで移動して、院内にある資料室にまいねを入れる。咲は、看護婦たちに相手をしてもらうことにした。

「何か飲む？ ああ、でもここ、熱いのしかないんだ。看護婦さんに頼もうか」

「大丈夫です。何ですか？ 話つて。咲のこと？」

賢い少女は、何も言わなくても龍が戸惑っていることを感づいている。

だけど、「君は不幸喰いなのか？」などと、安易には聞けないのだ。別に、不幸喰い会の掟があるわけではないが。

「うん、じゃあ、ここ掛けて」

恭平の椅子を引っ張って、龍の椅子の前に置いた。向かい合う形になったその椅子に、まいねを座らせる。

ちよこんと座った少女は、丸い目を不思議そうに瞬かせていた。

「今日は、いい天気だね」

「そうだね」

「……君は、ご両親がいないんだよね」

「うん。……でも、大丈夫！ あたしには咲もおばさんもいるから一瞬の悲しそうな顔はかき消して、まいねはにこりと笑った。確かに、彼女の不幸はそう多くない。

「でも、咲ちゃんはあまり幸せそうじゃないね」

「いじめがなくなれば、もっと幸せになるよ。それに咲には、あなたのおまじないがあるから、きっと大丈夫」

「おまじないって、何？」

途端にまいねは口を閉ざした。それが余計に、龍の予感を確信に近づける。

「違うなら、違うと言ってくれて構わない。でもまいねちゃん、ひよつとして君には、人の不幸が見えるのか？」

「不幸……？ あたしが見えるのはオーラだよ。人のオーラ。傷ついている人は、とっても光ったオーラをしてる」

それが、不幸が見えるということだ。普通にオーラが見えるのなら、不幸な人ほど光ってなんていないだろう。

あとの切り返しに困りながら、龍はまいねをじっと見た。不幸が見えるということは、

「……不幸喰いを、知ってる？」

「お兄ちゃんは、知ってるの？」

「俺は、不幸喰いだ」

まいねが、長い髪を耳にかけた。首を掻いたり、ちらちらと龍を見たりする。戸惑っているのだろう。

「君は、不幸喰いなのか？」

「……みんなは、そんな力ないの。変な力。お兄ちゃんも持つてるの？ 本当に？」

「本当だよ。……圭太お兄ちゃん、すつごく光ってるだろ？」

少女がうなずく。圭太のことを割合に出せば、認めざるを得ないだろう。彼の不幸の具合は、尋常じゃないから。

「まいねちゃんは、不幸喰いなんだね？ そして、咲ちゃんの不幸を喰っているんだね？」

「そしたら、咲は幸せになるから」

圭太の言うとおりだ。この少女は、不幸喰いが相手を幸せにするのだと信じているらしい。無理もない。不幸喰いの在り方は、この幼い少女にはまだ難しいはずだ。

「まいねちゃん、不幸喰いはね、むやみやたらに人の不幸を喰ってはいけないんだ。それは相手を幸せにはしない。より不幸にする」

教えてやらねばならないと思った。知らないのなら、知っている人間が。大人の不幸喰いが。しかし、今まで素直だった少女は、途端に頑なになる。

「違うよ、不幸喰いは、不幸を食べてあげる分だけ、相手を幸せにするの。咲はあたしを、必要だって言ったよ。おまじないが、必要だって。だからあたしは食べてあげるの。だってそうでしょ？ 不幸なんて、持たないほうが幸せでしょ」

確かに、安易に考えたらそうだろう。不幸を喰われるということ、その体内から傷がなくなり、痛みが消える。まいねの言うことは正しい。理屈では。

「そうじゃない。不幸を喰われてしまえば、たしかにそのときは幸せかもしれない。自分を痛めていたのもが、すっかり無くなるんだからね。でも、無くなったら心は元の弱いままだ」

「分かんないっ！」

まいねは耳をふさいだ。これまで信じてきたものが違うといわれるのは、辛いだろう。

「まいねちゃん、ちゃんと聞いてほしい。不幸を喰われた後の人間は、冷凍庫に入れた水を氷になる前に取り出すのと同じなんだ。水は寒さに耐えて硬い氷に変わる。でもそれを邪魔したら、水は水のままだ。あつという間に流れてしまっ、弱い心のままなんだ」

「ちがう……」

「違わないよ。事実、咲ちゃんは暴れたんだろう？ それは、彼女の心がまだ水のままだからだ」

「ちがうっ！」

聞きたくないと、まいねは耳をふさいだまま頭かぶりを振った。ダメだ、もつと、ちゃんと、言わなくては。

「咲ちゃんを幸せにしたいなら、もつと他の方法を考えよう？ 俺も協力する。不幸を喰うのは、まいねちゃんにとっても好きなことかもしれないけど、少し我慢しようよ。できるだろ」

「ちがう……、ちがうのおっ！」

その様子に、龍は目を細めた。違う？
何が。

「まだ、俺の言うこと……信じれくない？」

「そうじゃ、そうじゃなくて……」

ついにまいねは泣き出した。遠慮もなく嗚咽をあげて、子供の泣き方だ。

龍は辛抱強く待った。無理に泣きやませる必要はない。とことん待てるだけの精神を、龍も今日までの学習で身につけている。

やがて涙が収まってきた少女は、ずっと待ち続けてくれる龍に妥協したように、話した。

「ち……がうの。咲じゃ、咲じゃないの。部屋をあんな風にしたのは、咲じゃない」

「え？」

わずかに眉をしかめて、問い返す。

咲じゃない。

「誰が……」

「おばさんが、やったの。あたし、毎日咲におまじないしてるから、あの日も咲、ぐっすり寝て。仕事から帰ってきたおばさんが、部屋をめちゃくちゃにした。あたしは起きちゃって……、そしたらおばさん、これは咲がやったことにする、って」

それだけ報告するだけでも、まいねにとってはかなりの勇気が要ったのだろう。耐え切れなくなったように、また涙を流し始めた。

だけど理解ができなくて、涙するまいねを怪訝に見つめることしか、龍にはできなかった。

つまり、雪華は何がしたかったのか。

そう、一番大事なものを見落としていたのは、龍も同じだったのだ。

「おばさんね、あたしは咲を幸せにできるって言うてくれたの。おまじないをすれば、咲はどんどん幸せになるって」

「え？」

「だから、あたし」

「ちょ、ちよつと待つて。小柴^{こしば}さん……お婆さんは、君が不幸喰いだと知っていたのか？」

嫌な予感がした。じつとりと、背中と掌が汗ばむ。

だけど無情にも、まいねはすんなりと頷いた。

「まいねに不幸喰いのことを教えてくれたのは、全部お婆さん」

呆然と椅子の背もたれに体重を預ける。ギギツと音がしても、かまっていられなかった。

雪華が、咲を不幸にすることを望んでいた？ でも、まいねにやらせたのは何でだ？

「お婆さんは、不幸喰いじゃないのか？」

「不幸喰いだよ」

さも当たり前だというように、まいねは言った。たしかにそうだ。不幸喰いのことを知っているならば、相手も不幸喰い。力なくしてその存在を知っているものなど、かなり珍しい。

たぶん、恭平は律子にそんなこと話していないし、圭太も、自分が不幸を喰ってしまったわけなければ、わざわざ正体を明かしたりはしなかっただろう。

それだけ、圭太は貴重な存在だった。

「だったら、どうしてお婆さんは咲ちゃんの不幸を……おまじないをしなかったんだと思う？ 不幸って、おいしいものだろう？ 俺だったら、まいねちゃんにさせずに自分でするな」

不幸をおいしいと表現するのは、かなりの嫌悪感があつた。だけど、誘導尋問のようなことをしてでも、聞かなくてはならない。

案の定、まいねは龍の欲しい答えをくれた。

「お婆さんには、ほかに幸せにしたい人がいるんだって。それまでは、お婆さんがずっと咲におまじないしてたんだよ。咲が寝ている間だから、あたし以外知らないと思うけど。あたしがおまじないをするようになったのは、最近なの」

「幸せにしたい人？」

「うん。けいたお兄ちゃん」

「——っ!？」

世界が、凍りついたのかと思った。

そのくらい、龍の体は冷え切ったのだ。一瞬で。

圭太。彼の不幸は、尋常じゃない。それは、もう何度も思ってたことだ。だから、分かっている。不幸喰いにはその力を私的に悪用するやつがいて、圭太はそういう者にとって格好の獲物であるただけ、どうして、油断していたのか。

咲の近くに不幸喰いがあると、分かっていたのに。だから、圭太に関わらせまいとしていたのに。

「おばさんは……何か言ってた？ 最近、圭太のことで」

「……ダメだって、言ってた。今のけいたお兄ちゃんは、ダメだって。早く、助けてあげなくちゃって」

「言ってたのか？」

思わず身を乗り出した。あまりの剣幕にまいねはびくりと肩を震わせ、やがて頷く。

このとき、初めて龍に焦りが生まれた。圭太、そういえば、帰りが遅くはないだろうか。

「他に……、他には！」

「え、えつと……、」

「どこで圭太に会ったとか、不幸を喰う場所とか、何でもいいんだ」必死に訴える龍を見て、まいねも必死に考えてくれているようだった。しかし、雪華はなにも漏らしはしなかったのか、なかなか思わしい答えが返ってくることはない。

そうしていたら、急にドアが叩かれた。ノックに返事をする前に、ドアを開いた恭平が入室してくる。

「龍くん、分かったよ。万人に一人の確率で、二十歳以下の不幸喰いが生まれる。だけどその場合は、必ず血縁者に不幸喰いがいるらしい——」

まいねがいることに、そこまで話してから気がついた恭平は、

まずった、と顔をしかめた。

すかさず龍が助け船を出す。

「彼女も、不幸喰いでした」

「……君が」

万人に一人の可能性を目にして、恭平は狼狽しているようだった。ただ、問題はそこではない。

「そして、小柴さんも不幸喰いだそうです」

「血縁者か……。そうだね、彼女も……」

「圭太を狙っています」

サツと、恭平の顔が青ざめる。

「圭ちゃん……、帰ってきたか？」

「まだだと思えます」

嫌な予感、恭平にもあるらしい。あわてて携帯を出して、圭太に連絡を取る。

しかしどれだけコールを待っても、圭太は電話に出ないようだった。

「先生、伎倉さんに。あの子なら、圭太が学校にいるか分かるかもしれない」

「ああ、うん」

わずかに震える手を叱咤して、恭平は香苗に電話をかけ直す。ただ見守るしかできない龍も、汗ばむ掌を力強く握った。

「香苗ちゃん？ 篠塚です。うん、よかった、番号変わってなくてあの、今どこかな？ ——……うん、圭ちゃんに会った？ え、うん。うん。……そうか、わかった」

恭平が電話を切れば、間髪入れずに龍は口を開く。
「なんて」

「圭ちゃんには、会っていないらしい。今ちよつど学校を出るところで、圭ちゃんの靴はもうなかった」

「何やってんだ、あいつ」

怒りは、ほんの少し圭太にも向いた。どうして、何かあるなら自

分に相談しないのだろう。雪華に対する圭太の態度、おかしかった。分かっていたのだ。雪華が自分に、決して“きれいではない感情”を向けていること。

「……一回」

油断していれば聞き逃しそうなくらいか細い声が、耳に届いた。言うべきか悩んでいるように、まいねはぎこちなく言葉を紡いでいく。

「一回だけ、おばさんに連れて行ってもらったところ、がある。すごく不幸が充満している場所。おばさんの一番好きな場所」

「それってどこ？」

恭平がたずねた。口調はゆっくりだが、焦っていることが分かる。今彼らの念頭にあるのは、たった一つ。

圭太。

圭太が後ずさる速度より、雪華が寄ってくるスピードのほうが確実に早かった。特に、後ろ歩きになってしまいう圭太は時折足がもつれて、油断したら転びそうになる。

そうになったら、終わりだ。

この人に、何ができる。自分の方が力でも体格でも勝^{まさ}っているというのに。そう思うのに、体が逃げた。

「あの、俺、本当に大丈夫ですから」

「そうね、あなたはこの頃、とても元気そう。でも困るのよ。もっと不幸でいてくれなくちゃ」

ゾク。鳥肌が立った。

何なんだ、何なんだよ。

この人は、俺に何を望んでいるんだ。

「圭太くん。わたし、あなたが好きよ。あなたはあの人によく似てる。あなたなら、必ずわたしを幸せにしてくれる。そして、あなたを幸せにできるのも、わたしだけだわ」

雪華が足を速めた。ビクツと背筋を震わせて、圭太も速度を上げようとする。だけどそれが無理な動きだったのか、足がもつれた。

がくんと、いつもより重い重力を感じたが、転ばなかった。両腕を、雪華が掴んでくれたのだ。

しかしそれは嬉しい事態ではない。掴んだ腕を、雪華は自分の方に引いた。体が今度は前のめりになって、急に雪華の顔が近くなる。

「——っ、やめろっ！」

火事場の馬鹿力というやつか、ここにきて圭太は、ようやく彼女の体を引き離すことができた。しかしそれは加減を知らず、勢いよく振り払われた雪華は、地面に尻もちをつく。

「あ、ごめんなさ——」

うつむいた雪華の表情は分からない。だけどそれよりも、圭太は

見てはいけないものを見てしまった。

否、見たくなかったもの、だ。

今日の雪華はスカートだった。それが転んだ拍子にめくれあがり、白い太ももが目に入る。だから、一際目立った。

赤茶色い痣。花火のような、シロツメクサのような形。龍の肩と、恭平の背中にあるものと、確かに同じそれは――……

「不幸……喰い」

「知っていたの？」

唐突に雪華の声が混じってきて、びっくりとした。その顔に視線を移せば、転んだ拍子にそうなったのだろう、いつもはきれいな髪を乱してこちらを見ている。見ているのに、焦点が合っていない。

「だったら話が早いわ。あなたの不幸を食べたいの。ねえ、圭太くん、そうすればあなたも、今より幸せになれるのよ」

立ち上がった雪華が、またこちらへと歩みを進めてくる。

——不幸喰いだって、いい人間ばかりじゃない。

自分の欲のためだけに、人の不幸を喰らう人間もいると、そういうことか。

なら……

「咲ちゃんの不幸を喰っていたのは、あなたなんですか？」

「そう、初めはね。でも今は違うわ。まいね……あの子にも不幸喰いの力があつたの。とても異例なことらしいけど、ありえないことじゃないんですって」

まるで何でもないことのように言いわけから、本当に何でもないのだと思えてくる。でも、それは重大な間違いだと、さすがに圭太にも分かった。

ありえないことでなくとも、あの少女に、不幸喰いの在り方を一人で理解できるものか。

「あなたが近くいたのは、そういうことのためじゃないんじゃないですか？ まいねちゃんが不幸喰いなら、彼女にその力がどういうものか、ちゃんと教えるべきだ！」

「教えたわ。不幸喰いは、不幸を喰うことで相手を幸せにすると。心から不幸を失えば、幸せに決まっているでしょう？」

「違う！」

違う、違う。そうではない。

たしかに不幸なんてない方がいい。しかし、《持たない》のと《失う》のは違う。それは、決して相手を幸せにはしない。

「あなたは、それに気が付いていたはずだ。咲ちゃんが不幸を喰われて、一度でも幸せそうでしたか？ 毎日同じ地獄を繰り返して、それは初めていじめにあった日を何度も繰り返すのと同じだと、本当は気が付いていたんじゃないんですかつ！」

龍のおかげで、圭太の心は日々癒された。だけど、それでもピアノの音に心が拒否反応を起こしたのだ。痛みを乗り越えるのは、簡単じゃない。そして咲は、いつまでもその段階へは踏み込めないのだ。

雪華の足が止まった。もう圭太も、逃げようとはしない。なんとなくでも、分かってもらわなくては。

「ええ、そうね」

ふと雪華が目を伏せる。

届いたのだ、と思った。一気に肩の力が抜ける。たとえ不幸喰いでも、雪華は咲の母親だ。娘の幸せを、願わないはずはない。

ぐらり、と雪華の体がゆらめく。倒れるのかと思った。慌てて支えようとするが、それは失敗する。

太ももに激痛が走った。

「う……、ああっ！」

立っていられず崩れ落ちる。そこに、カッターがザツクリと刺さっていた。

「いつ……くっ」

一気に体温が上がって、涙がこみ上げた。こんな痛み、知らない。いったいどこまでカッターが刺さっているのかわからない。荒い息を繰り返していたら、雪華が笑った。

「痛い？ 痛いよね。ふふ、あははっ！ 今のあなた、すごい不幸よ。——ねえ、それ、わたしに食べてほしくない？ そうしたら、その痛みからも解放されるわ」

正直、その言葉には惹かれた。この痛みから解放されるなら、いつそ不幸を喰ってもらった方が楽だろう。押さえた足から、血が溢れてきた。

「ほら、圭太くん。言ってみなさいな。僕の不幸を食べてくださいって」

この女は、異常だ。

自分の娘の幸せなど、かけらも見えてはいない。雪華の世界に存在するのは、限らない不幸をまとった圭太だけだ。

足の痛みを意識が朦朧とした。でも少し動かすだけで激痛が走って、また現実へと引き戻される。

不幸を、喰ってください。

たったそれだけで解放される。痛くなくなる。だったら言ってみればいい。こんな短い言葉、きつと数秒で紡げる。

でも。

脳裏に浮かんだのは龍だった。恭平だった、香苗だった。そして……律子だった。

自分を不幸にした者たち。だけど、何より圭太が愛している者たち。どんなに邪険でも、うるさくても、喧嘩しても、嫌いになどない。

ごめんね母さん。五年前のあの日、大嫌いなんて言って。

不幸を喰われることは、麻薬を服用するも同じこと。だったらそれを圭太から望んでしまうのは、みんなを裏切るに等しい。

そんなことできない。したくない。この痛みに耐えれば、きつともっと、俺は強くなれる。

でも、いつまで耐えればいいのか？ このままでいても、やがて不幸を喰われてしまう。誰かが助けてくれるわけではない。

「なかなか意地っ張りね、あなた。でも、そうね。待とうかしら？

そうやって耐えてくれた方が、たくさん不幸を抱えてくれるし、もつと素直に靡いてくれたら、こんなに痛い思いしなくて済んだのにね」

「あんた……一応、人妻じゃん」

「あら、それが理由？　じゃあ独身だったら靡いてくれたのかしら？」

圭太は答えなかった。あながち間違いじゃない。危険なときもあったのだ。

「そうね……、でもあの人も、あなたに負けてなかったから」

「は……？」

「あの人も、すごく不幸ストレスを溜めやすい体質だったわ。毎日会社で不幸を背負って帰ってきてくれて。それを食べるのがわたしの一番の楽しみだった。まさかあんなに早く、死んでしまうとは思わなかったけど」

「待って……。あんた、旦那の不幸も、喰って……たのか？」

うつとりと話す雪華。痛みとショックで、圭太は頭痛まで覚え始める。それと同時にピンときた。

——あなたはわたしの夫によく似てる——。

《不幸》が。

そうか、そういうことだったんだ。すべての疑問が、一つの筋となつて繋がった。

この人は、俺だけじゃない。不幸を抱えやすい人間、大きな不幸を抱えている人間をこうやって喰らってきたのだ。きつと、今までも。

この公園に人一人通らないのもそのためだ。いつか龍が、圭太に言った。

病院の裏庭。ここにいると嫌な気分にならないか、と。ここに充滿みみしているのはお前の不幸だもんな、と。

この公園に充滿みみしているのは、雪華がここへ連れ、喰った人間の不幸だ。

そして

——咲は、もう少し大きくなったら連れてくるわ。

なんてことだ。夫の不幸だけでなく、この女は

「咲ちゃんをもっと不幸にして、それも喰うつもりなのか？ あんたは？」

「賢い子。好きじゃないけど、まあいいわ。もっといろんなこと考えて。そして、もっと不幸でいっぱいになって」

嬉しそうに、本当に嬉しそうに笑うから、吐き気がした。どうして……、どうして、どうして！

「あんたのせいだ！」

叫んだ。香苗に怒鳴りつけたときと同じように。比べようにならない怒りと、悔しさと、齒痒さを込めて。

「全部、全部あんたのせいだ！ 咲ちゃんが不幸なものも、まいねちゃんの間違った方に進んでしまうのも。あんたの夫が死んだのも——
——」

そこまで言ってから、ハツとした。これは言葉のあやだ。言いすぎた。

しかし見上げた雪華は、どんよりとした瞳の色でこちらを見下ろしていた。シヨックとか、そういう表情ではない。むしろ、「うるさい」と言いたげだった。だから、思う。

「本当に……？」

「ひとりで死ねない、弱い人間よ。わたしの弟たちを道連れにしたの」

「あんたのせいだと、気づいていたんだ」

「そうね。事実彼は、わたしのことを魔女だと言ったわ。だけど、わたしを殺すのが怖いからって、弟を道連れにしたのは許せない。たった二人の姉弟だったのに。だから、まいねが不幸喰いなのは運命だと思っの。弟がわたしに残してくれた、ね」

娘より、姪が可愛いということか。たしかにそうでなくては、わざわざまいねに不幸を譲りはしないだろう。

「圭太くん、わたしはずっとあなたを見ていたのよ。偶然道で見かけただけだったけれど、とてもあなたに惹かれたの。咲がいじめられているのは、言うなればあなたのせいね」

そう言いながら、雪華は圭太の傍らにしゃがみこんだ。足に刺さっているカッターを、容赦なく引き抜く。

「うわあああああつ！」

刺された時よりも、激しい痛みだった。カッターが止めていた血が溢れ出す。

ドクドク、ドクドク。脈動に合わせて、血が溢れる量も上下した。「あなたが現れなければ、わざわざわたしが咲をいじめられるよう仕向けなくてもよかったのに。小学生ってね、残酷よ。少しみすばらしい格好をしていたり、変な言動をしたりするだけでいじめの対象になるの。だから咲をそうするのも、簡単だったわ」

途切れ途切れに雪華の声が届く。それは大変腹立たいもののなに、出血をおさえて意識を失わないよう努めるだけで、圭太は精一杯だった。

「さあ、圭太くん。わたしのものになって」

体をわずかに動かして、圭太の顎を固定する。わざと、刺した足を掴んだ。

「あああつ！ あ……はあつ！」

「痛いのか？ 苦しいのね。今楽にしてあげるわ。本当は、あなたから言って欲しかったんだけど」

「……っ、りゅう、くん」

助けを求めた声は、どうしようもなく掠れた。涙があふれてくる。これは痛みと、恐怖に。

「りゅうくん、りゅう……」

「あの男なのね」

突然、低さを増した雪華の声。ドスが利いている、というのだろうか。だけどそれは凄むというより、冷めた声音だ。

荒い息を抑えられぬまま、顔をあげた。血走った雪華の目が、射

るように圭太を見る。

目で人を殺せる。そう思った。

「あの男が、あなたの救いなね。だったら今度はそのカッター、あの男の胸に突き立ててくるわ」

「……っ！」

固定された顔を必死に動かして、首を横に振った。小刻みな動作にしかならなかったが、とりあえず伝わったようで、雪華が目を細める。

「あなたの不幸、日に日に減っていった。誰かに喰わせているのかと思っていたけど、そう。あの男なの」

「ち……がう」

「あの男が好きなの？ あなたも男の子なのに？」

「ちがう……っ」

「違うのに不幸を喰わせるの？ カウンセラーには不幸喰いが多いって言うから、あの中にも一人くらいいるとは思っていたのよ」

「くわれて、なんか……ない」

雪華の視線が、その言葉を訝った。圭太の不幸を前にして、喰わない人間などいないと思っているのだろう。

一方、圭太自身はもう意識を失いそうなくらい衰弱してきていた。そうなつては面白くないと小さく呟いて、圭太の顔に自分の顔を近づける。もう、抵抗する力はなかった。

一瞬、唇が触れる。

「圭太っ！」

その声にハツとしたのは、圭太ではなかった。雪華が、顔を離して声の方を見る。そこには、息を切らせた龍がいた。

「何で、あなた……」

「っ、どけ！」

雪華の声になど構うことなく、龍はその体を押しのけて、圭太の正面に立つ。

圭太のぼんやりとした表情は、涙でぐちゃぐちゃだった。それでも

無事だったことにホツとし、今度は足もとにぬめりを感じて、龍は怪我に気がついたようだ。

「大丈夫、圭太、大丈夫だ。傷は深くないから。血が多いただけ。大丈夫だ」

圭太、圭太、圭太。何度も名前を呼んでくれる。圭太が、自分を見失わないように。

ここにいる。篠塚圭太は、龍の前にもちゃんと存在する。そして、圭太の前にも。

「りゅう、くん……、どうして」

ここが分かったのかと。言葉にならなかった問いは、察した龍がひとりでに答えてくれる。おもむろに脱いだシャツを、圭太の足の根元にきつく巻きつけながら。

「まいねちゃんが教えてくれた。一度、ここにも連れてきてもらったことがあるって。だけど場所まで正確じゃなかったし、道せまいから、結構走った」

ポタリと、新しい涙が流れた。誰も助けなんて来ないと思っていたから、嬉しくてたまらない。

「まいねが、話したの？ わたしのことを、裏切ったの？ まいねが……」

雪華が口を挟んできた。驚愕で、今までにないくらい乱れた口調。龍は振り返って、押された拍子に尻もちをついた雪華を一瞥する。「裏切るとか、そういうことじゃない。あの子はあなたに騙されていただけだ。事実を知れば自分の行いをきちんと正せるくらいは、ちゃんと大人です」

「騙すって何よ。わたしはあの子を、今日まで大切に育ててきたのに……」

ぼそぼそと、呟くような声だった。唇はほとんど動いていない。

その声に、また龍が答えた。

「育て方を間違えたんです。そして、咲ちゃんに対しても。——あなたはあの子が、自分の娘だと分かっていますか？」

ゆっくり、雪華は顔を上げた。虚ろな瞳が、それでもしつかり龍を捉えている。

「分かってるわ。わたしと、わたしを裏切ったあの男の娘。あの男の血が流れた娘。……わたしを愛していると言ったのに！」

ギン、と雪華の目が見開かれる。圭太自身も正常かといえばそうでなかったが、彼女はもう、《異常》なのだと思った。

その様子に龍も、もう何を言っても無駄だと思ったのだろう。

「……小柴さん。あなたのことは協会に連絡しておきました。じきに役人がここへ来ます」

「役人？ は……どうしてよ。わたしは彼を助けようとしただけじゃない。何がいけないっていうの？ 不幸を喰われれば、この子はもつと元気になれるのよ？」

「それは違う。あなただって、本当はちゃんと知っているはずだ。

それに、圭太の足を刺したのは、もう不幸喰いとかじゃ済まされない。犯罪だ」

痛みは、麻痺したように感じなくなりつつあった。でも、あの時の恐怖心だけは、まだ拭い去ることができない。

圭太の心の傷も併せ持てば、確かに雪華の行為は犯罪だろう。

だったらと、彼女は立ちあがった。無造作に放られていたカッターをすかさず拾って。

「っ、龍くん！」

「あんたがいなきやうまくいつてたのに！ 死ね！ そしてそいつにもつと不幸を植えつければいいんだ！」

両手で握ったカッターを、カッと振り上げる。威勢良く叫んで、迷いもなしに振りおろした。

雪華と龍の距離が近すぎる。よけても、きっと無傷ではいられない。そう思っ、圭太は眼を見開いた。だけど龍は、むしろよけることなく雪華を見上げている。

一瞬。たった一瞬の出来事だ。反射的に圭太は目をとじ、やがてゆっくりと開いた。

時が――止まっていた。

そう見えた。雪華の振り下ろしたカッターは、龍の喉元わずか数センチ前。そこから、ぴくりとも動かない。

やがて、龍がそこから体を離れた。よく見たら、雪華の手が小刻みに震えている。何が起きたのか、起きているのか、圭太には理解できない。

先に龍の視線が、公園の入り口を見た。

真似して見たら、そこに二人の男が立っていた。スーツ姿の厳格そうな二人だが、それだけだ。あやしいところも何も無い。

二人の男は、まっすぐ雪華の元へと歩んでいった。彼女が握ったまま離さないカッターを、やんわりと奪い、刃をしまい、ポケットへ収める。

一人が口を開いた。

「小柴雪華。規約第三十五条違反で連行する。意義はないな」
「……」

何も答えない雪華を肯定ととって、男たちは言葉通り連行していった。狭い道に無理やり停めた車に、雪華を乗せている。

終わったんだ。そう思えばどうしようもなくホッとして、圭太はそのまま意識を失った。

気がついたときは病院だった。出血が多かったため、貧血を起こしやすくなっているという圭太は、輸血を受けて、足を数針縫った。大事をとって、一週間ほど入院することになる。龍と恭平が病室にいたので、圭太は雪華のことをいろいろと話し、訊いた。

「あの人、これからどうなるの？」

「協会で査定にかけられて、それからだ。でも圭ちゃんの言うとお

り、たくさんの人の不幸を喰らってきたのなら、確実に能力剥奪だろうね」

「能力……剥奪？」

「不幸喰いの力を封じられるんだ。だけど、根こそぎ取り上げる方法はまだなくて……。視覚と脳に催眠術をかけて、記憶を左右し不幸を見えなくする。そうするとどうしても精神が不安定になるから、あとあと辛いだろうな」

と、龍が教えてくれる。どのみち、雪華は当分、協会管下のもと軟禁状態となり、咲やまいねと会うこともかなわないという。

不幸喰い協会とは、不幸喰いの一切を管轄する絶対組織だと、恭平たちが教えてくれた。基本的に不幸喰いの活動は自由だが、雪華のように不当に不幸を喰らうものが現れないよう、規約を定めて支配するのだ。恭平も龍も、そして雪華やまいねも、そこに名を登録されているらしい。

不幸喰いに不幸喰いは見分けられないらしいが、組織にはそういうことも可能な人間がいるとのことだった。

そして不幸喰いにとって、協会ほど恐ろしい場所はないらしい。

圭太にとっては普通の大人たちでも、彼らにとっては自分たちの運命を左右する閻魔も同然だ。

「咲ちゃんと、まいねちゃんは？」

圭太が心配することは分かっていたのか、恭平が素早く答えてくれた。

「今、施設に入れる手続きをしている。突然母親に会えなくなつて、さみしいだろうけど……。あの二人は強いよ」

「うん」

そうだと思う。まいねも、咲も、小さい割に、小さいからか、この上なく強い。それはたぶん、一人じゃないからだとも、なんとなくわかる。

いてくれるだけでいい人が、圭太にもいるから分かるのだ。

「伎倉に伝えて。俺がここに入院していること。あと、会いたがつ

てるって」

「連絡しておくよ」

恭平が言った。圭太は彼に笑いかける。そうして、言葉をつづけた。

「あと、退院したら、母さんの墓参りに行きたい」

「え？」

「伝えたいこと、いっぱいあるんだ。いいことばかりじゃないけど、それでも伝えたいことが、いっぱいある」

「俺も行きたいな。お前の母さんには、まだ一度も挨拶してないし、龍が同意すると、恭平も笑顔でうなずいた。

律子の墓は、彼女の実家の近くにある。恭平は、律子を自分の家の墓には入れなかった。圭太の実父である元夫を差し置いて、そんなことはできないと。

それでも、そちらの墓に入れる気もなかったらしく、律子はたった一人で眠っている。圭太が大人になったら、恭平が骨になったら、新しい墓を造って、二人と一緒にしてやろうと思った。

そして自分も、かなうならその墓に入りたいと。

圭太が亜門に連絡したのは、絶対安静だと言われた三日間が終わってからだった。

「連絡がくるとは思わなかったよ」

相変わらず、人を馬鹿にしたような話し方だ。電話越しだと特にそう思う。

「今、入院してる。足怪我してさ。今はまだ、ちゃんとペダル踏めないだろうな」

ふと、亜門の声が歓喜に染まった。

「……ピアノ、やる気になったのか？」

「そんなこと言ってないだろ。ものの例えだよ。——なあ亜門。もしも俺がピアノを弾いたら、またあんたのライバルになれるかな」

二人の空白の時間は、もう五年を超した。今更亜門に追いつけないことくらい分かっている。それでも、ライバルは周りが決めるものじゃないから。

しばらくの間を空けて、いつもより幾分穏やかな亜門の声がした。「コンクールで競うだけが、ライバルじゃないっしょ。俺は、早くお前に帰ってきてほしいよ」

「……母さんは、お前が教え子で喜んでるだろうな」

「まあね。俺みたいに優秀な生徒、きつとなかないよ。俺ね、高校出たら留学するんだ」

その言葉に、圭太は驚きはしなかった。そんな気が、なんとなくしていたのだ。亜門はきつと律子と同じ道に行く。

「挫けそうになったとき、自分と同じ信念を持つ誰かが、今もどっかでピアノを弾いてるんだって思ったら、嬉しくなんない？ また頑張ろうって、思えるよね」

独り言のような口調で亜門が言った。それは圭太だと、そう言いたいのだろうか。

何も答えない圭太に声をかけるわけでもなく、亜門がさらに言葉を続ける。

「先生は、お前が息子で喜んでるよ」

「けいたお兄ちゃん！」

退院の日。龍に迎えに来てもらって、圭太は自宅に戻った。ずいぶん懐かしい我が家にホッとしていると、また懐かしい声が聞こえてくる。

「咲ちゃん、まいねちゃん」

二人に会うのは、圭太が小柴家に訪れた日以来だ。雪華にも、そのくらいから会っていないはずだが、二人はいつもと変わらなかった。いや、心なしかあの頃より元気になっている。

「久しぶり。カウンセリング？」

「うん。しせつの先生と」

「まいねちゃんもいつも、一緒にきてるの？」

「違うよ。今日は特別。お兄ちゃんが帰ってくるから、二人でおいでって先生が言ったの」

そう言ったのはまいねだった。圭太の印象よりも、ずいぶん年相応になったような気がする。まいねが変わったのか、圭太が変わったのかはわからないが。

「お兄ちゃん、大丈夫？」

そう聞いてくる咲の視線は、圭太の右足。重症ではないが、普通に歩くには痛いので、しばらくは松葉杖だ。

これが雪華の仕業だと、二人は知らない。

「俺はちよつとドジっただけ。そういう二人は？ 施設に入ってた数日だろ？ さみしくなったりしない？」

遠まわしに問うてみる。どんな形であれ、二人と雪華を引き離れたのは圭太だ。本当は、きちんとすべてを話して詫びるべきなのかもしれない。

だけど、それがすべてでないと思うのは、二人が圭太に、屈託のない笑みを向けてくれるから。

「大丈夫だよ！ しせつのみんなはいい人だもん。それに、咲にはまいねちゃんがいる」

「あたしも。三人でいるのも楽しかったけど、今もすごく楽しい！咲がいるもん」

二人の言葉は、圭太までもを笑顔にした。

本来、雪華がいなくなつた時点でまいねも協会に保護されるはずだつたらしい。だけど恭平が掛け合い、不幸喰いが勤務している施設に入ることで話はついた。ある意味監視されることになるが、大丈夫だろう。まいねは、悪意を持って咲の不幸を喰らっていたわけではない。

それに、と咲が続けた。

「ママも、病気が治つたら帰ってくるって言つてた。手紙、もらつたんだよ」

「手紙？」

今の雪華に、そんなことが許されるのだろうか。まして、まいねでなく咲に手紙を託すというのが不思議だった。

車を止めた龍が、こちらへ来る。咲たちは、そちらにも景氣の良し挨拶をした。

やがて二人は病院内へと戻って行き、圭太たちはその背中を見送つた。

隣の龍に視線はやらず、ただつぶやく。

「手紙が来たんだって。雪華さんから」

「協会が、それっぽく書いたのを送つたんだろう。不幸喰いの存在を明かすことは違反じゃないけど、大っぴらにしたいくはないみたいだからな」

そんな気は、なんとなくしていた。あの二人も、それをいつか知る日がくるだろう。特にまいねは、これから不幸喰いの存在を、それが異端であることを、その身をもって知ることになる。

大丈夫だろうか。大丈夫かもしれない。

まいねには、咲がいる。圭太に恭平が、香苗が、亜門が、そして

龍がいるように、まいねには咲がいる。

きつと、これからもっとたくさん人間が、彼女らの支えとなるだろう。

「……強いよね」

「お前もな」

何の脈絡もなく圭太がつぶやいた言葉に、龍はそう答えてくれた。何がだ、と、圭太は龍を見返す。

「小柴さんに、いろいろ巧みに誘われたんだろう？ お前は不幸を喰われればどうなるか知ってる。それが一時とはいえ幸福しあわせなことだとも。それでも喰わせなかった、お前は偉いし、強いよ」

「……そんなんじゃないよ」

そんなんじゃない。本当は何度も惑わされた。彼女の言うとおり、雪華が独身だったら、惚れこんでいたかもしれない。

女に免疫のない圭太にとって、雪華はやはり妖艶で、惹かれた。だけど、そこから救ってくれたのは、律子の存在で。咲の存在で。ふたりがいたから、それは必ず誰かを不幸にし、いけないことだと思えたのだ。一度そう思えたら、雪華の視線が色恋の意を含んでいないのだと気がつけた。

そして、雪華に不幸を喰わそうとしなかったのは、今そばにいてくれるみんながいたからだ。

もし圭太が強いと、誰もがそう思うのだとしたら、それは確実に、龍たちがいたから。

「俺、龍くんに会えてよかった」

「何それ」

「龍くんがそばにいてくれて、俺を癒したって言うてくれて、本当によかった。コンサートに無理やり連れてかれたのも、家でピアノの音聴かされたのも、全部よかった」

そう言っただけなら、龍が意外そうに瞬く。そんな言葉は全く予想外だと、そう言いたげに。

だから、言葉が続けてやった。言いたいことはまだまだある。

「それがなかったら、俺は今でも自分は不幸だと思ってた。咲ちゃんのことも、口ばつかで何もできてなかったと思う。何より、みんなが俺のそばで、俺を心配してくれているんだって、気が付けなかった」

「へえ？　気が付けたんだ？」

どこことなく、意地悪に龍が尋ねる。同じ言葉をついこの間、龍に教えられていたのだと思いだした。

「夏休みになったら、もつというんなところ遊びに行こうよ」

「俺と二人で？」

「——みんなで！」

圭太にとって、龍は大切な存在だ。名前をつけることはできないけれど、一生そばにいてほしいと思える存在。

思えば最初から、龍は、圭太の心を掴んでいた。

——……病気だと、言われた事があるのか？

——お母さんに言われたのが、ショックだった？

——もしお前を癒したいと思ってても、それはカウンセラーとしてじゃない。柳沢龍として、お前の話を聞くし、アドバイスもする。

——お前は別に病気じゃねえよ。

初めて会ったあの日から、龍の言葉は、圭太が心の奥に閉じ込めた本音だった。誰かにかけてほしかった言葉だった。

出会えて、よかった。

圭太が幼かったあの頃、まだ心を痛めていた龍に、会えてよかった。話せてよかった。龍がカウンセラーになってくれて、不幸喰いの力に目覚めてくれて、圭太を癒したいと思ってくれて、本当によかった。

恭平が律子と結婚したことも、香苗が幼馴染だったことも、亜門がライバルで、あの日コンクールで負けたことも、——そして、律子がピアニストだったことも。

そのすべてが今の圭太を作り上げているのなら、そのすべてが、かげがえなくて、愛しくて、よかったと、思えた。

「——え？」

珍しく、圭太は病院にいた。学校から帰ってすぐに、恭平に話したいと呼び出され、資料室に入れられたのだ。

院内に足を踏み入れるのは、実に久しいことだった。それは初めてに近いほどだ。だけど、あったのはわずかな抵抗だけで、拒否感なく来ることができたのが、圭太は少し嬉しかった。

そしてそこで、意外な言葉を耳にする。

「こんなこと、いつもは誰にも言わないんだけど、君と龍くんにはきちんと話しておくべきだと思って。ああ、龍くんには朝一に話したよ」

「え、え？ 待って、もう一回言って」

「こんなこと、いつもは誰にも」

「その前！」

「……今日の診療で、咲さんの不幸を食べようと思うんだ」

食べる？ 今更どうして。と、圭太の頭に疑問符だけが浮かび上がる。あまりにも狼狽しているから、恭平にも思いが通じたようだった。

「言ってなかったっけ？ 不幸喰いは、傷ついた相手を癒し、その傷が軽くなったところに、残り少ない不幸を喰うんだって」

言われても、そんな話は聞いたことがない、と思った。それに聞いたところで、そのタイミングが圭太にわかるわけがない。

「咲ちゃん……、今不幸を喰われて大丈夫なの？」

不幸喰いの事件が解決してから、まだ一週間を過ぎたばかりだ。それまでの間に何度咲の診療をしたのかは知れないが、早すぎはないのだろうか。

「咲さんは、事実とても強い子だよ。よくよく調べれば発狂した事実もなかったし、いじめも、ひどいものでないから先生に相談した

らすぐになくなった。小学校の環境は、まだいいものではないだろうが、施設の友達がとも彼女らによくしてくれているみたいだね。いじめの傷は、完全に癒えても問題ないと思うよ」

恭平がそういうのなら、そうなのか、と思えなくもない。咲が強いということ、圭太はじめから思っていた。

それに、圭太が退院してきたあの日、あの日の咲の笑顔は、本物だったと、そんな気がするのだ。

「うん。わかった。じゃあもう、咲ちゃんの診療も終わりなんだね」

「また会いに行ってあげたらいいよ。友達は、どこにいたって友達だ」

「うん……」

友達は、どこにいても友達。そうだ。どこにいたって、気持ちが通じ合っていれば、それは本物だ。

「会えて、よかったね」

「そうだね」

「父さんにも」

「え？」

恭平が、きょとんと圭太をみる。椅子に座っている父親を見下ろして、圭太はにつこりと笑った。恭平が目を見開く。

「父さんは、母さんのことが好き？」

「……好きだよ。僕は、一生律子さんを愛したいって思ってる」

「でも、母さんと同じくらい好きな人ができたら、ちゃんと再婚してね」

意外そうに、恭平が瞬いた。

本音を言えば、圭太だって、また親が変わるなんて嫌だ。だけど、それはきつと律子の願いで。そして

「父さんが選んだ人なら、俺はきつと、その人を母さんと呼べるから」

血のつながりなんて、関係ないのだ。圭太には、恭平への情がある。肉親への気持ちとは、また少し違うかもしれないが、《親への

情だ。

そして、新しい親が出来たって関係ない。圭太は、実父と律子に変わることはない情を抱いている。離れていても、それは本物だ。まだ慣れない松葉杖を操って、圭太が資料室を出て行こうとすれば、不意に恭平に呼び止められた。

「君は、律子さんのことを――」

問われる言葉の先が読めたので、くるりと振り返る。恭平は言葉をとめた。

目を細めて、圭太が無邪気な笑顔を見せたから。

「俺も好きだよ」

同じくらいに無邪気な声が、無邪気で、素直な声が、響いた。

エピソード

目の前に、大きなホールのケーキが置かれている。圭太の好きなチーズケーキだ。今日はレアチーズで、生クリームとブルーベリーソース、そして十七本の蠟燭が、その円を彩っていた。

恭平が作ってくれたケーキ。毎年それは行われていたが、素直にお礼も言えなかった圭太にとって、今年の誕生日は新鮮だった。

「圭ちゃん、誕生日おめでとう」

「おめでとう圭太」

「おめでとう」

ハッピーバースデーの歌と、蠟燭の吹き消しが終われば、みんなが祝いの言葉をくれる。

恭平と香苗と龍。そして律子の写真に囲まれていた。

「ありがとう。なんか、十七とか言われてもピンとこないけど」

今まで十六歳だったという意識もない圭太にとっては、それをひとつ重ねるからと祝われてもしっくりこない。なのに、この儀式をこんなに嬉しく思うのは、圭太が一つ大人になり、同時に子供らしさを取り戻した証なのだろうか。

「それでも今日は、圭ちゃんがこの世に生まれた、かけがえのない日だ」

「そうだよ。今日がなかったら、——おばさんと、圭太の生みのお父さんがいなかったら、圭太は生まれてなかったんだから」

「……そうだね」

十七年前の今日。一つの命がこの世に産み落とされた。その命は確かに愛され、確かにその愛情を受けて育っていった。

なのに、どこで道を間違えたのだろう。どこで、大切なものを見失ったのだろう。

かけがえのないものは、こんなに近くにあったのに。
「生まれてこられて、よかったな」

ふと眼を閉じて、そうつぶやいた。

篠塚圭太。この境遇を、何度恨んだかわからない。律子が母親じやなかったら。母の生徒に亜門がいなかったら。恭平が現れなければ。香苗だけがプロのバイオリニストになってしまう。

そして龍の、「癒す」という言葉にも。

ふざけるなど。不可能だと、何度も思った。

でも、圭太は今ここにいる。みんなに囲まれて、自分の誕生日を祝っている。それを、どうしようもなく嬉しく思いながら。

「そうだ圭ちゃん、これ、プレゼント」

ふと口を開いた恭平から、そう言って一枚の封筒を渡された。受け取りながら、ありがとう、と言う。

「何？」

「あけてごらん」

きょとんと開いた封筒の中には、四枚のチケットが入っていた。

新幹線の行き先は、律子の故郷。

「これ……」

「律子さんのお墓参り、行きたいって言っていたから。夏休みに入ったら、みんなで行こう」

「でも、仕事は？」

「うん。そんなには空けられないけれど、一日二日なら、大丈夫。約束だろう」

「……ありがとう」

何よりもうれしいプレゼントだった。家族旅行の記憶はない。圭太が幼いころは、律子がコンサートなどで忙しかったし、そうしているうちに父が亡くなった。恭平と再婚してからは、圭太が行きたがらなくなった。

血のつながりは、一つもない。だけど、三人が圭太の家族。

何度お礼を言っても足りないくらいだ。

「ありがとう」

笑みがこぼれた。いつからか、圭太は当たり前のように笑みを浮か

べるようになった。しかし彼自身が、それを意識したことはない。

そのあと、香苗から携帯ストラップをもらった。何をあげればいいか分からなくて、と彼女は言っていたが、シルバーの十字架と羽根のついた黒革のストラップは、圭太の趣味に沿っていた。

「柳沢さんやなぎさわは？ なにか用意したんですか？」

「俺？」

香苗の問いに、龍がきょとんと聞き返した。何かを用意していたわけではないと、見てとれる。

「いいよ。プレゼント貰わなきゃ、誕生日を祝ったことにならないわけじゃない。むしろ、龍くんにはそれ以上のものをもらっているから」

そして、圭太はみんなを見回した。感謝の気持ちは、伝えても伝えきれない。そして、どういう形で伝えるのが最適か、圭太はもう分かっている。

「……俺、ピアノ弾いてみるよ」

「え？」

三人の声が重なった。予想外の言葉に驚いている様子に、圭太は表情を緩める。

「いや、圭太、待てよ。また無理して、倒れたりしたらどうするんだ」

「そうよ。いくらなんでも、急ぎ過ぎでしょ？」

「僕もそう思うな。もっとじっくり心を癒してからでも、別に遅くはないよ」

「そんなこと分かってる」

無茶な言葉だとは自負していた。それでも、圭太の意思は変わらない。

三人は家族だ。そして圭太には、加えて自分を待っていてくれるライバルがいる。

勝ち負けを競うライバルじゃない。どこかでお互いがピアノを弾いているということが、その心を支えてくれる。そんなライバルだ。

「また倒れるかもしれない。辛いだけかもしれない。けどそんなことは、やってみなくちゃ分からないだろ？ 俺は……俺の可能性を信じてみたい。それに倒れても、俺のそばには優秀な精神科医が二人もいる」

そう言えば、龍たちは言葉を失っていた。呆れたとか、そんなじゃない。圭太が希望を見出してくれたことに、わずかに放心したように。

だから、最初に喜んでくれたのは香苗だった。

「そこまで言うなら、がんばりなよ。倒れたら、あたしが看病してあげるよ」

「そこまでは頼んでないけど」

「何？」

途端に不機嫌な香苗の表情が目に入って、圭太は思わず笑った。

姉のような存在。無神経で、図太く見えるけれど、本当は誰より圭太のことに敏感な、律子にも似たひと。

「また、あのピアノの音が響く日が来るのかな」

恭平がつぶやいた。「くるよ」と圭太は心の中で返す。遠い未来かもしれない。だけど、傷はいつか治るものだ。

「圭太」

呼ばれて、圭太は龍に向きなおる。

「お前は、母さんに憧れてるんだよな」

「……うん。俺の夢は、母さんみたいなピアニストになることだから」

はつきりと告げられた声は、希望に満ちていた。あの日、もう五年も前の裏庭で、若き龍と交わした会話。

だけど違うのは、それはもう過去じゃない。圭太の道は、確実に未来へとその経路を向けだした。

篠塚圭太。誰よりもやさしい心を持った、不幸を抱えやすい体質の少年。それ故に、その心は何度も蝕まれ、小さな体は震えあがっていた。

でも、今は違う。一回り成長した少年は、自分の運命を受け入れ、乗り越える勇気を手に入れた。

大切な人がいるから。

大好きな人がいるから。

かけがえのない絆があるから。

篠塚圭太で、よかった。

何よりも、どんな運命よりも、自分が自分として生まれてこられたことが、圭太の幸福だ。しあわせ

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7770e/>

不幸喰い～僕を癒す者～

2010年10月8日14時36分発行